

北陸自動車道

糸魚川地区発掘調査報告書III

たて の うち  
立ノ内遺跡

1988

新潟県教育委員会

北陸自動車道

糸魚川地区発掘調査報告書Ⅲ

たて の うち  
立ノ内遺跡

1988

新潟県教育委員会

## 序

北陸自動車道建設に伴う発掘調査は、昭和47年以来継続的に実施され、昭和61年度の糸魚川地区の発掘調査を最後として、全てを終了することができた。そして、道路建設も着々と進み、昭和63年8月には全線開通の見通しとなつた。

本書は、この自動車道建設に伴う糸魚川市立ノ内遺跡の発掘調査の報告である。当初より立ノ内という地名から館の存在が予想されたが、調査の結果、その予想を裏付けるように戦国時代の掘立柱建物跡を中心とした館跡が確認された。近年、県内において中世館跡の調査例は増加しつつあるが、西頸城地方では数少ない調査例の一つとして貴重な資料を提供してくれたと言える。

また、これより古い平安時代の大形製塩土器の破片も出土した。製塩土器は佐渡では、比較的多くの出土を見ているが、越後では数少ないものである。これらの資料が、西頸城地方及び県内の古代・中世史研究の一助となれば幸いである。

最後に、本調査に参加された地元の方々及び多大な御協力を賜った糸魚川市教育委員会、計画から調査実施に至るまで格別の御協力を賜った日本道路公団新潟建設局、同糸魚川工事事務所の各位に対し、衷心より謝意を表する次第である。

昭和 63 年 3 月

新潟県教育委員会

教育長 田 中 邦 正

## 例 言

1. 本書は、北陸自動車道の建設に伴う新潟県糸魚川市に所在する立ノ内遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は昭和60年度、61年度の2ヶ年にわたって実施し、発掘面積は昭和60年度6,200m<sup>2</sup>、昭和61年度2,500m<sup>2</sup>の計8,700m<sup>2</sup>である。報告書の刊行は昭和62年度である。
3. 発掘調査は新潟県が日本道路公団より受託し、新潟県教育委員会が主体となって実施した。調査体制は以下のとおりである。

### 〔昭和60年度〕

総括	新潟県教育庁文化行政課長	高橋 安	高橋 安
管理	同 課長補佐	田中 浩一	田中 浩一
庶務	同 主事	高橋 幸治	主事 土田 瑞
調査指導	同 埋蔵文化財係長	中島 栄一	中島 栄一
調査担当	同 文化財専門員	高橋 保	高橋 保
調査職員	同 文化財専門員	竹田 和夫	文化財専門員 高橋 保雄
調査職員	同 文化財専門員	小池 義人	文化財調査員 遠藤 孝司

### 〔昭和61年度〕

4. 出土遺物は一括して新潟県教育委員会が保管している。遺物の注記は略号として「立」を付し、出土地点及び一連番号を記した。
5. 本書で示す方位はすべて真北である。磁北は真北から西偏約7度である。
6. 遺構については、掘立柱建物跡—S B、土坑—S K、溝—S D、柵列—S A、その他—S Xの略号を用いた。
7. 遺物番号は、平安時代以前、中世以降に分け、それぞれ通し番号を付し、写真番号もこれによった。
8. 掘立柱建物跡については、調査終了後図面上で確認・訂正したものがあり、写真図版と異なるものがある。
9. 土器実測図において、須恵器・珠洲焼については断面を黒とした。
10. 遺物整理等報告書の作成は、高橋保があたり、また執筆分担は、第6章1が高橋保雄、高橋保のはかは高橋保があたった。
11. 発掘調査から本書の作成にいたるまで、下記の方々から貴重な御教授を賜った。厚く御礼申し上げる。

岸本雅敏、金沢和夫、金子拓男、木島勉、計良勝範、小島正巳、小島幸雄、近藤義郎、品田高志、関雅之、土田孝雄、戸潤幹夫、早津賢二、本間嘉晴

## 目 次

第1章 発掘調査に至る経過	1
第2章 遺跡の位置及び地理的環境	3
第3章 歴史的環境—上越地方における城館跡の分布—	6
第4章 発掘調査	9
1. グリッドの設定	9
2. 調査の経過	9
3. 層序	11
4. 遺跡の概要	12
第5章 平安時代以前の遺構・遺物	14
1. 遺構	14
2. 遺物	16
第6章 中世の遺構・遺物	21
1. 遺構	21
2. 遺物	41
第7章 まとめ	52
1. 平安時代以前の遺物・遺構	52
A. 遺物	52
B. 遺構	52
C. 県内の製塩土器について	52
2. 中世の遺構・遺物	60
A. 遺物及び窯跡の年代について	60
B. 遺構について	63
C. 遺跡の範囲及び性格について	63
3. 結語	66
引用・参考文献	67

## 挿 図 目 次

第1図 確認調査トレーンチ設定図	1
第2図 遺跡の位置及び周辺の城館跡等分布図	2
第3図 遺跡付近の地形	4
第4図 早川流域の地形分類図	5
第5図 上越地方における城館跡分布図	7
第6図 グリッド設定図	9
第7図 土層断面図	10, 11
第8図 遺構配置模式図	13
第9図 土坑実測図	15
第10図 平安時代遺構配置図	16
第11図 遺物実測図	18
第12図 製塙土器実測図	19
第13図 S D10、S D17土層断面図	21
第14図 土坑実測図	22
第15図 土坑、集石実測図	24
第16図 土坑実測図	25
第17図 掘立柱建物跡実測図	26
第18図 掘立柱建物跡実測図	28
第19図 遺構配置図（B～E-4～5付近）	29
第20図 掘立柱建物跡実測図	31
第21図 掘立柱建物跡実測図	32
第22図 掘立柱建物跡実測図	34
第23図 掘立柱建物跡実測図	35
第24図 掘立柱建物跡実測図	38
第25図 掘立柱建物跡実測図	39
第26図 遺物実測図	42
第27図 遺物実測図	43
第28図 遺物実測図	45
第29図 遺物実測図	46
第30図 遺物実測図	48

第31図 遺物実測図	49
第32図 遺物実測図	50
第33図 銭貨拓影図	51
第34図 出山遺跡出土製塩土器底径分布図	53
第35図 出山遺跡出土土器	54
第36図 各地出土の製塩土器	56
第37図 県内における製塩土器出土遺跡分布図	59
第38図 土師質皿口径分布図	61
第39図 土師質皿グリッド別出土分布図	62
第40図 立ノ内遺跡範囲推定図	64
第41図 遺跡付近の字名	65
第42図 遺構全体図	折込み

## 図 版 目 次

- 図版 1 早川流域空中写真  
 図版 2 遺跡空中写真（日本道路公团提供）  
 図版 3 捨立柱建物跡群（昭和61年度）  
 図版 4 1. 遺跡より不動山城を望む 2. 遺跡より金山城を望む 3. 金山城より早川流域を望む  
 図版 5 1. 遺跡近景（南より） 2. 昭和60年度発掘状況（金山城より） 3. 昭和61年度発掘状況  
 図版 6 1. 土層断面（D 5 区） 2. 土層断面（B 5 区） 3. 土層断面（D 5 区） 4. 柱穴断面（D 5 区） 5. 土層断面（F 5 区） 6. 土層断面（F 5 区） 7. SX 2（製塩土器） 8. SX 3（製塩土器）  
 図版 7 1. SX 4（製塩土器） 2. SX 5（製塩土器） 3. C 4 区発掘状況 4. C 5 区焼土確認状況 5. SX 20（羽口） 6. SX 21（焼土） 7. SX 21 8. SX 21  
 図版 8 1. SX 21 2. SX 33 3. SX 33 4. SX 33 5. SX 34 6. SX 34 7. SX 34 8. SX 35  
 図版 9 1. SX 35 2. SX 35 3. SK 8 4. SK 8 5. SK 9 6. SD 10, SD 17 7. SD 10 8. SK 11  
 図版 10 1. SK 18 2. SK 18 3. SK 18 4. SK 18 5. SK 19 6. SK 22 7. SK 22 8. SK 24  
 図版 11 1. SB 27 2. SK 44 3. SK 44 4. ピット 5. 発掘風景 6. 発掘風景 7. 発掘状況

(昭和61年度) 8.発掘状況(昭和60年度)

図版12 1.SB28 2.SB29 3.SB29・30・SK22

図版13 1.SD26 2.SD10・17 3.SD10・SX13

図版14 1.SB15 2.SB23 3.SB30

図版15 1.SB37 2.完掘状況(昭和60年度) 3.完掘状況(昭和61年度)

図版16 1.火碎流堆積状況(東側崖線) 2.火碎流堆積状況(東側崖線) 3.火碎流堆積状況(東側崖線)

図版17 1.縄文土器、古墳時代の土師器 2.土師器 3.須恵器(3:1)

図版18 1.製塙土器 2.製塙土器(3:1)

図版19 1.製塙土器 2.製塙土器(3:1)

図版20 1.須恵器 2.珠洲焼 3.同上裏(3:1)

図版21 1.珠洲焼 2.珠洲焼他 3.同上裏(3:1)

図版22 1.土師質皿 2.土師質皿 3.土師質皿(3:1)

図版23 1.土師質皿 2.土師器 3.左:珠洲焼 右:土師器 4.土師質皿(3:1)

図版24 1.土師質皿 2.瓦質土器他 3.砥石他(3:1)

図版25 1.土師質皿 2.土師質皿 3.土師質皿(2:1)

図版26 1.青磁 2.青磁・白磁、染付他 3.同上裏(2:1)

図版27 1.石臼、羽口(平安)他 2.石製品 3.石製品(144、4:1、他3:1)

図版28 1.越前系陶器(3:1) 2.左:錢貨(2:1) 右:志野焼他(3:1) 3.近世染付(3:1)

図版29 出山遺跡 1.製塙土器 2.同上裏 3.製塙土器(2:1)

図版30 出山遺跡 1.製塙土器(底部) 2.脚台 3.脚台 4.脚台(2:1)

## 第1章 発掘調査に至る経過

立ノ内遺跡は糸魚川市大字道明字立ノ内に所在する。

当遺跡が明確に遺跡として把握されたのは、今回の北陸自動車道建設による確認調査によつてであるが、それ以前すでに館跡として可能性の指摘はなされていた。昭和42年に出版された『糸魚川市における城館址一調査報告第1集』(植木1967)によると、金山城の項において「地名から察する館の位置」として以下のように述べている。「金山城周辺の地名によると梶屋敷・田伏・大和川には館跡らしい地名を見ることができないが、田屋村に於いて、立壁・立ノ内の地名が存在する。いわゆる金山城の東側の裾にあり近くに早川をひかえた所に位置している。地名図による立ノ内の広さは、東西120m、南北210mの大きさをもち、館跡と推定される」。また翌年には現地調査を行い、位置図を示している(植木1968)。この植木の示した位置が、今回の発掘調査を実施した所であり、地名から推定した館跡の位置が裏付けられたわけであるが、当時土器等の採集はなかったようである。

そして昭和58年4月に北陸自動車道建設に係る第6次・7次区間の分布調査が行われ、この時に珠洲焼片等が表探され、初めて中世の遺跡であることが確認された。その後昭和59年9月及び11月に確認調査を実施した(第1図)。その結果、遺構は明確でなかったものの各トレンチにおいて珠洲焼片や土師質皿等が出土し、特にaトレンチにおいては、土師質皿がまとまって出土した。そして当初予定のほぼ全域が遺跡であることが明確となった。

昭和60年4月より発掘調査に入ったが、未買収地が残っていたため調査を完了することができず、翌61年にも継続調査を行い、全域の発掘調査を完了した。



第1図 確認調査トレンチ設定図

1) 館の概念については、明確なものがない。ここでいう館についても軍事的側面の強いものを示すが、一般的な意味において「館」とする。



第2図 遺跡の位置及び城館跡等分布図 [▲塚 ■鎧 △寺院跡 □中世遺物包含地] (1/10万)  
 (国土地理院 昭和53年発行 5万分の1 「糸魚川」「小瀬」を使用)

## 第2章 遺跡の位置及び地理的環境

遺跡の所在する糸魚川市は新潟県の西部に位置する人口約3万5千人の都市である。この立ノ内遺跡は市の中心部の東約5kmの早川沿いに所在し、河口から約1.5kmの位置にある。地質構造的には姫川にそっていわゆる糸魚川一静岡構造線が南北に走り東北日本と西南日本とを二分していることはあまり有名である。また、この構造線を境として、東を西頸城山地、西を白馬山地として地形区分している(新潟第4紀研究グループ1971)。立ノ内遺跡は、この西頸城山地にある活火山の焼山に源を発する早川左岸に位置する。そして遺跡ののっている標高約30mの段丘状の地形は鈴木(1983)によると自然堤防及び敵高地に分類されている。また表層地質図(鈴木1983)では、氾濫源堆積物となっている。しかし、発掘調査により遺跡の基盤層は、焼山火山の火砕流堆積物であることが判明した<sup>1)</sup>。この結果から遺跡と同一台地上にある田屋集落及び鈴木の分類による自然堤防及び敵高地上にあるヒバノ木、堀切、西谷内集落は、この焼山火山火砕流堆積物上にある可能性が高いと考えられる。焼山の活動史については、早津の研究(早津1983)に詳しいが、それによると、焼山の活動史を4期に区分している。第1期(約3000~1000年前)は、火山活動開始から早川火砕流噴出まで、第2期(約1000年~600年前)は、早川火砕流堆積物から坊々抱岩溶岩流までである。この早川火砕流は、焼山火山の中では最大の体積を有する火砕流ということである。古記録<sup>2)</sup>には、仁和3(887)年、永祚元(989)年に噴火の記録が見られる。第3期(約600年~220年前)は現在の円頂丘の形成期に対応するものである。古記録では、康安元(1361)年の噴火が見られる。第4期はそれ以降現在に至るまでで、現在も活動を続いている。

さて、当遺跡はこの火砕流堆積物にのっていることが判明したわけであるが、当遺跡で出土している土器で最古のものは、縄文時代晩期で約2000年前にあたり、その次は古墳時代で約1600年前である。このことから基盤層の火砕流は第1期に相当するものと考えられる。遺跡で観察した限りにおいても4m以上の堆積を示しており、焼山火山から18kmも離れ、また河口までわずか1.5kmの距離であることを考えると大規模なものであったことがわかり、早川流域全体がすっぽりと覆われてしまったことが窺える。早川流域において、段丘の発達は顕著でなく、新町、田中集落付近に見られる程度であり、海川や姫川流域に比べても非常に少ない。また、遺跡の分布を見ても、中世以前の遺跡は非常に少なく焼山火砕流のことを考慮するなら3000年前以前の遺跡が、この火砕流により破壊又は被覆されてしまった可能性も考えられる。断面観察

1) 当地方の地質に詳しい早津賢二、小島正巳両氏に来訪いただき現地において御指導を受けた。

2) 古記録関係も(早津1983)によるが、これらは「伴麻文書、堀口家の林蔵文書、佐古早川谷之繪図」によるものであり、史料的には慎重性を要する。



第3図 遺跡付近の地形（糸魚川市役所編集・製図1／10,000を使用）

(図版16)によると、下部に大小の礫が混った層があり、碎屑物に混じって河床礫も含まれており、火碎流というより泥流に近いものと考えられる。またその上面には砂が堆積し、最上面に火碎流が見られる。いずれも水平堆積し、浸食が見られないところからすると、既統的に堆積していったことが窺える。遺跡全体の中では、姥川よりの6ラインから西側の一帯低くなっている部分には、火碎流の堆積は見られず、姥川により浸蝕を受けたことがわかる。

次に第2期とされる早川火碎流であるが、早津によると、焼山火山の中では最大級の体積を有するもので河口まで至ったとなっているが、遺跡の中では確認できない。また、1段低い6ライン以下においても見られない。この6ライン以下においては、9~10世紀代の遺物が確認されており、少なくとも遺跡地には、この早川火碎流は及ばなかったと考えられる。

焼山火山の層序表

		地層	備考	
		火山噴出物	その他	
完 成	第4期	新期火碎流堆積物 大谷火碎流堆積物上部層	笠倉段丘疊層	噴気活動 水蒸気爆発(1974) 1962-3 1949 硫黄流出(1852) 火碎流の噴出(1773)
	第3期	大谷火碎流堆積物下部層 円頂丘溶岩流		溶岩円頂丘の形成(1361) 湯川内面 さいノ河原
新 世	第2期	坊々抱岩溶岩流 一ノ倉溶岩流 前山溶岩流 第一溶岩流 早川火碎流堆積物	火打川原湖成層	大量の溶岩・火碎流の噴出 (989, 889) 八龍池 大平面
	第1期	真川溶岩流 焼山川火碎流堆積物 前川火碎流堆積物	前川土石流堆積物	火山活動の開始

(早津1983 P41) より抜粋



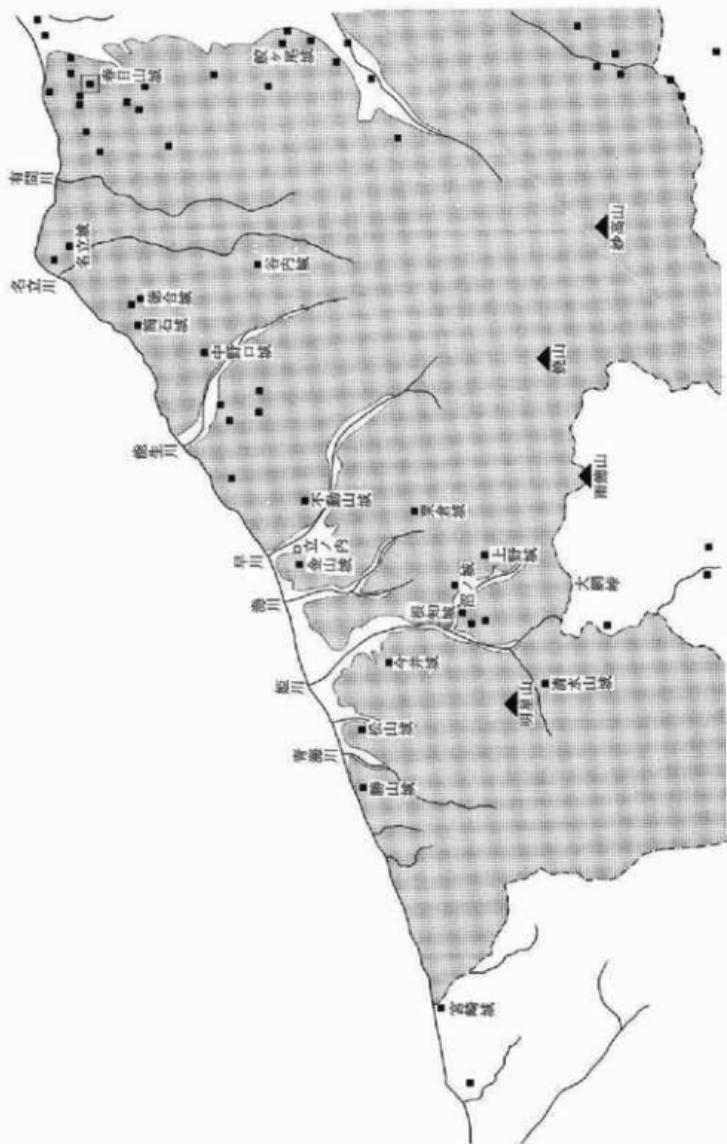
第4図 早川流域の地形分類図  
(鈴木1983を使用)

### 第3章 歴史的環境—上越地方における城館跡の分布—

中世における上越地方は、越後の歴史の中でも最もはなばなしく全国的な規模で表舞台に登場した地域と言える。

この上越地方は、越後においては対外的に非常に重要な位置を占めており、それだけに山城の配置に関しても慎重さがうかがわれる。この地域においては大きく3つの街道ルートがある。一つは春日山城から日本海側を北陸（越中）にぬけるルート（加賀街道）、一つが加賀街道から轟川ぞいを信濃へ通ずるルート（松本街道）、そしてもう一つが春日山から妙高を通り信濃へぬけるルート（北国街道）である。分布図に示した城館跡は、中世数世紀にわたる結果としての分布であるが、図示したもので、およそ70ヶ所にのぼり、これらの大部分は上杉謙信の時代（いわゆる戦国期）前後に築造されたものと考えられる。糸魚川を中心として見た場合、まず北陸道ルートでは勝山城が重要な位置を占める。勝山城は青海町落水に所在し、別名落水城とも称せられている城である。日本海側にきり立つようにせり出した地点にあり、山頂からは西は親不知、越中の宮崎まで見通すことができる。一方東は糸魚川の轟川河口はもちろんのこと不動山城や徳合城まで見通すことができる。この城の築城年代は明らかでないが、16世紀中ばの上杉謙信、景勝の頃と思われ、春日山城の支城として、越中国に対する防備として、また親不知をひかえ、海上交通に対しても大きな役割をはたしていたものと思われる。なお井戸跡からは、茶筅、木札、木箱、土師質土器等が出土している（植木1980）。またこの勝山城と同様の役割をはたしたと思われる城に同じく青海町の松山城がある。轟川ルートで信州へぬける松本街道沿いでは、根知城が大きな役割をはたしている。この城は轟川と根知川に挟まれた、分流地点に位置している。ここは3地点において遺構群が認められ、それぞれ上城山城、栗山城、根小屋城と称されている。各々は独立した形で郭群を形成しているが、最終的な結果としてこのようになったのである、最初から3城があったとは思われない。この中ではやはり根小屋城が中心的な遺構群を残している。遺構としては、郭跡17、削平地201、掘切16、堅堀15である。また殿屋敷と称される郭跡には北側に石垣が残存している（植木1980）。築城年代については明らかでないが、文献等からは上杉謙信の時期となるが、清崎城ができるまで存続したと考えられている。この根知城は、上杉景勝の時代に武田勝頼の妹菊姫が景勝夫人として春日山に嫁ぎ、2人が義兄弟となった時に、武田勝頼の弟仁科盛信が根知城勤番を命ぜられており、武田方の武士が入ったこともあったようである。

近世に入ても、この地区は虫川番所、山口番所（それ以前は仁王堂に所在した）（第2図）がおかれたことでも、このルートの重要性をうかがうことができる。この狭い地域で番所が2ヶ所ということは、信州から入ってくるルートが2ヶ所あったことをあらわしている。つまり山



第5図 上越地方における城館跡の分布図（昭和54年度版 新潟県道地図より）

口番所の方は大網峠を越えて入るルートであり、虫川番所は小滝ルートである。この2つの番所は共に、上杉謙信の時代に信州との往来を規制するため設けられたのであり、近世塙の道と称せられたように塙流通の重要な位置を占めていたことはもちろんである。その他、この根知城の根知川を挟んだ対岸には沼ノ城跡、上野城跡があり、根知城に対して補完的な役割をはたしたものと考えられる。また小滝川上流には、清水山城跡がある。標高660mという高位にあたるため不動山城を眺望できる。

立ノ内遺跡の所在する早川谷においては、糸魚川で最大規模をほこる不動山城跡がある。この早川谷は他地域にぬけるルートとしては使用されていなかったとみて、この不動山城跡より上流に城跡は存在しない。この早川流域には焼山火山もあり、またほとんどが氾濫源であり、遺跡数は縄文時代から通してもそう多くはない。中世以降はほぼ現在の集落と重なるところが多いと考えられる。この城は独立した円錐形の山城で、早川流域一帯を眺望でき、勝山城、根知城等を見ることができる。やはり戦国期の城で、上杉家譜代の家来としてつかえた山本寺氏の居城とされている。遺構としては郭22、削平地438、堀切4、堅堀19、土壘1、石垣8、井戸2と数が多く規模の大きさを知ることができる（植木1980）。また付近は城館に関する地名も多く残っており、「本丸、二ノ丸、ダイガミネ（代官面）、烽火場、大倉、千人溜、倉屋敷、御殿跡、倉跡、鎧研場、馬捨場、人切場、土藏屋敷」等がある。また要害集落には「御殿屋敷跡」と呼ばれている場所も存在し、また井戸跡からは碗、膳の破片が多く出土したと伝えられている。史料的には戦国期を測ることはできないが、これだけの好条件の場所が利用されなかつたとは考えられず、おそらく南北朝期まで測るものと考えられる。この不動山城の支城とされるのが金山城である。金山城は位置的には海岸ルートを見下す位置にあり、糸魚川の市街地を一望でき、東西の海岸ルート監視には最適の場所である。遺構は郭20、削平地62、堀切5、堅堀2、井戸1等がある（植木1980）。城の規模からするとそう大きいものではない。城は立ノ内遺跡のある東側が「立壁」という地名が示すように急崖となっており、西側は比較的のだらかである。

早川谷から春日山城の間においても数多くの城館跡が見られるが、ちょうど中間の位置を占めるのが、能生町の徳合城である。この徳合城より海岸寄りには筒石城がある。徳合城はかなりの規模を有しており、郭39、削平地195、空堀5、泥田堀1、土壘3、井戸2（植木1980）等の遺構が確認されている。また地名としても、「倉屋敷、弔屋敷、墓塚、家堀、木戸口、一の谷、泥田堀、傾城屋敷」等が残っている。位置的には海岸部よりやや入った所にあり春日山城の背後の進入ルートを守ることができる。名立川の上流には谷内城も築かれている。また北国街道ぞいにも鮫ヶ尾城をはじめ数多くの城館跡が存在する。春日山城を中心として見た場合、北国街道ぞいには鮫ヶ尾城、北陸道ぞいには、徳合城、不動山城、根知城、勝山城、越中宮崎城がほぼ等間隔に配置され、各地域の主要な城館として役割をになっていたものと考えられる。

## 第4章 発掘調査

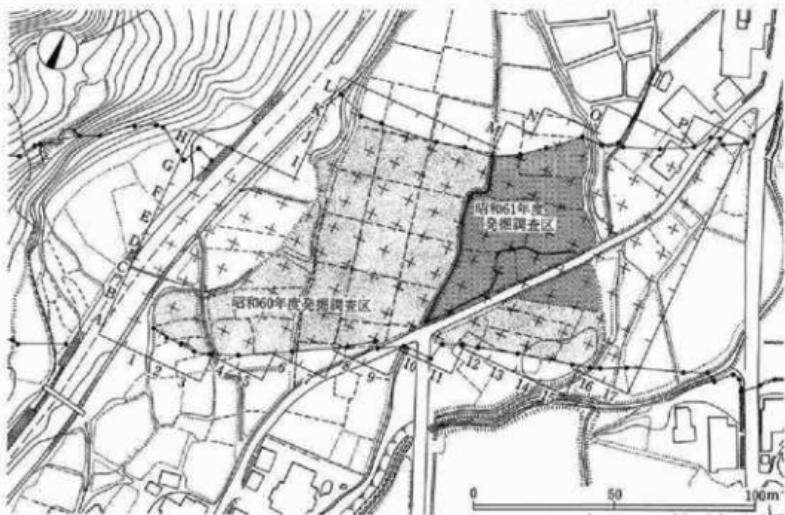
### 1. グリッドの設定

グリッドは日本道路公団センター杭、STANo332+40を基点として、南北にY軸、東西にX軸を設定して行った。1グリッドは10mメッシュとし、Y軸はアルファベット(A~)、X軸には数字(1~)を用いた。そしてその中をまた2mメッシュの25等分に細分して小グリッドとした。したがって小グリッドまではG 5-5区というように呼称することにする。

### 2. 調査の経過

#### 昭和60年度

昭和60年度は10ラインに沿ってほぼ南北に走る用水路の西側及び、工事用道路部分となるF-H-11~16区の発掘調査を実施した。用水の西側については、ほとんどが水田であり、浅かつたため耕作土については重機排土とした。また土捨場は姥川右岸の一級低い旧河川蛇行地とした。重機はバックホー2台により掘削、ブルドーザー1台により排出ということで、1日約400~500m<sup>3</sup>の割合で行った。下面是火砕流により平坦でなく、一様な掘削はできず部分的にか



第6図 グリッド設定図（日本道路公団法線図原図）

## 2. 調査の経過

なりの起伏を有することとなった。

4月22日～4月25日 発掘作業を開始する。南東側を通る農道の東側から調査を開始したが、この農道より東側については堆土を東側の段丘下に排出することとする。なお段丘下には、段丘にそって用水が通っており、堆土により埋ってしまうため、木製の蓋を設置することにした。柱穴と思われるビット、土師質皿が出土する。

5月8日～5月18日 この週においてバックホーによる掘削をほぼ完了する。調査は（F～H-11～16）区と（B～E-3～6）区に分けて調査を行う。（F～H-11～16）区においては、土師質皿、珠洲焼片等が出土し、また柱穴と思われるビットも検出された。（B～E-3～6）区では平安時代と思われる製塩土器が出土し、またビットが多数検出され掘立柱建物跡を確認する。

5月21日～5月24日（D～E-7～8）、（F～G-11～12）区発掘、遺構掘り。

5月27日～5月30日（D～G-5～8）区精査、遺構掘り。

6月3日～6月7日（E～K-9～10）区精査、遺構掘り。

6月10日～6月14日（B～C-4～5）区ベルト部遺構掘り、各掘立柱建物跡の写真撮影を行う。

6月18日～6月22日 金山城から写真撮影を行う

6月24日～7月8日（B～C-4～6）区焼土遺構の発掘、写真撮影を行い調査を終了する。

### 昭和61年度

4月14日～4月19日 バックホー2台により作業を開始する。植木部分を除いて、延べ5台で表土剥ぎを完了する。（K～L-12～14）区から発掘を開始する。火碎流により凹凸が激しく、遺構の判別は困難をきわめた。かなりビットがあるようであるが、遺物は非常に少ない。

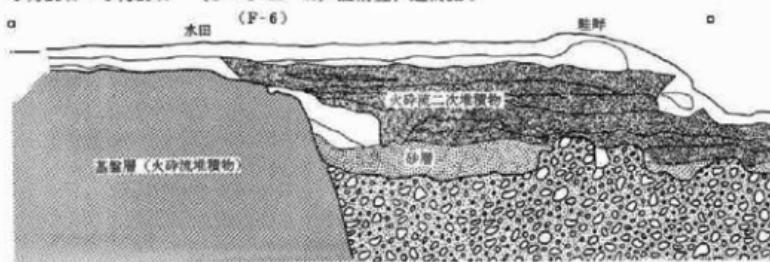
4月21日～4月24日 （J～N-10～13）区において 精査、遺構確認を行う。並ぶビットはあるが、確実な掘立柱建物跡として把握されるものはまだない。

5月6日～5月10日 （J～N-10～13）区のビット掘りを行う。建物としての把握はいまだできず。

5月12日～5月17日（H～J-12～15）区の発掘を行う。掘立柱建物跡5棟を確認する。

5月20日～5月24日 （H～J-10～13）区発掘

5月26日～5月29日 （F～I-11～15）区精査、遺構掘り

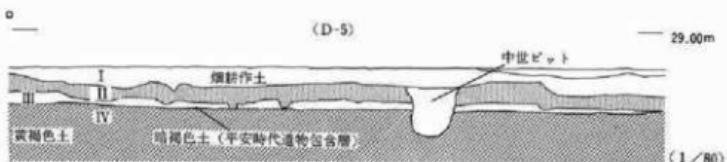


第7図8 土層断面図

6月2日～6月5日 発掘、実測を完了する。3日にセントラル航業によりクレーンを使用し、写真撮影を行う。またそれと同時に金山城からも写真撮影を行い、現場作業を完了する。

### 3. 層序

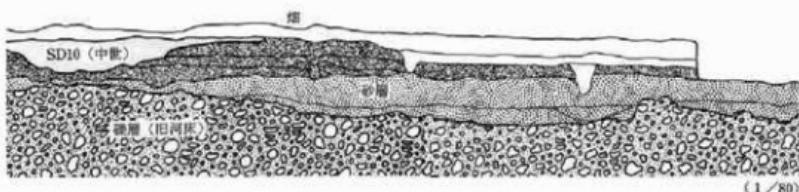
当遺跡はすでに述べたとおり焼山火山の火砕流堆積物上に立地している。現状は水田及び畑地であり、開墾時にこの火砕流による大形崩壊物をかなり除去している。いわゆる石抜き穴と思われるものが多数認められる。したがって火砕流の認められる上段(5、6ラインより東側)においては岩盤までは30～50cm程度しかなく地表面まですべて擾乱を受け、地山ブロックが多数浮いた状態で認められた。したがって上段においては①層耕作土、②層が火山灰土に近いバサバサした黄灰色土や暗褐色土、地山ブロックが混在した状態で堆積しており、プライマリーな堆積状態の所は少ない。一方下段においては、その層序をよく残している。基本的に層序をとらえると、I層耕作土、II層火山灰堆積土、III層暗褐色土、IV層地山黄褐色土となる。このうちI層耕作土は暗褐色土であるが、II層の火山灰土と混在している場合が多い。II層の火山灰土は灰褐色土で粒子が粗く砂状で粘性なくバサバサしている。この層を切って中世の遺構が見られる(第7図⑥)ことから、この火山灰土が少なくとも15世紀以前の堆積であることがわかる。第III層は、しまりがあり、やや粘性をもっている。この層の下部において平安時代の遺物が認められ、平安時代の遺物を含む層とすることができる。そうすると第II層の火山灰は10世紀～15世紀の間に堆積したことになろう。つまり早津による第3期の堆積物ということができ、文献による康安元年(1361)の噴火があつてはまると判断される。第7図⑥はF-5～6ライン南壁の土層断面図である。F-6の高位が火砕流堆積物、低い方が礫及び砂層であり、姥川の旧河



第7図⑥ 土層断面図

(F-5)

29.00m



#### 4. 遺跡の概要

床であり、段丘と/orすることができる。この段丘の上面に火碎流と暗褐色土等の混在した二次堆積と思われる層があり、それを切って中世の溝S D10が走っている。このように層序は一様でない。

#### 4. 遺跡の概要

立ノ内遺跡は先述のように糸魚川市大字道明字立ノ内に所在する。以前より金山城跡の居館跡と推定されていた所でもある。調査の結果縄文時代、古墳時代、平安時代、中世、近世の遺物が検出された。縄文時代では晩期後半の土器が1個体出土したが、造構は検出されていない。古墳時代についても壺1個体の出土をみたが、造構は検出されなかった。またこの壺の出土した付近から、以前こここの土地所有者が、滑石製の勾玉を採集している。次に平安時代の造構・遺物がある。造構としては、焼土が3地点において確認された。これらは、周辺から製塩土器が出土していることから製塩によるものと判断される。その他土師器、須恵器、羽口等が出土している。10~14世紀にわたっては生活の痕跡は認められない。これはおそらくこの時期に活発だったとされる焼山の火山活動も関係していたと考えられる。この遺跡で多くの造構の残っていたのは中世である。15世紀~16世紀ころの戦国時代盛期のものである。検出された造構には、掘立柱建物跡26棟をはじめとして柵列、溝、土坑等があり、館跡であることが判明した。遺跡地は法線外にも広がっていることは明らかで、相当数の建物跡が存在したことが予想される。しかし、調査区の中で堀、土塁等は確認されておらず、また井戸跡についても確認されなかつた。遺物は造構数の割に少ない。珠洲鏡を中心とした土師質土器、瓦器、越前焼、美濃・瀬戸系陶器、中国製陶磁器、近世陶磁器等が出土したが、細片が多く図示できたものは少ない。

造構一覧表

造構No	グリッド	時代	造構No	グリッド	時代	造構No	グリッド	時代
S B 1	C - 5	中世	S X 19	G - 9	中世	S B 37	H - I - 5 - 6	中世
S X 2	B - 4	平安	S X 20	C - 4	平安	S B 38	J - K - 10 - 11	中世
S X 3	B - 4	平安	S X 21	B - 4	平安	S B 39	K - 11 - 12	中世
S X 4	B - 4	平安	S K 22	J - K - 7	中世	S B 40	K - 11 - 12	中世
S X 5	B - 4	平安	S B 23	G - H - 13 - 14	中世	S B 41	L - M - 11 - 12	中世
S X 6	C - 4	平安	S K 24	G - 5	中世	S B 42	L - 10	中世
S B 7	C - 5	中世	S B 25	E - F - 5	中世	S K 43	L - 10	中世
S K 8	C - 4	中世	S D 26	I - J - 5 - 8	中世	S K 44	L - 10	中世
S K 9	B - C - 5	中世	S B 27	J - K - 9 - 10	中世	S K 45	L - 10	中世
S D 10	D - G - 5 - 6	中世	S B 28	F - G - 7	中世	S B 46	J - 10	中世
S K 11	C 5	中世	S B 29	K - 7	中世	S B 47	J - 9 - 10	中世
S B 12	D - E - 5 - 6	中世	S B 30	J - 7	中世	S B 48	H - I - 12	中世
S A 13	E 5	中世	S B 31	D - E - 5 - 6	中世	S B 49	H - 11 - 12	中世
S B 14	C 5	中世	S B 32	D - E 5 - 6	中世	S B 50	L - 11	中世
S B 15	D - E - 7 - 8	中世	S X 33	B - 5	平安	S B 51	D - E - 8	中世
S D 16	E - 6 - 7	"	S X 34	C - 5	平安	S A 52	B - C - 4 - 5	中世
S D 17	F - 5	"	S X 35	C - 5	平安	S A 53	B - C - 4 - 5	中世
S K 18	K - 9 - 10	"	S B 36	B - C - 4	中世	S A 54	C - 5	中世



第8図 遺構配置模式図

## 第5章 平安時代以前の遺構・遺物

### 1. 遺 構

平安時代に属すると考えられる遺構は、製塩土器の出土したSX2～6及び、焼土の検出されたSX33～35それに羽口の検出されたSK20がある。

#### SX2（第10図）

B-4区に所在する。塩製土器1個体（第12図21）が出土している。大形の破片が多く、径1mくらいの広さに散在している。焼土は存在しない。

#### SX3（第10図）

同じくB-4区に所在する。製塩土器の細片が出土している。やはり焼土、掘り込みは認められない。

#### SX4（第10図）

B-4区に所在する。製塩土器の口縁部及び底部破片が散在している。

#### SX5（第10図）

B-4区であるが、SX4とは1mくらい離れて存在する。土師器甕、鉢等が出土している。焼土等遺構は認められない。

#### SX6（第10図）

C-4区に所在する。やはり土師器甕の口縁部破片が出土している。

#### SX21（第9・10図）

B-4区に所在する。焼土を含む土坑が2基存在する。北側の土坑は110×70cmの楕円形を呈する。中央に浮いた状態で焼土が存在し、その下に焼土、炭化粒を含む暗褐色土がある。南側の土坑は中世のピットに切られている。約1.5mくらいの円形を呈するものと考えられる。深さ約20cmで焼土が堆積している。この2つの土坑を中心として、まわりから、製塩土器、土師器甕等が出土している。

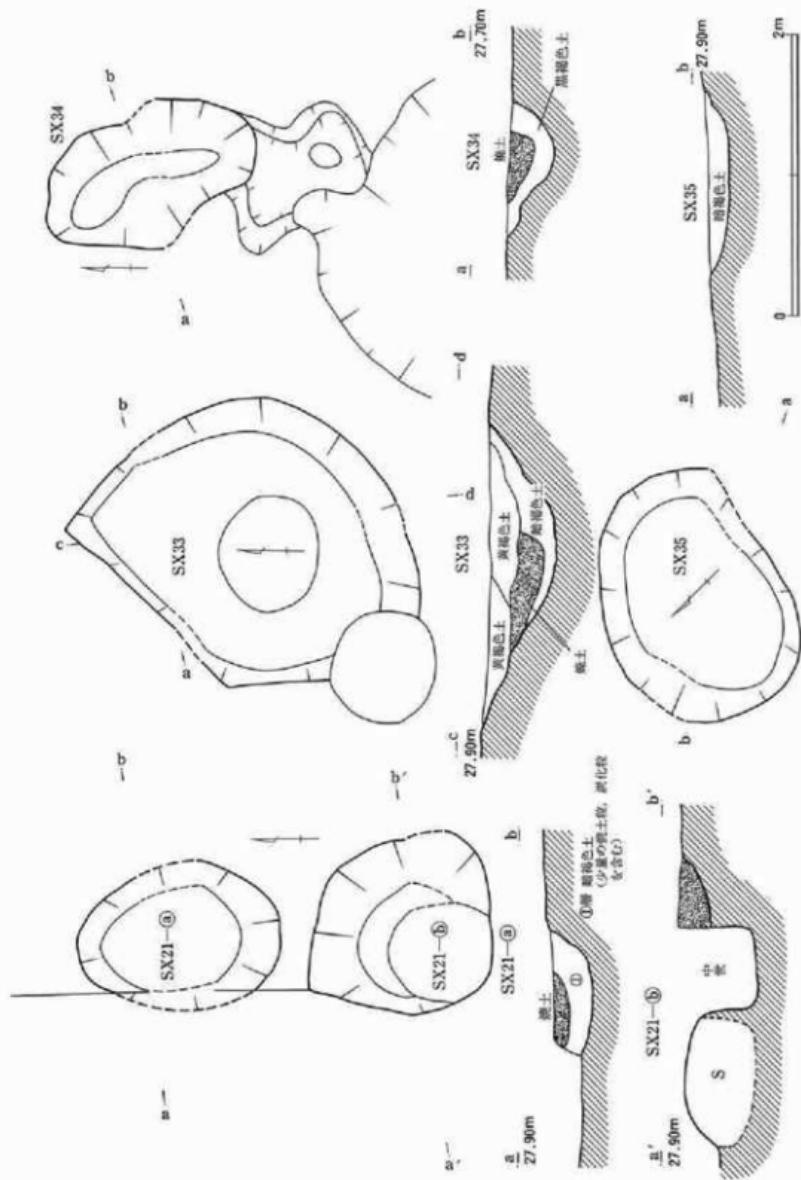
#### SX33（第9・10図）

B-5区に所在する。長径1.6m、短径1.0mの不整形で浅い皿状を呈する。上層は黄褐色土、下層は暗褐色土があり、中に焼土が存在する。

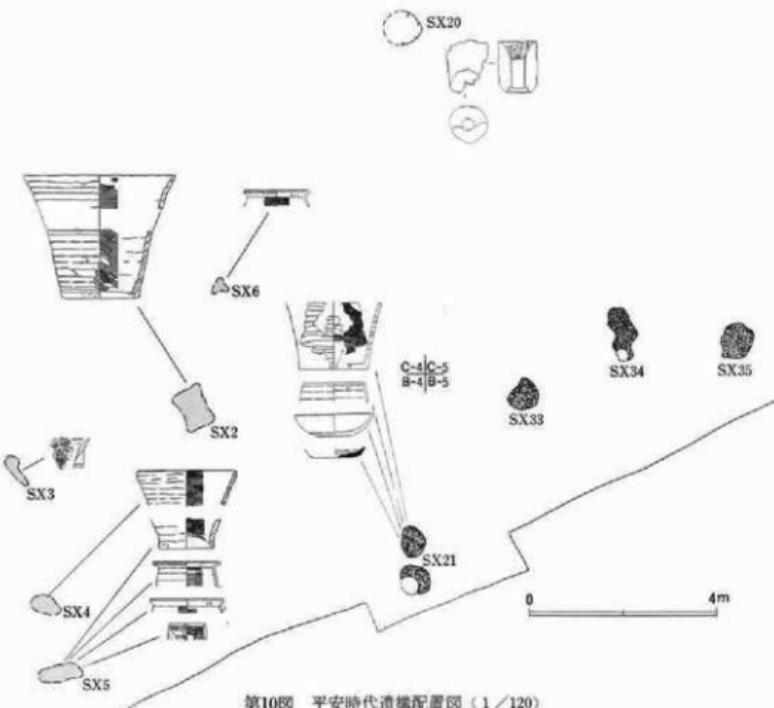
#### SX34（第9・10図）

C-5区に所在する。細長い不整形の土坑である。長径1.2m、短径0.8mを測る。中央に焼土が浮いた状態で検出された。土坑の深さは約30cmである。

#### SX35（第9・10図）



第9図 土坑実測図 (1/40)



第10図 平安時代遺構配置図（1／120）

同じくC-5区に所在する。長径1.8m、短径1.3mを測る。深さ20cmの浅い皿状を呈し、覆土は燒土混りの暗褐色土である。

#### S X 20 (第10図)

C-4区に所在する浅い皿状の土坑である。セクションにより半分が切られてしまったが、直径75cmのはば円形を呈し、深さ約15cmである。この中から、羽口1個分と15cm大の硯1個が出土をみた。周辺からは少量の鉄滓の出土がある。

#### 2. 遺物 (第11, 12図)

縄文土器(1) 1は縄文時代晩期のいわゆる浮線文系の深鉢である。推定口径19.5cmを測る。口縁部は反りぎみに外反し、頸部でややすぼまり、胴部でふたたびふくらみを持つ。暗褐色を呈し、焼成良好で内外面に炭化物の付着が見られる。また、外面に赤色塗彩が一部に残る。口唇部には2個1対の小突起が6単位付され、各突起間の口唇部には、浅い沈線が走る。口縁下には浅く広い沈線が4条めぐり、頸部は磨きにより無文となる。胴上半にも同様の沈線が3条

走る。以下は細い条線が縱方向に走る。口縁部内面にも沈線が一条めぐっている。

#### 土師器

**壺(2)** 2は赤褐色を呈し、焼成良好。推定口径14.6cmを測る。口縁部はくの字状に外反し、体部は球体を呈する。外面は刷毛調整の後、磨きを行っている。また内面体部は刷毛調整で輪積み痕を残す。外面下半に炭化物の付着を見る。H-15区出土。

**深鉢(3、12)** 3は推定口径11.8cmを測り、ほぼ垂直に立ち上る。黄褐色を呈し、焼成良好、口縁部にはナデが加えられ、胴部は内外面共に刷毛調整である。SX5出土。12も深鉢と思われる。推定口径20cmを測り、胴部はゆるやかにふくらむ。口縁部は小さく外反する。内外面共にロクロ調整で、外面に炭化物の付着を見る。SX21出土。

**壺(4、6~8)** 4は内黒の壺である。底径6cmを測る。茶褐色を呈し焼成良好、体部などから立ち上る。6は推定口径12.7cm、深さ5cmを測る。体部は直線的に開く。内外面ヨコナデ、底部は糸切り底である。7は推定口径13cm、底径6cm、深さ3.5cmを測る。内外面共にヨコナデが加えられる。底部は回転糸切りである。8は底部破片である。底径6.5cmを測る。底部は回転糸切りである。

**碗(5)** 口径16cm、高さ5.4cm、底径6.1cmを測る。茶褐色を呈し、内面にややあれが目立つ。内外面共にヨコナデ調整で、底部近くに強いヨコナデが加えられる。口縁部がゆるやかに外反する。底部は回転糸切りである。

**甕(9~11)** いずれも長調甕の口縁部破片である。9は推定口径21.8cmを測る。外反する口縁が端部で立ち上る。外面ヨコナデ、内面刷毛調整である。10は推定口径21.5cm、胴部にややふくらみをもつものである。口縁部はやはり端部が垂直に立上る。口縁部ヨコナデ、胴部カキ目である。11は推定口径24.0cm、口縁部ヨコナデ、炭化物の付着を見る。

#### 須恵器(13~20)

**壺(13)** 双耳瓶の体部破片である。体部最大径16.5cmを測る。内外面共にヨコナデ調整。耳部も一部欠損する。耳の中央に円形孔がある。

**壺(14、15)** 14は推定底径7cmを測る。黄灰色を呈する。底部は回転糸切りである。15は推定口径7cmを測る。青灰色で底部回転糸切りである。

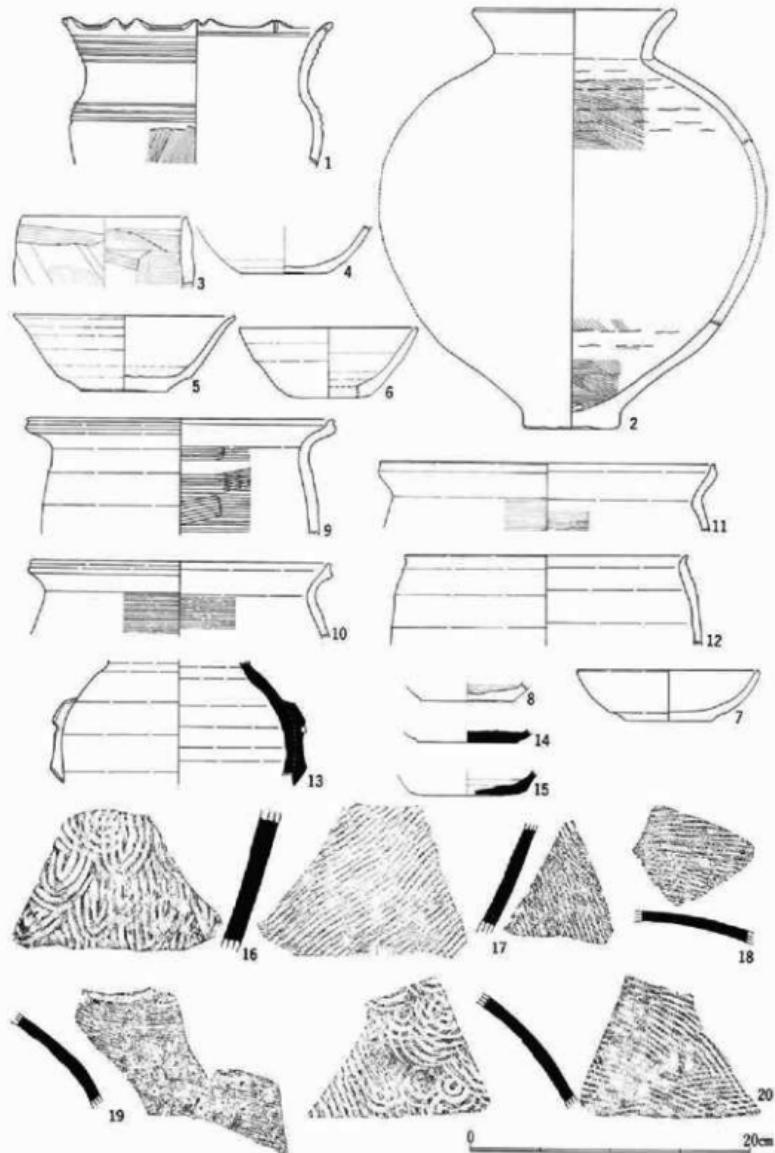
#### 横瓶(18)

体部破片である。外面平行叩きである。

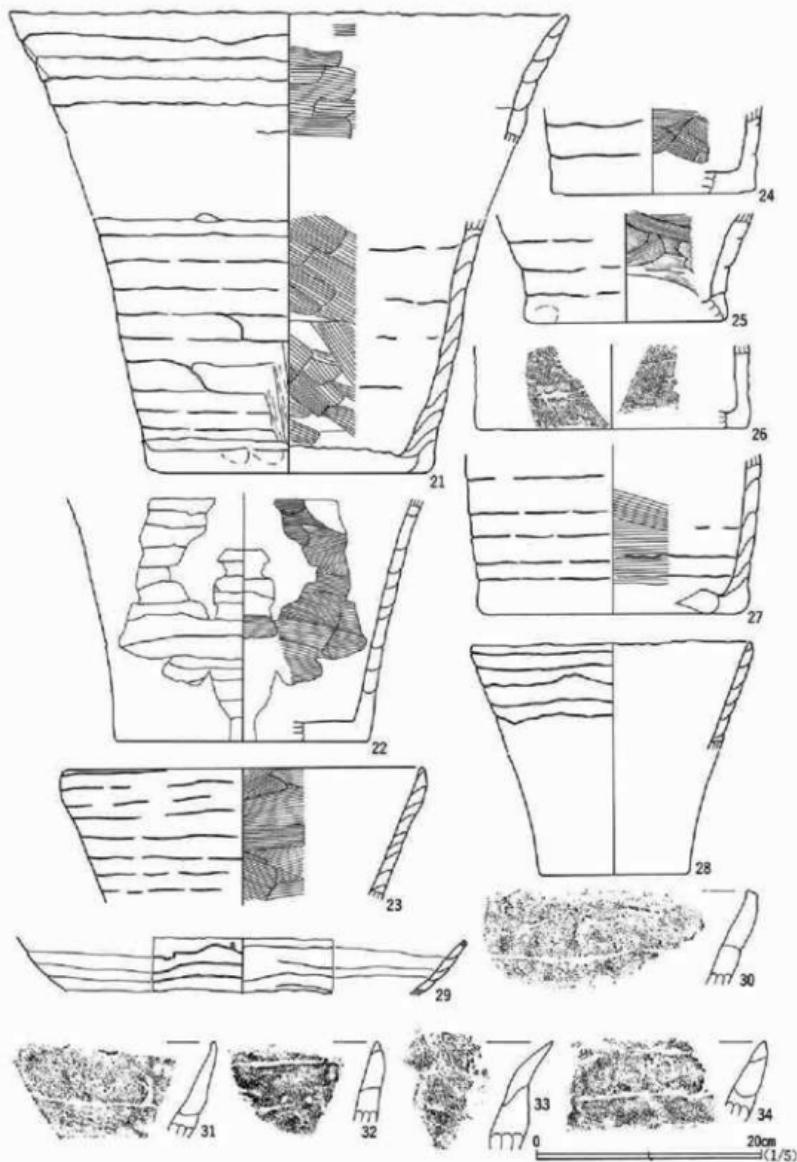
**甕(16、17、19、20)** 16は大甕の体部破片である。叩きに特徴を有する。外面は平行叩きで縱方向に列をなし、珠渦焼の叩きに類似する。内面の叩きは梢円形状である。17は外面平行叩きであるが内面は明確でない。19は肩部破片である。外面細い平行叩きで自然軸の付着を見る。内面無文。20は外面平行、内面青海波の叩きである。

#### 製塩土器(21~34)

21は推定口径50cm、底径25cmで高さは41cm前後になると考えられる。底部は2cmという厚みをもつ。胴部はゆるやかに外反する。体部の厚さは約1cmである。茶褐色を呈し、焼成良好で



第111図 遺物実測図 (1/4) 譜文土器 (1) 土器 (2~12) 須恵器 (13~20)



第12図 製瓦土器実測図 (1/5, 拓本は1/2.5)

輪積み痕を明瞭に残す。1本の粘土紐は約2cmの幅で、外面はほとんど未調整。粗く粘土を削り取った痕が残る。内面は刷毛状工具によるナデが加えられるが、刷毛痕は明瞭でなくあまりていねいではない。内面にも輪積み痕が部分的に残り、口縁部内面に炭化物の付着が認められるが、外面はそう焼けた感じはない。22は胴下半部の破片である。推定底径22.5cmを測る。器形は21と同様やや反りぎみに開く。外面に輪積み痕を明瞭に残す。内面は刷毛調整である。外面は二次焼成により摩耗著しく、また内面には炭化物の付着をみる。23は口縁部破片である。推定口径33cmを測る。口縁部は直線的に開く。茶褐色を呈し、焼成良好、胎土内にやや大粒の小砂利を含む。外面輪積み痕を明瞭に残し、粘土紐の幅は1~2cmである。また内面は刷毛調整である。内面に炭化物の付着を見る。24は底部破片で推定底径18cmを測る。底部厚さ1.8cmと厚く、外面に輪積み痕を残す。内面は刷毛調整、内面炭化物の付着をみる。25も底部破片である。推定底径18cmを測る。他に比べて底部からの開きが大きい。外面に輪積み痕を明瞭に残し、内面にはやわらかい繊維状工具によるナデがみられる。26も同じく底部破片で、推定底径24.5cmを測る。輪積み痕を明瞭に残し、内面は刷毛調整である。27は下半部の破片で推定底径24cmを測る。焼成、作り共に21と類似する。28は口縁部破片、推定口径25cmを測る。二次焼成を受け赤褐色を呈し、内面に荒れが目立つ。外面に輪積み痕を明瞭に残す。29は以上のものとは器形を異にし、大きく開く鉢状を呈する。茶褐色を呈し焼成良好。器厚は0.5cmと他のものの約1/2である。外面に輪積み痕を明瞭に残し、内面にはナデが加えられる。30~34はいずれも口縁部破片で、端部は細くなっている。

#### 羽口（第31図 139）

S X21から出土したものである。長さ15.5cm、直径11.5cmの円筒状を呈する。外面黒色で一端には融解物が付着している。内面は焼けて赤色化している。内側の穴の直径は約4cmで、一端はラッパ状に開いている。また、この開いている部分には、条線状に深いスジが入っている。

## 第6章 中世の遺構・遺物

### 1. 遺構

中世に属すると考えられる遺構には、土坑9、溝3、集石1、杭列1、掘立柱建物跡26、柵列3がある。

#### 土坑

##### S K 8 (第14図)

C-4区にあり、S B36のすぐ北側に位置している。長径1.4m、短径1.3mではほぼ円形に近い。深さ40cmで底面は皿状を呈する。覆土は①層が灰黒色土で、砂利っぽい火山灰を含んでおり、14世紀以降と判断される。②層は黄褐色土である。出土遺物はなく性格不明である。

##### S K 9 (第14図)

B-5区北側に位置する。長径1.7m、短径1.0mを測り、不整形を呈する。深さは最深部で60cmを測る。①層は地山ブロック、②層は灰褐色でSK8同様火山灰土と思われる。③層は暗褐色である。遺物の出土は少なく、性格は不明である。

##### S K 11 (第14図)

C-5区に所在する。数個のピットと重複している。不整筋円形を呈し、断面U字形である。①層は灰黒色土で火山灰土である。②層は暗褐色となっている。遺物の出土は見られない。

##### S K 18 (第14図)

K-9、10区に位置しSB27のすぐ北側にある。長径3.8m、短径2.6mの隅丸方形を呈し、断面U字形で最深部で深さ70cmを測る。西側中央下部にテラスを有し、そこからもう一度低くなっている。埋土はレンズ状に近い堆積を示す。ほぼ中央の4層に径2~10cm内外の円礫が少量の砂を混入して厚さ30cmくらい堆積している。またその下部の7層には黄色粘土が薄く堆積する。この砂利層は、堆積状況から考えて、自然堆積と考えられる。出土遺物はない。

#### 溝

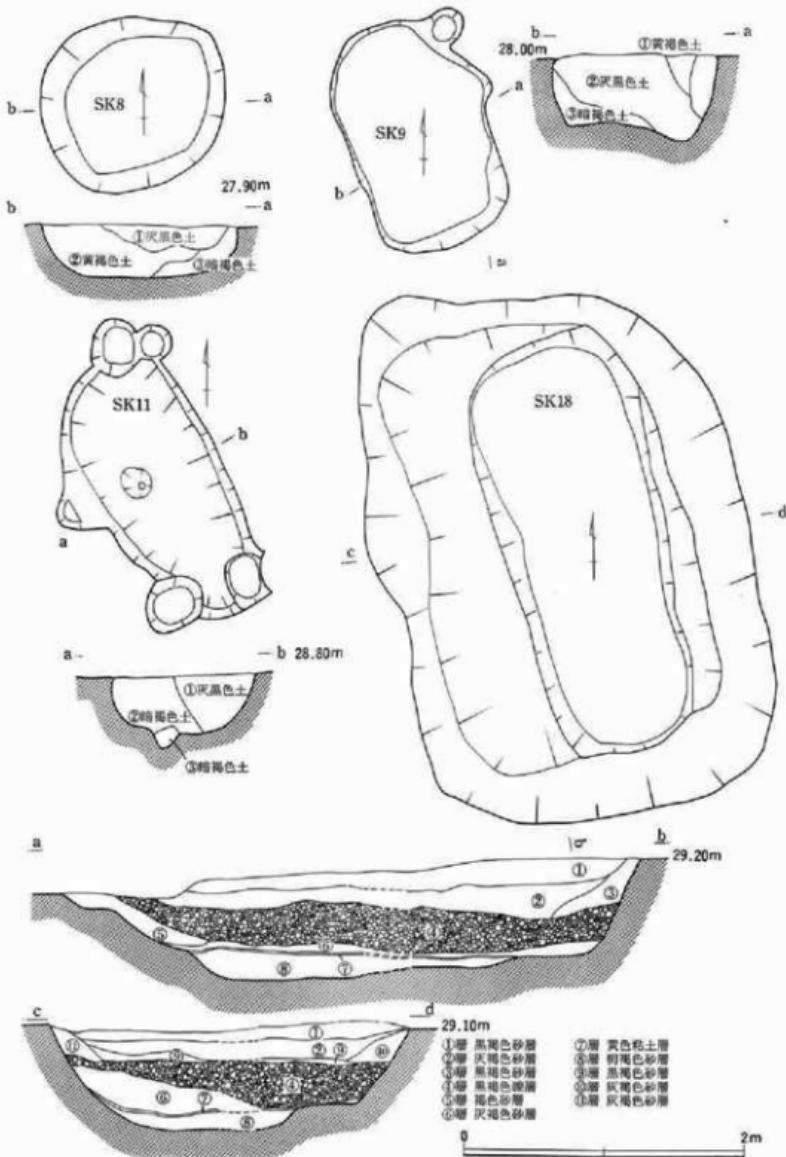
##### S D 10 (第13図、第42図)

G-4区からD-6区にかけて直線的に延びる溝である。幅は1m前後、深さは約30cmくらいで断面U字状を呈する。埋土は、暗黒色で黄褐色地山ブロックを含む。出土遺物は見られない。この溝は東隣の段丘状崖線とほぼ平行して走る。



第13図 SD10、SD17土層断面図 (1/40)

1. 造 横



第14図 土坑実測図 (1/40)

ている。また西側の建物群とも平行関係にあることから、これら建物群に關係した溝と考えられる。

#### S D 16 (第42図)

E-6・7区に位置する。S D10と同様の規模、形態を有する。段丘状崖線にそった溝である。出土遺物はない。

#### S D 17 (第42図)

F-5区に位置する。S D10と平行に重複して走る。長さ6m、幅1mの隅丸長方形を呈する。覆土は灰黒色土で深さ20cmを測る。S D10を切っており、S D10より新しい。出土遺物はない。

#### S D 26 (第42図)

I-5～J-8区にはほぼ東西方向に延びる溝である。幅約1.5～2mで深さ10cm前後と浅い。土師質皿破片等が出土している。

### 集石

#### S X 19 (第15図)

G-9区に位置する。南北1.5m 東西1.2mの範囲に径5～20cm大の川原石が不規則に並んでいる。敷きつめたような感じも受けず、平面形は定かでない。石組の中からは株洲焼の破片が出土している。

### 土坑

#### S K 22 (第15図)

J-K-7区に位置する。南北、東西共に2.0mの円形に近い土坑で深さ1.5m。底面は平坦である。遺構確認面上には厚さ20cmほどの砂がかぶっている。この砂は遺跡に部分的に存在していたもので、砂を除去した所でこの土坑は確認された。土坑内には20～40cm大の岩塊状の碎剣物が黒色土と共に入っている。出土遺物はない。

#### S K 24 (第15図)

G-5区に位置する。径約1mの円形に近い土坑で深さ約40cm、断面U字状を呈する。埋土は①～③層まで粘性のないバサバサした土である。出土遺物はない。

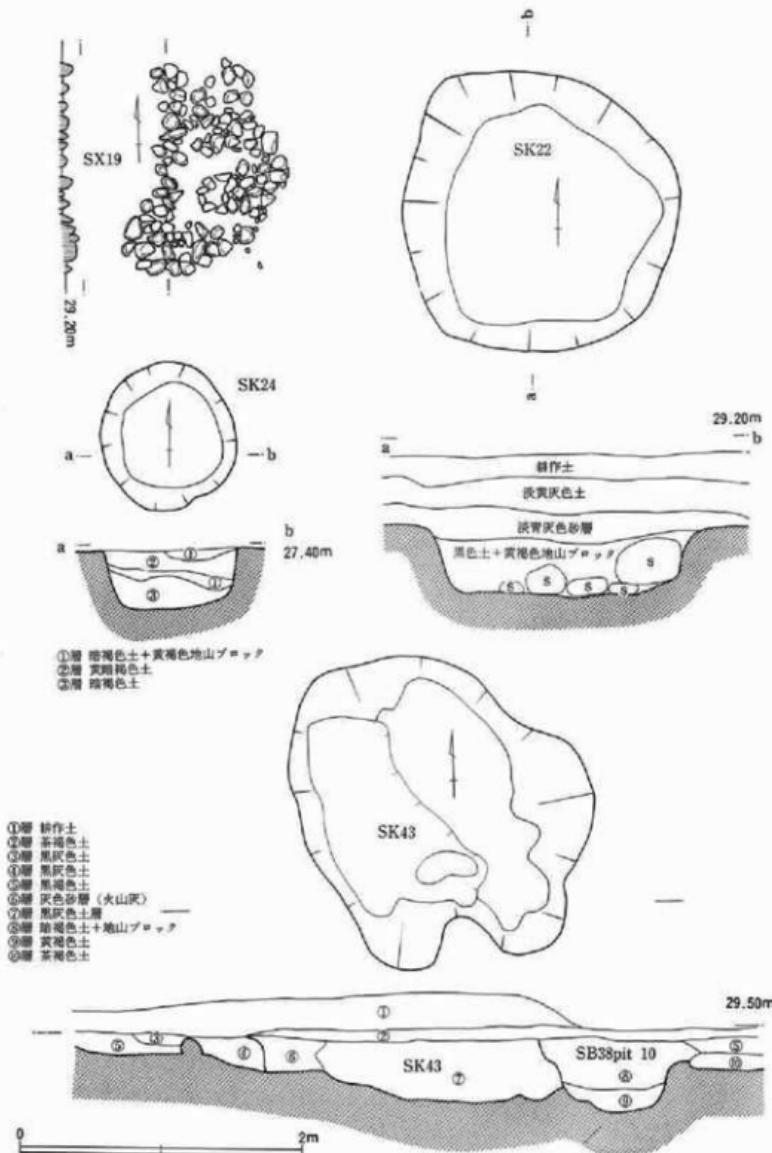
#### S K 43 (第15図)

L-10区に位置する不整形の土坑である。南北2.2m、東西2.1m 深さ40cmを測る。土坑覆土である⑥、⑦層は黒灰色で粒子粗く、火山灰土の2次堆積と考えられる。出土遺物はない。S B38ピット10によってこの土坑は切られている。

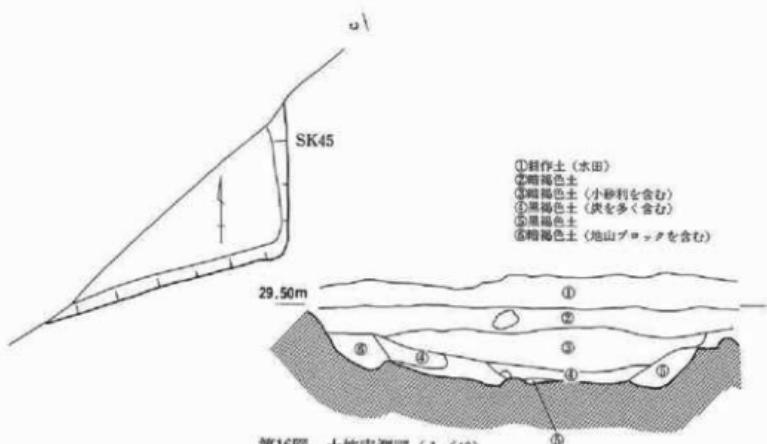
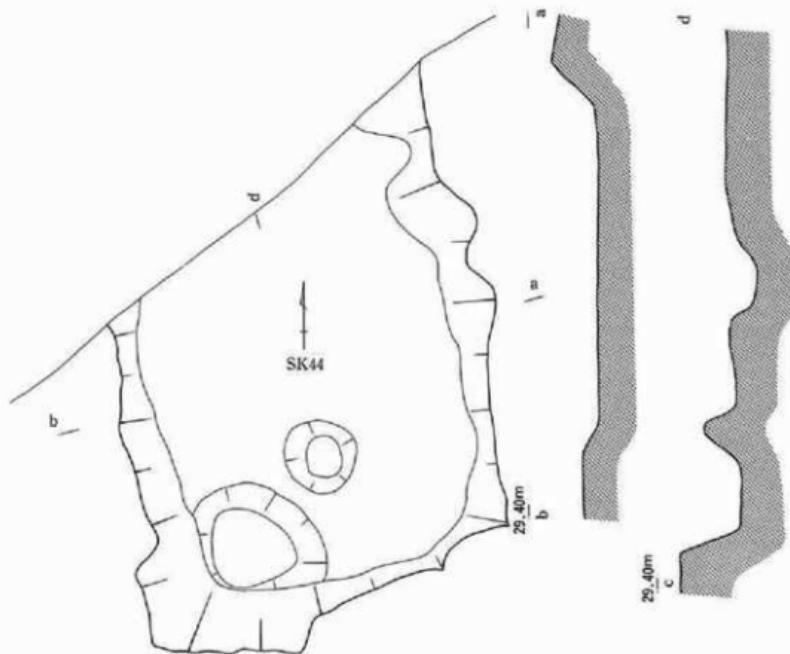
#### S K 44 (第16図)

L-10区に位置する。方形に近い土坑と考えられる。南北(現長)3.6m、東西2.6m、深さ30cmを測る。土坑内には、径20～40cmの岩塊状の碎剣物で埋められている。おそらくS B42を構

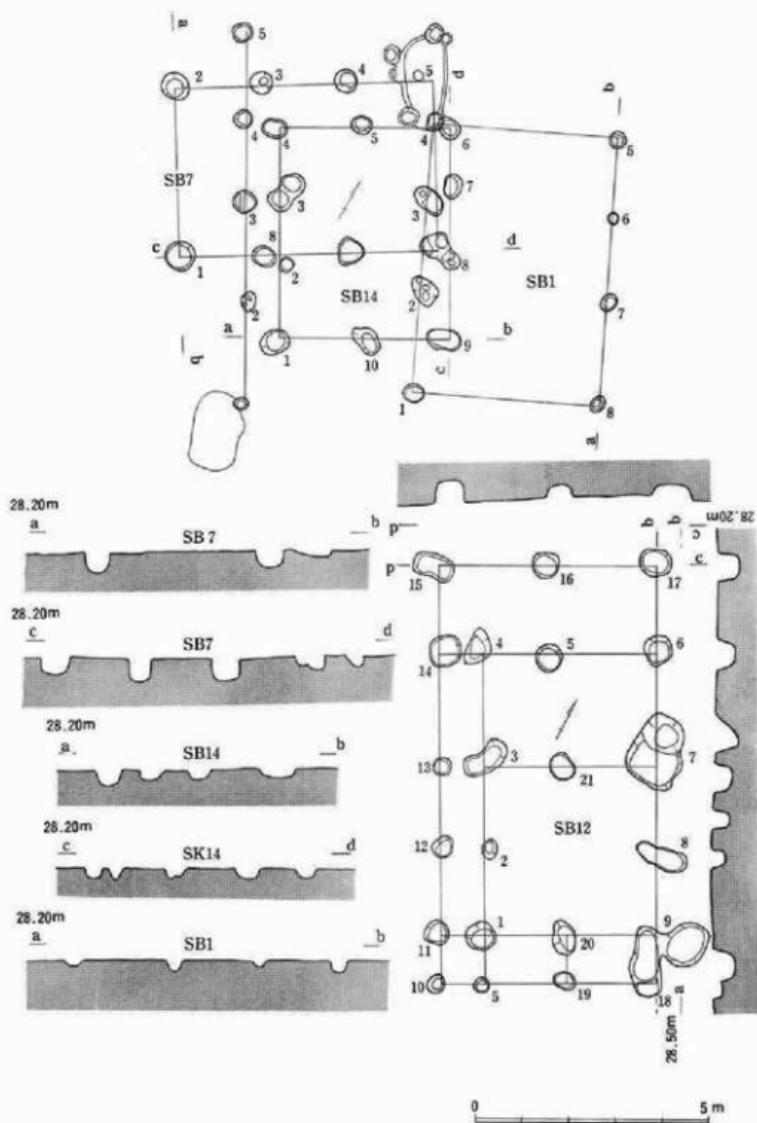
1. 造 構



第15図 土坑・集石実測図 (1/40)



第16図 土坑実測図 (1/40)



第17図 握立柱建物跡実測図 (1/120)

築する際に刷碎物により土坑を埋めたものと考えられる。

#### S K 45 (第16図)

L-10区に位置する。法線に一部かかっているのみで全体は不明である。方形のコーナーを確認したのみである。現長で南北1.0m、東西1.6mを測る。覆土である③層は小砂利を多く含む暗褐色土、④、⑤層は黒褐色で、⑥層には炭を多く含んでいる。S B42とは重複関係にあるがS B42の方が古いと判断される。

#### 杭列

#### S X 13 (図版13)

E-5区に位置する。S D10と「X」字状にクロスするように3本の杭が並んでいる。いずれも径5cmくらいの細木である。S D10より新しいものである。性格、時期共に明確でない。

#### 掘立柱建物跡

#### S B 1 (第17図)

C-5区にある南北棟建物で方位はN31°Wである。桁行3間(5.8m)、梁間1間(4m)で桁行の柱間は西側から1.7m、2m、2.1mを測りほぼ等間である。柱掘形は径25cm~70cmの円形に近くばらつきがみられる。深さは10~42cmで一定しない。S B7、S B14と重複するが新旧関係は不明である。ピットの覆土は灰黒色のバミス状の土で粘性はない。

#### S B 7 (第17図)

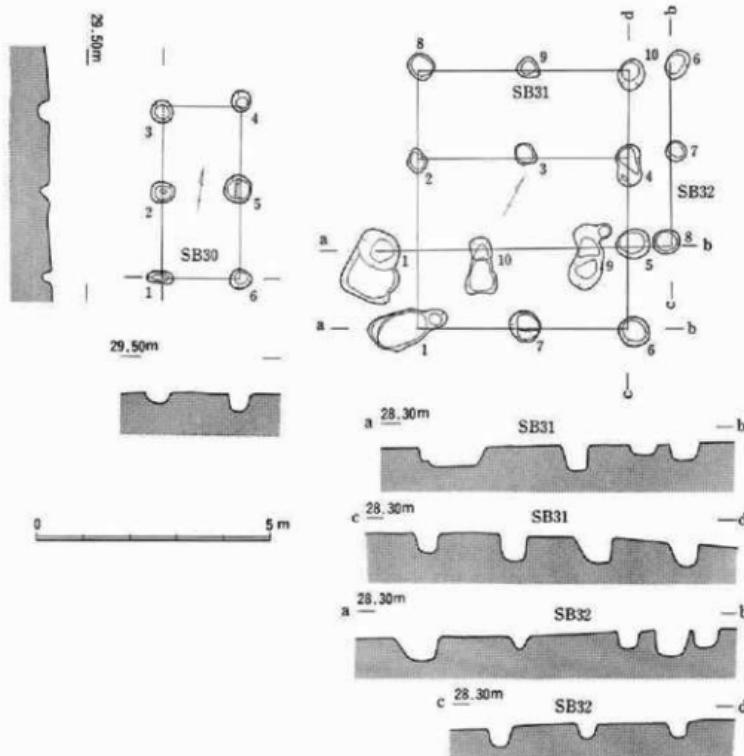
C-5区にある南北棟建物で方位はN58°Wである。桁行3間(5.5m)、梁間1間(3.6m)で桁行の柱間は1.8mではほぼ等間である。柱掘形はほぼ円形で径50~60cmを測る。深さは27cm~46cmでばらつきが見られる。

#### S B 12 (第17図)

D-5区にある南北棟建物で方位はN30°Wである。桁行4間(8m)、梁間2間(4.5m)で、南側に廂を有し、また北から2・3間目に東柱が存在する。桁行の柱間は北から1.8m、2.4m、1.8m、1.9mで、廂部は1.0mを測る。梁間は北側で2.3m、2.2mである。また西側桁行にそって内側に約1.0mのところに南から3間目まで廂部から5本の柱が並び、廂状を呈する。また南側の梁間は西から1.0m、1.7m、1.8mである。柱掘形は円形に近いが不揃いで径40~100cmくらいである。また深さは15~46cmである。掘形埋土は、同じくバミス状黒灰色土で粘性はない。

#### S B 14 (第17図)

C-5区にある南北棟建物で方位はN30°Wである。桁行3間(4.5m)、梁間2間(3.6m)で、桁行の柱間は、1.5mで等間隔、梁間は1.8mで等間隔である。柱掘形は30~60cmの円形に近く、深さは13~35cmと比較的浅い。S B1、S B7と重複するが新旧関係は定かではない。



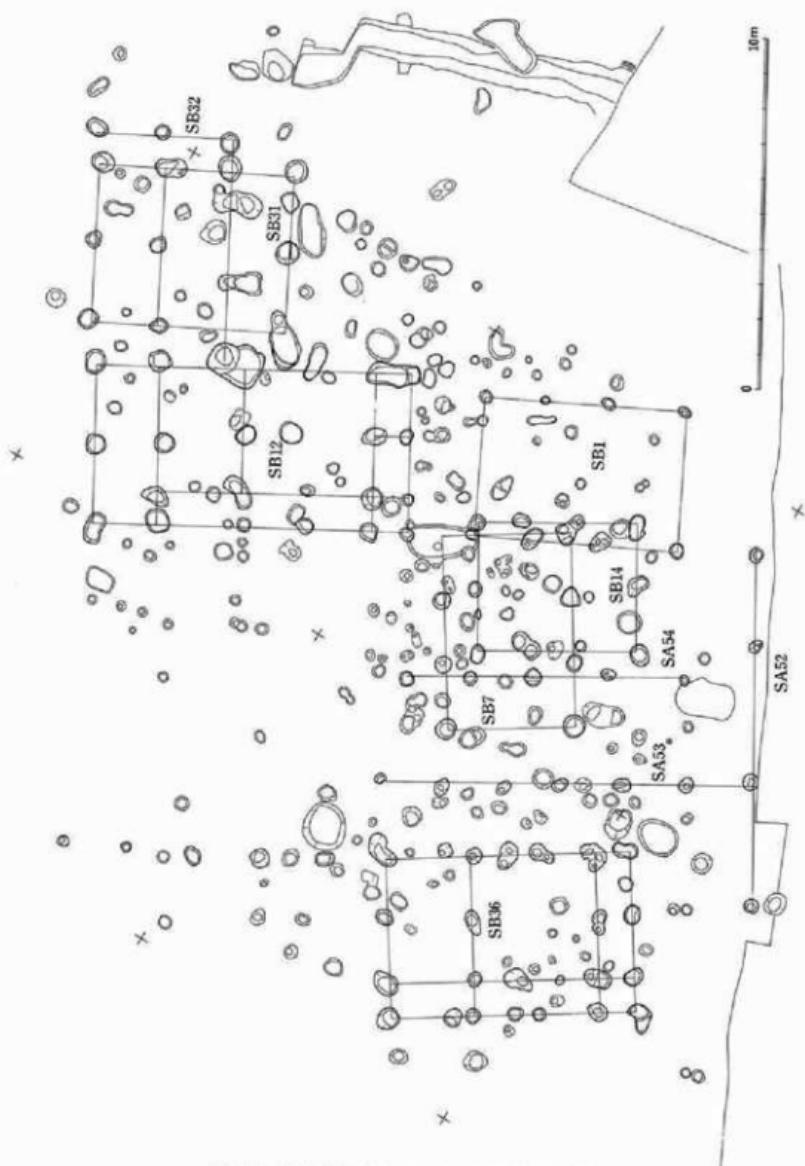
第18図 挿立柱建物跡実測図 (1/120)

**S B31 (第18図)**

D・E-5・6区にある南北棟建物で方位はN27.5°Wである。S B32と重複関係にあり、すぐ西隣に並行してS B12がある。桁行3間(5.5m)、梁間2間(4.6m)で桁行の柱間は北から1.9m、1.9m、1.7mでほぼ等間である。また梁間の柱間は2.3m、2.2mである。柱縦形は径60cm前後の円形に近く、深さ20~50cm前後である。

**S B32 (第18図)**

D・E-5・6区にある東西棟建物でS B31とは重複関係にある。北側及び西側の柱穴は明確



第19図 道構配置図 (B-E-4~5付近) (1/160)

でなく方位は、N63.5°Wである。東西の桁行は3間(6.2m)、南北の梁間は2間(3.8m)で、桁行の柱間は西から2.2m、2.2m、1.8mである。また梁間は北から1.9mで等間である。桁行の柱穴は、西から3個共に大きく2つの柱穴が重複し細長くなっている。したがって柱掘形は、桁行部で、短径60cm、長径1.2m前後となり、深さは27~48cmくらいである。また梁間の柱掘形は径40~60cmの円形に近く深さは30cm前後である。柱穴埋土は他と同様、粘性のないバミス状黒灰色土である。

#### S B15 (第20図)

D・E-7・8区にある南北棟建物で方位はN25°Wである。桁行3間(5.4m)、梁間1間(4m)で、桁行は西側で、北から1.4m、2.1m、1.9m、東側で北から1.7m、1.8m、1.9mでほぼ等間である。柱掘形はほぼ円形に近いが比較的小小さく、径50cm前後である。また深さは50~80cmとかなり深い。S B51と重複関係にあるが新旧関係は明らかでない。この付近はピットが集中している地点で、建物と認定したもの他にも、柱穴と考えられるもののが多數あったが関連をつかむことはできなかった。これら柱穴群は南側の法線外にまで延びている。

#### S B51 (第20図)

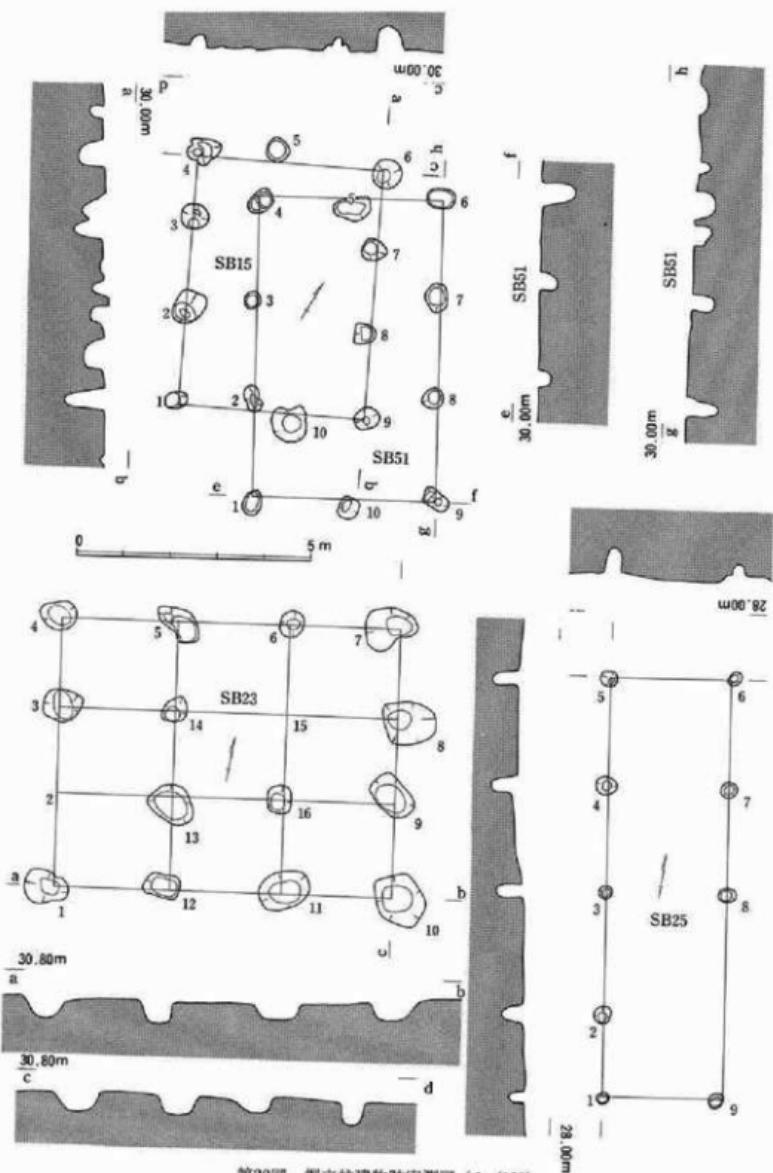
D・E-8区に所在する南北棟建物でS B15と重複する。方位はN29°Wである。桁行3間(6.5m)、梁間2間(3.9m)で桁行の柱間は西側で北から2.1m、2.2m、2.2m、東側も2.1m、2.2m、2.2mとそれぞれ西側に対応する。また梁間の柱間は北側で西から1.9m、2.0m、南側で西から2.0m、1.9mである。柱掘形は、S B15と同様の規模をもち、径50cm前後と比較的細い。また深さは30~65cmとしっかりしている。S B15、51共に火砕流堆積物上にのっているために岩盤状の地山を掘り込んでいるわけで、いずれも柱穴はしっかりとしている。

#### S B23 (第20図)

G・H-13・14区にある総柱の建物で方位はN9.5°Wでほぼ東西を向く。遺物の中では一番東側段丘に近い部分に位置する建物である。柱間は東西3間(7.2m)、南北3間(5.8m)で東西は西から各々2.5m、2.4m、2.3m、南北は北から各々1.9m、1.8m、2.0mである。また2カ所において柱穴を確認することはできなかった。柱掘形は形状、大きさ共に30cm前後のものが多く、掘方の大きさの割に浅いものが多い。掘形の形状がさまざまのはやはり地盤が火砕流の岩盤によるため画一的な穴を掘ることができなかったためと考えられる。このS B23の周辺において土師質皿の出土が目立っている。

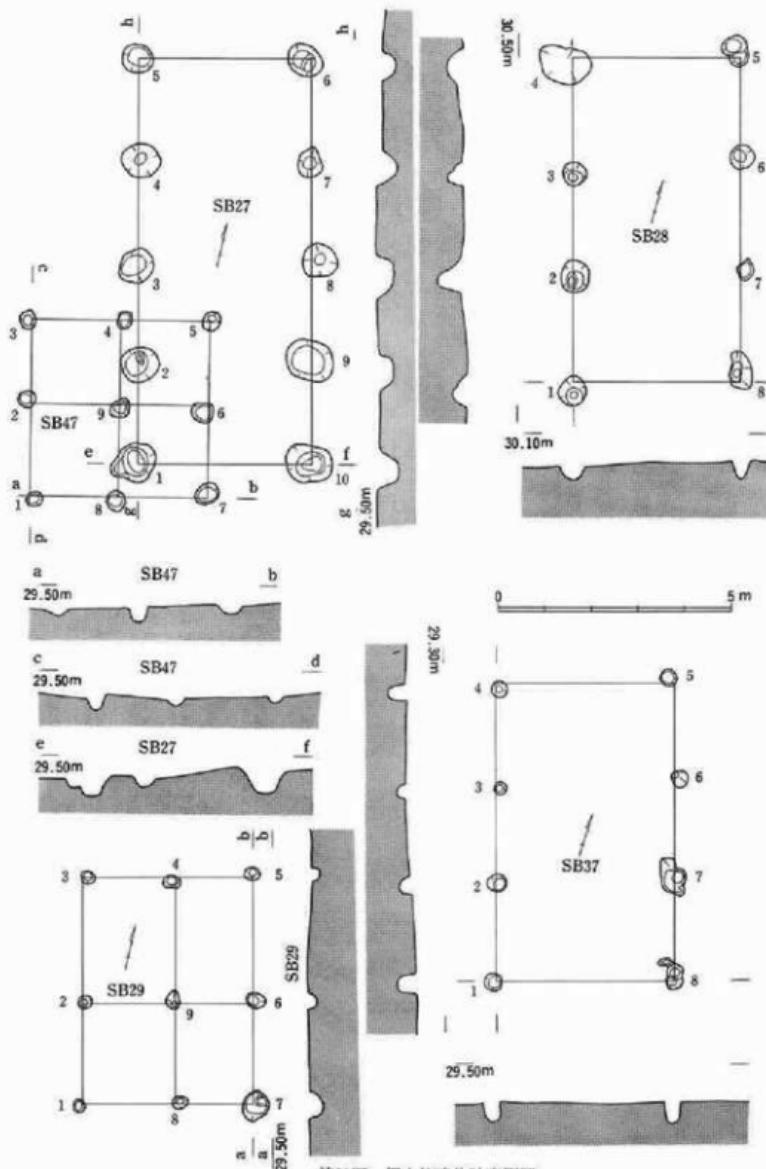
#### S B25 (第20図)

E・F-5区に所在する南北棟建物で方位はN9°Wでほぼ南北を向く。建物の西側、姥川の段丘崖近くにありSD10、17と重複関係にある。桁行4間(9m)、梁間1間(2.6m)と細長い建物である。桁行の柱間は西側で北から2.3m、2.3m、2.7m、1.7mで東側もほぼ等間であるが、北から4本目の柱穴はトレンチ深掘により消失してしまった。柱掘形はほぼ円形に近く、径は30~40cmと細い。また深さは30~54cmと比較的しっかりしている。



第20図 捕立柱建物跡実測図 (1/120)

1. 造 構



第21図 据立柱建物跡実測図

**S B 27 (第21図)**

J・K-9・10区に所在する。南北棟建物でS B47と重複し、北側にS K18、南側にS B46が近接し、また東側にはS B38が並列する。方位はN18°Wである。桁行4間(8.7m)、梁間1間(3.7m)で、かなり大形である。桁行の柱間は東西共に北から2.2m、2.2m、2.2m、2.1mでほぼ等間である。柱掘形はほぼ円形に近く、径70~100cmと大形のものが多い。また深さは30~55cmである。

**S B 28 (第21図)**

F・G-7区に所在する南北棟建物で方位はN20°Wである。桁行3間(6.9m)、梁間1間(3.6m)で桁行は西側で北から2.6m、2.2m、2.1m、東側で北から2.1m、2.5m、2.3mを測る。柱掘形は、円形に近く径40~60cmである。また深さは24~45cmである。

**S B 29 (第21図)**

K-7区に所在する2間×2間の施柱の建物で方位はN11°Wである。南北4.8mで柱間は北から2.7m、2.1m、東西は3.7mで柱間は西から2.1m、1.7mである。柱掘形は30cm前後の円形で小さい。また深さは10~20cmと浅いものが多い。

**S B 30 (第18図)**

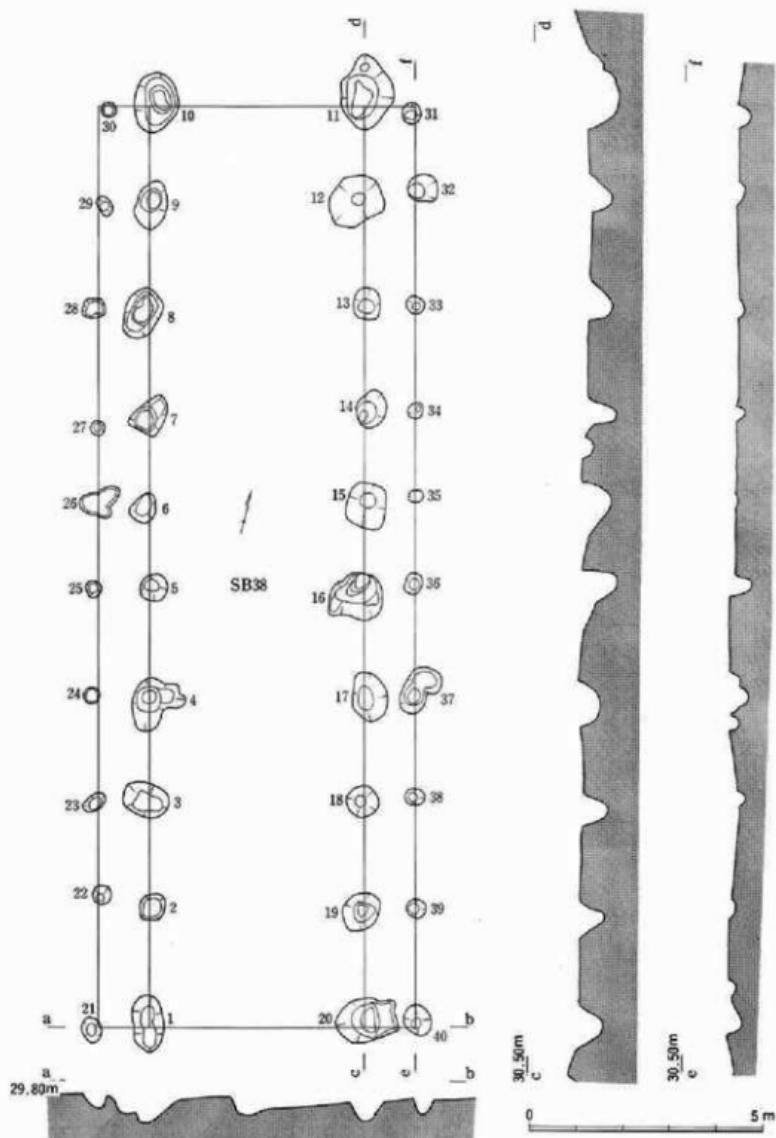
J-7区に所在する小形の南北棟建物で方位はN 9°Wである。柱間は南北2間(3.6m)ではほぼ等間、また東西は1間(1.8m)である。柱掘形は径40cm前後のほぼ円形である。この建物の周辺にも同等規模の柱穴と思われるビットがかなり確認されたが、建物、柵列等を確認するに到らなかった。

**S B 36 (第24図)**

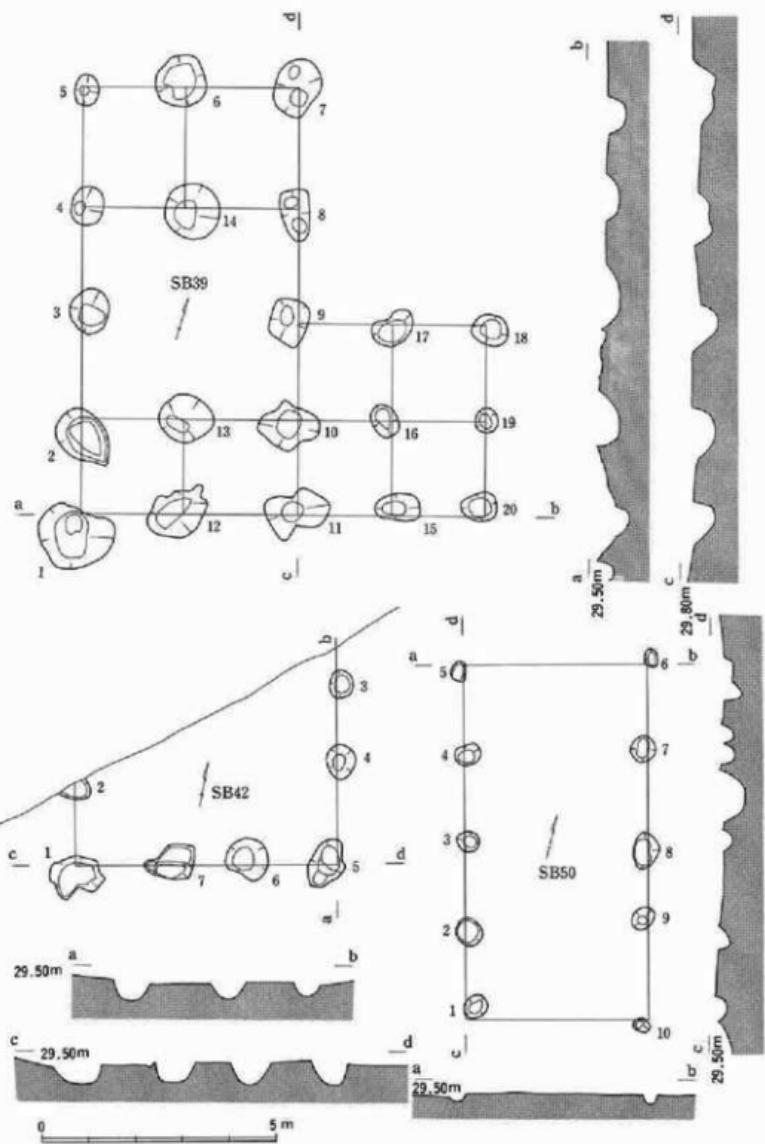
B・C-4区に所在する南北棟建物で方位はN32°Wである。遺跡の中では一番西側の姥川右岸段丘崖近くに位置する。南北3間(6.0m)、東西2間(3.8m)でそれぞれ西側及び南側に廻と思われる張りだしを見られる。桁行は北から1間目が広くて2.4mを測り、次に1.4m、3間目が2.2mとばらつきがある。東側もそれに対応するようにビットが見られるが、補助的な柱穴も認められる。また北から1間目のところには東柱と思われるものがある。梁間は1.8mの等間である。廻は幅1mで四辺共身舎に対応するように柱穴が見られる。柱掘形は一定せず不整形のものが多く、径40~50cmの円形である。またこの建物の周辺には多数のビットがあり、前述のS B 1・7・12・14・31・32と合わせて、建物の方向はほぼ一定しているため、他にも柱穴列の組合せを考えることができる。したがって附近において他にも建物の存在した可能性が高い。

**S B 37 (第21図)**

H・I-5・6区に所在する南北棟建物で方位はN18°Wである。すぐ北側にはこの建物に直行するようにS D26が走っている。桁行3間(6.2m)、梁間1間(3.8m)で桁行は西側で北から2.1m、2.0m、2.1mでほぼ等間で、東側もそれぞれ対応する。柱掘形は30~40cmと比較的細く、また深さは18~41cmとばらつきが認められる。



第22図 掘立柱建物跡実測図 (1/120)



第23図 掘立柱建物跡実測図

## S B 38 (第22図)

J・K-10・11、L-10区に所在する南北棟建物で、方位はN13.5°Wである。東にS B39・40、北にS B42、西にS B27がある。桁行9間(19.7m)、梁間1間(4.6m)で、東側、西側にそれぞれ廻(廻出1.1m)がある。身舎の推定床面積は90.6m<sup>2</sup>で、検出された掘立柱建物の中で最も大きく、本遺跡の中では中心的な建物と考えられる。桁行柱間寸法は東側、西側ともに1.8~2.5mの範囲にあり、2.2m前後のものが多く、柱穴はほぼ一直線上に並ぶ。廻柱間寸法は東側、西側ともに1.7~2.5mの範囲にあり、2.2m前後のものが多く、柱穴はほぼ一直線上に並ぶ。身舎の柱掘形は径60~156cm、深さ24~67cmの範囲にあるが、径110~120cm前後、深さ40~50cmのものが多く、大形で深い。しかし平面形はばらつきがあり一定しない。廻の柱掘形は径30~109cm、深さ7~33cmの範囲にあるが、径40cm前後、深さ10~20cm前後のものが多く、身舎の柱に比べて小形で浅い掘形である。平面形は不整形もあるが円形、橢円形が多い。身舎の柱、廻の柱掘形の埋土はバミス状の黒灰色土で粘性はない。遺物は柱穴13より南宋錢が6枚出土している。

## S B 39 (第23図)

J-11、K-11・12区に所在する南北棟建物で、方位はN17°Wである。遺跡の中では一番東側に位置し、北にS B41・50、西にS B38があり、S B40と重複する。しかし新旧関係は明らかでない。桁行4間(9.2m)、梁間2間(4.6m)で、東側に2間(4.0m)×2間(4.0m)の張り出し部分がある。身舎の推定床面積41.9m<sup>2</sup>、張り出し部の推定床面積16.0m<sup>2</sup>で検出された掘立柱建物では、比較的大きい建物である。南及び北妻から1間目には東柱を有するが、中央ではなく2×2間の空間を保っている。桁行柱間寸法は、東側、西側ともに南妻から1間目が2.0m、他は2.4mと等間であり、南西隅柱穴がややずれるが、他の柱穴は一直線上に並ぶ。梁間柱間寸法は、北妻、南妻ともに東から2.5m、2.1mと不揃いであり、南西隅柱穴がややずれるが、他の柱穴は一直線上に並ぶ。張り出部柱間寸法は2.0mの等間であり、柱穴は一直線に並ぶ。身舎の柱掘形は径64~164cm、深さ17.5~60cmの範囲にあるが、径120~130cm前後、深さ30~40cm前後のものが多く、大形で深い掘形である。平面形は不揃いで一定しない。張り出し部の柱掘形は径54~98cm、深さ23~35cmと比較的揃っており、平面形も円形、橢円形であるが、身舎の柱掘形に比べて、やや小形で浅い掘形である。柱掘形の埋土はバミス状の黒灰色土で粘性はない。

## S B 40 (第24図)

K-11、12区に所在する南北棟建物で、方位はN15°Wである。S B39と重複するが新旧関係は明らかでない。桁行4間(7.9m)、梁間1間(3.8m)であり、推定床面積は30.0m<sup>2</sup>である。桁行柱間寸法は、東側、西側ともに1.95m前後とほぼ等間で、柱穴8を除き一直線上に並ぶ。柱掘形は径38~90cm、深さ20~62cmの範囲にあるが、径50cm前後、深さ40cm前後のものが多く、平面形は不整形もあるが、円形、橢円形が多い。埋土はバミス状の黒灰色土で粘性はない。

## S B 41 (第25図)

L-10、12、M-11区に所在する南北棟建物で、方位はN15°Wである。調査区の中では最も北東

寄りに位置している。南にS B39・40、西にS B42・50と重複するが新旧関係は明らかでない。桁行4間(10.0m)、梁間2間(4.5m)で、東側、西側、北側に廂(幅1.0m)を有し、また、東側には1間(東西3.0m、南北2.8m)の張り出し部がある。身舎の推定床面積45.0m<sup>2</sup>、張り出し部の推定面積8.4m<sup>2</sup>と検出された掘立柱建物では、比較的大きい建物である。柱穴は身舎の中心で検出されなかった。他はすべて検出された。形態的にはS B39と同様の構造である。桁行柱間寸法は、東側、西側ともに北から1間目と4間目が2.8m、2間目と3間目が2.2mと規則的であり、柱穴は一直線上に並ぶ。梁間柱間寸法は北妻、南妻ともに2.25m前後とほぼ等間であり、柱穴は一直線上に並ぶ。廂柱間寸法は桁行、梁間柱間寸法とほぼ対応し、柱穴も一直線上に並ぶ。身舎の柱掘形は径56~154cm、深さ18.5~69cmの範囲にあるが、径120~130cm前後、深さ40cm前後のものが多く、大形で深い掘形である。廂の柱掘形は径74~140cm、深さ14~68cmの範囲にあるが、径120~130cm前後、深さ20cm前後のものが多い。大きさは身舎の柱掘形と同じであるが深さはやや浅くなる。平面形は不整形が多い。柱掘形の埋土はすべてバミス状の黒灰色土で粘性はない。

#### S B50 (第23図)

L-11区に所在する南北棟建物で、方位はN15.5°Wである。調査区の中では北東寄りに存在し、S B41と重複するが新旧関係は明らかでない。桁行4間(東側7.8m、西側7.2m)、梁間1間(北側4.1m、南側3.5m)でややゆがんだ形であり、推定床面積は28.5m<sup>2</sup>である。桁行柱間寸法は西側で1.8mの等間、東側は北から1.9m、2.2m、1.5m、2.2mとばらつきが見られるが、柱穴は西側、東側ともにはば一直線上に並ぶ。柱掘形は径36~78cm、深さ9~45cmの範囲であるが、径40~50cm前後、深さ20cm前後のものが多く、平面形は梢円形が多い。柱掘形の埋土はバミス状の黒灰色土で粘性はない。

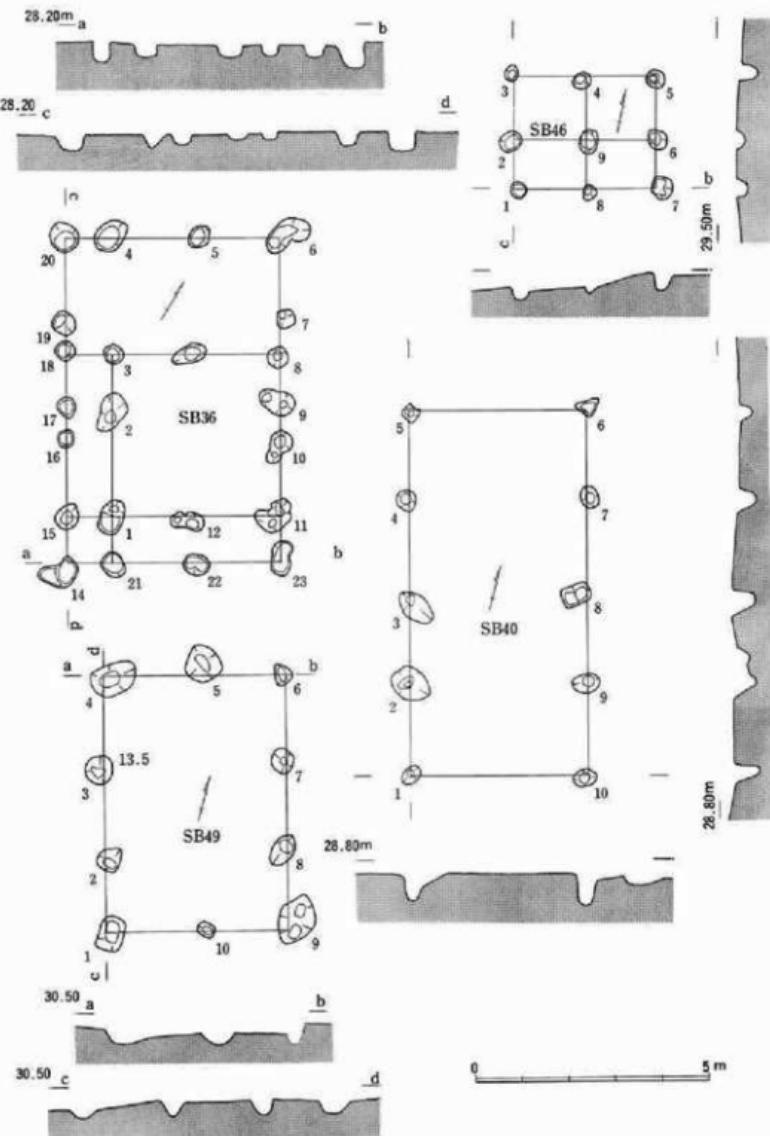
#### S B42 (第23図)

L-10区に所在する南北棟建物で、方位はN8.5°Wであり、一部は北側の調査区域外に延びている。東にS B41・50、南にS B38、SK43があり、SK44・45と重複するが新旧関係は明らかでない。桁行2間(3.9m)以上、梁間3間(5.4m)である。桁行柱間寸法は検出された柱穴を見る限り、東側の南から2.2m、1.7mとばらつきが見られる。梁間柱間寸法は南妻で1.8mと等間である。柱穴は桁行、梁間ともに一直線上に並ぶ。柱掘形は径55~120cm、深さ13.5~41cmとばらつきが見られ、平面形は不整形が多い。柱掘形の埋土はバミス状の黒灰色土で粘性はない。

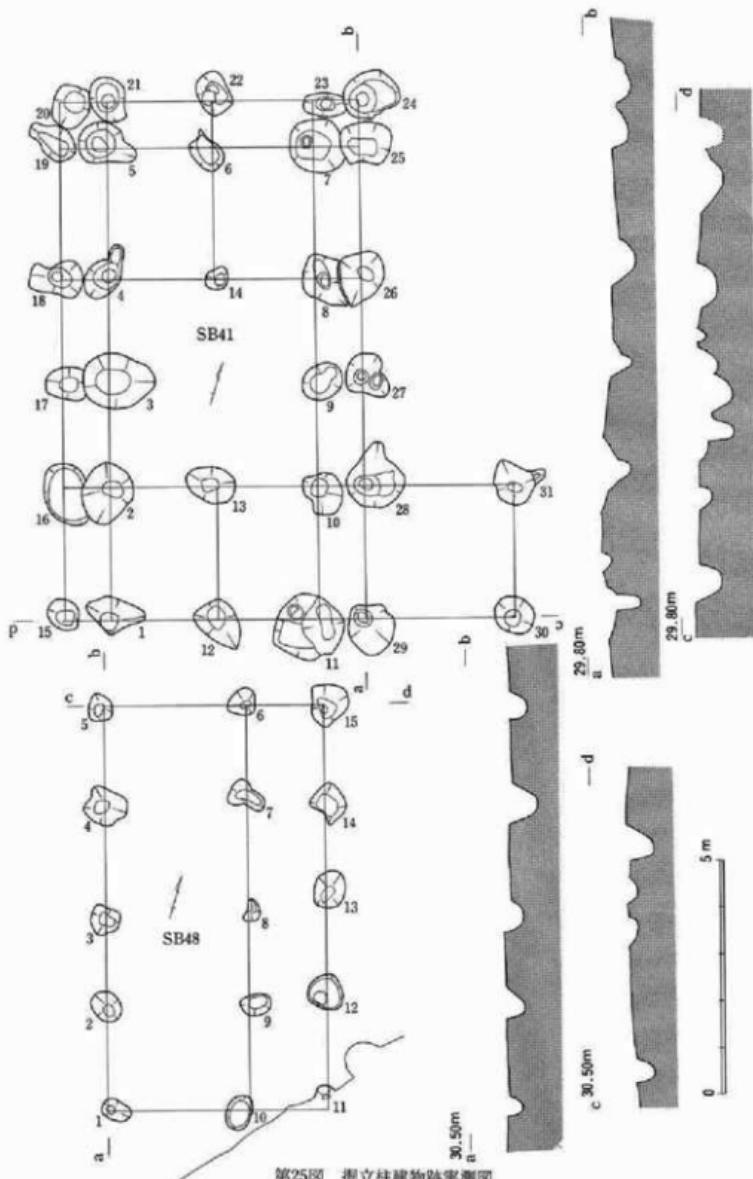
#### S B46 (第24図)

J-10区に所在する縦柱建物で、方位はN11.5°Wである。東にS B38、北にS B27・47がある。南北2間(2.4m)、東西2間(3.0m)で東西がやや長く、推定床面積は7.2m<sup>2</sup>である。検出された掘立柱建物の中では比較的小さい。北側、南側の柱間寸法は1.5mと等間であり、東側、西側の柱間寸法は北から1.4m、1.0mと差異が見られる。柱掘形は径30~52cm、深さ11~24cmとはば同規模であり、平面形は円形、梢円形である。柱掘形の埋土はバミス状の黒灰色土で粘性は

1. 造 壁



第24図 挖立柱建物実測図 (1/120)



第25図 振立柱建物跡実測図

ない。

#### S B 47 (第21図)

J-9・10区に所在する総柱建物で、方位はN18°Wである。南にS B 46があり、S B 27と重複するが新旧関係は明らかでない。南北2間(3.8m)、東西2間(3.8m)であり、推定床面積は14.4m<sup>2</sup>である。柱間寸法は北側の西から2.0m、1.8m、南側の西から1.8m、2.0m、東側の北から2.0m、1.8m、西側の北から1.7m、2.1mとややばらつきが見られるが、柱穴はほぼ一直線上に並ぶ。柱掘形は径36~56cm、深さ7~39.5cmの範囲にあり、径40cm前後、深さ10cm前後が多く小形で浅い掘形である。柱掘形の埋土はバミス状の黒灰色土で粘性はない。

#### S B 48 (第25図)

H・I-12区に所在する南北棟建物で方位N18°Wであり、すぐ西側にはS B 49がある。桁行3間(8.65m)、梁間1間(3m)で柱間は西側で北から2.1m、2.5m、1.9m、2.15mと一定しない。また東側に廂を有し、幅約1.7mである。柱掘形は30~80cmで円形を基本とするが非常に不規則であることも地盤が堅いのが原因と考えられる。また深さは西側柱列及び廂部が30~50cmと比較的深いのに対し、東側柱穴列は16~26cmと浅くなっている。

#### S B 49 (第24図)

H-11・12区に位置する南北棟建物で方位はN16°Wである。すぐ東側にS B 48が位置する。桁行3間(5.45m)、梁間2間(3.9m)で桁行の柱間は西側で2.0m、2.0m、1.45mである。また東側もそれに対応する。柱掘形は30~100cmとばらつきがあり、形も不整形である。また深さも11~34cmとばらつきがあり一定しない。

#### g 棚列

#### S A 52、53 (第19図)

S A 53はS B 36とS B 7との間にこれら建物と並行するように並ぶ棚列である。またこの棚列に直行するように建物の南側に並ぶのがS A 52である。S B 53は間隔が1.8m前後と等間で一定している。S A 52は柱間の間隔が西から3.5m、4m、2.6mと一定しない。

#### S A 54 (第19図)

C 5区に所在し、S B 14のすぐ西側に並行して並んでいる。5本の柱からなり、S A 53とは並行関係にある。柱間の間隔は北から1.9m、1.7m、2.3m、2.1mである。

## 2. 遺 物

中～近世の遺物としては、株洲焼、越前焼、古瀬戸、土師質土器、青磁、白磁、染付、瓦器等があり、また石製品では、砥石、石臼、石鉢があるが、遺物の出土量は、遺跡の広さや遺構の数に比して大変少なく、この遺跡を反映しているとは言いがたい。

### 株洲焼

#### 壺（第26図1、2 第27図10～17）

1は甕口縁部破片である。推定口径44cmを測る。口縁部は水平方向に大きく張り出し、端部は肥厚し丸くおさまる。青灰色を呈し、焼成良好、口縁部上面に自然釉がかかる。外面平行叩き目。2も甕の口縁部破片である。推定口径60cmを測り大形である。口縁は大きく外反するがのびは少ない。また口縁部は面取りされている。内面頸部から下に軽いケズリが見られる。外面平行叩きであるが、作りは全体に粗雑である。また胎土内にバミス状の白色粒が目立つ。10も口縁部破片である。青灰色を呈し、焼成良好、口縁部は外側に強く張り出し、頸部には強いナデが一周する。外面幅広い平行線文の叩きで一部麻印と思われる陰刻が見られる。11も同様口縁部破片である。口縁端部はやはり外側に張り出し、端部丸くおさまる。頸部に強いナデが見られ、外面は平行叩きである。12は甕の頸～肩部の破片である。青灰色を呈し、焼成良好、外面平行叩き、器厚1.7cmである。13はやや薄手の破片で甕に分類したが、壺との区別がつかず、また傾きについても定かでない。胎土内に気泡が目立ち軽い感じを受ける。外面平行叩きである。14は甕の胴部破片である。外面の平行叩きは非常に細く他と区別される。15は体部破片である。外面平行叩きである。17は体部下半、底部近くの破片で、かなり歪みが見られる。外面平行叩きである。

#### 壺（第26図7、第27図16）

7は小形の短頸の壺である。推定口径11.2cm、体部最大径15.7cmを測る。口縁部は外反ぎみに直立し、端部は水平となる。内外面共にヨコナデである。16は肩部の破片と思われる。青灰色を呈し焼成良好。胎土内に白色散細粒子が目立つ。外面平行叩きである。

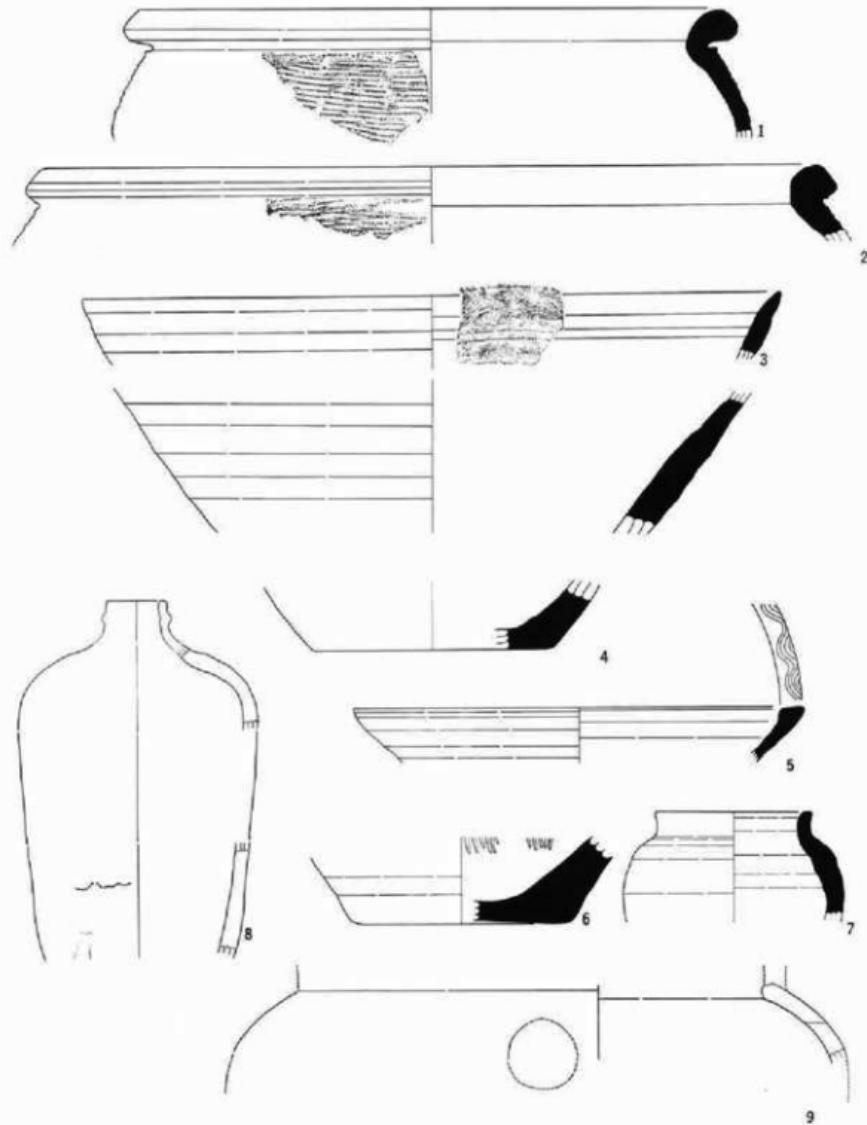
#### 摺鉢（第26図3～6、第27図18～26）

口縁部形態により3種に区別される。

A類（18、19） 口縁部が体部からそのまま延び、端部は垂直にきられるものである。18は黄灰色で内外面ヨコナデで端部は角ばる。19は青灰色を呈する。18と同様であるが端部にナデが加えられ凹状となる。このA類は2点のみで少ない。

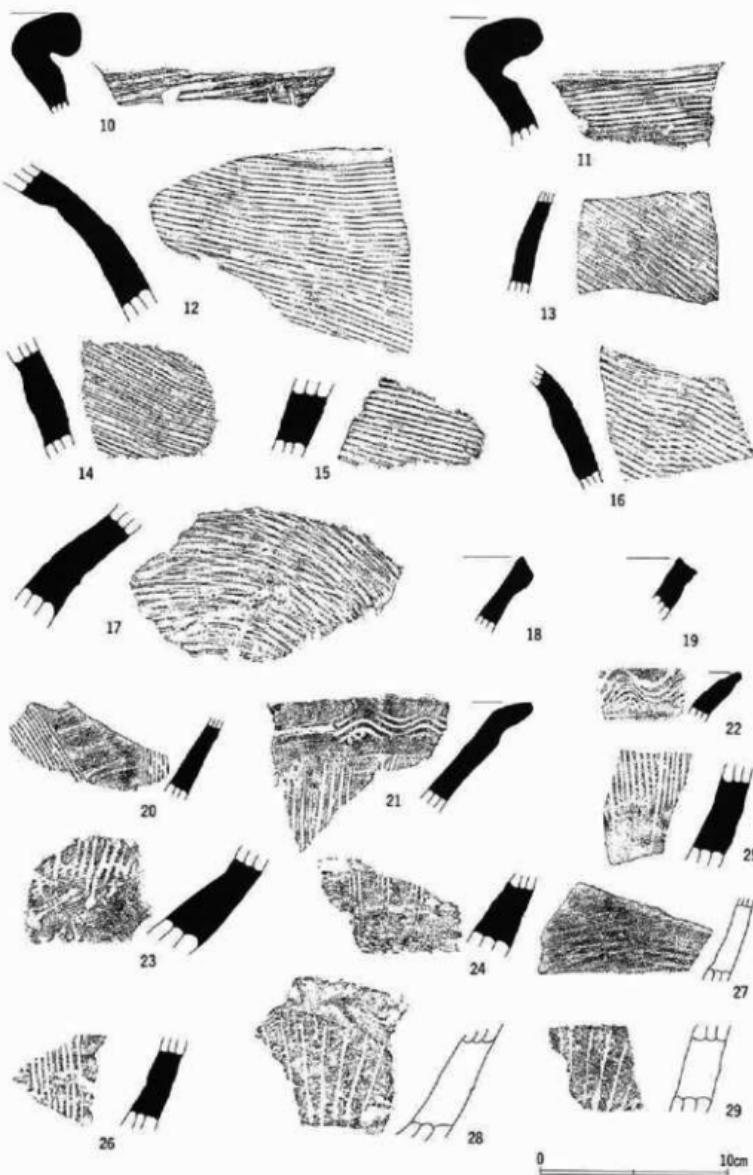
B類（5） 口縁端部が肥厚し断面逆三角形状で水平となるものであり、これ一点のみである。青灰色を呈し、焼成良好、内面には自然釉の付着が見られる。また口縁端部には波状文が付される。

2. 遺 物



第26図 遺物実測図 (1/4) 0 20cm

珠溝鏡 (1~7) 漆戸・美濃焼 (8) 瓦質土器 (9)



第27図 遺物実測図（1／3） 珠洲焼（10-26） その他（27-29）

C類（3、4、6、20~26） 口縁部はまっすぐ延びるがやや外反し、端部は細くなり丸くおさまるものである。3は推定口径50cmを測る。胎土内に白色粒子及び気泡が目立ち、軽い感じを受ける。端部内面には波状文が付される。摺目の櫛单位は不明。3と同様のものが22である。やはり内面に波状文が見られ、また外面にも太い沈線が一条めぐる。21は、口縁部の外反が大きいものである。作りはやや雑で、胎土内に小砂利や気泡が目立ち軽い感じを受ける。外面には、口縁を外反させた時の強いナデが見られる。内外外反部に波状文、また内面には摺目が走る。櫛目は太い。他は体部から底部の破片である。4は推定底径17cmを測り、外側に大きく張り出す大形の摺鉢であるが、口縁部を欠損する。灰色を呈し胎土粒子は比較的粗く砂質で全体的に軽い感じを受ける。外面のヨコナデが雑である。使用頻度が高く、内面はかなり磨り減っており摺目は見られない。内面には全体に炭化物の付着が見られる。6は推定底径15.6cmを測る。淡灰色を呈し、胎土内に小砂利が目立つ。底部は静止糸切りであるが、内面は使用による摩擦著しく櫛目はほとんど消えかかり、底部は薄くなっている。他の体部破片も櫛目は太目であるが摩耗著しい。20のみ櫛目が細かく、また施文も密でなく間隔をもっている。

#### 土師質土器（三）（第28・29図）

本遺跡で出土した土師質土器（三）は、固体数では100個を越える量的には最も多い。成形技法上分類するとロクロ成形によるものと手づくねによるものの2種類がある。

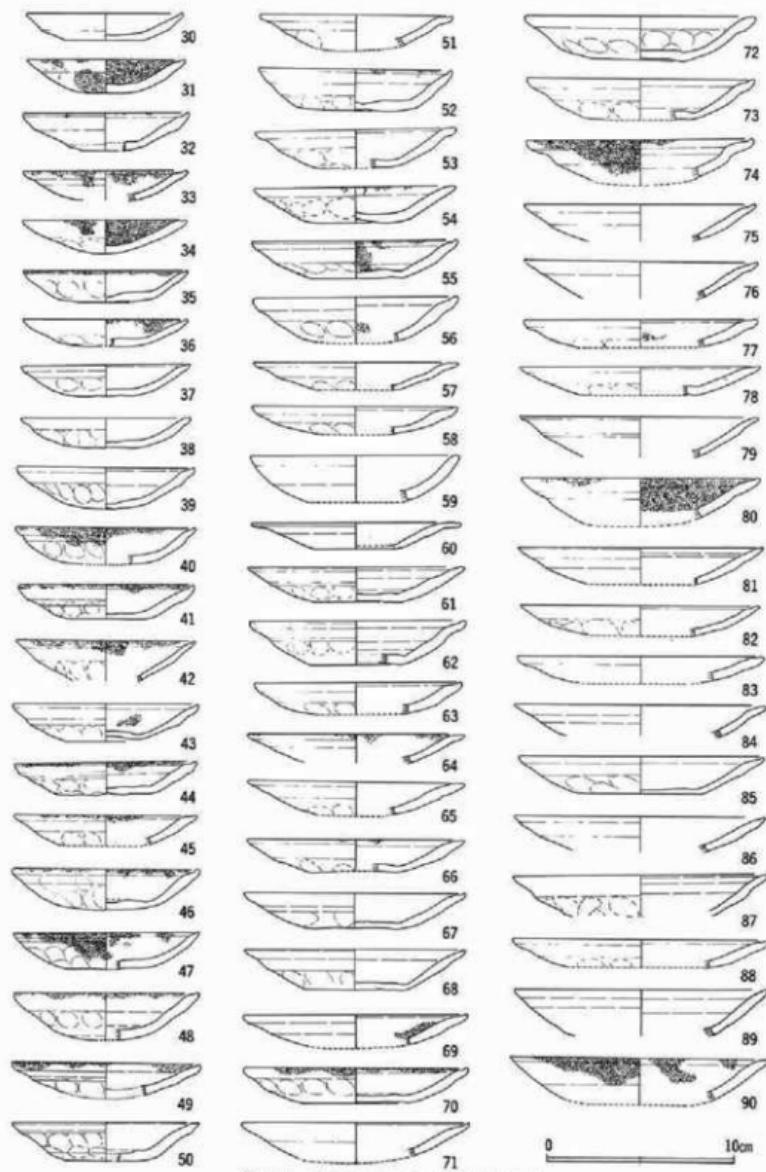
A類（30~101、19）手づくねによるもので、皿の9割以上を占めるが、口縁部及び内面すべてにナデが見られ、手づくねのみのものはない。このA類の中での成形技法上大きな差は見られない。大きくなるにつれて底部は皿状に作られるようになる。ここでは法量により便宜上4つに分類した。

a (109) 他にくらべると極端に小形で、平坦な口縁が直立する丸皿で、器形的にも他とは区別される。技術的には手づくねで口縁部及び内面はナデ調整される。外面底部は成形のためのケズリが施される。口径4.5cmでこれ一点のみである。

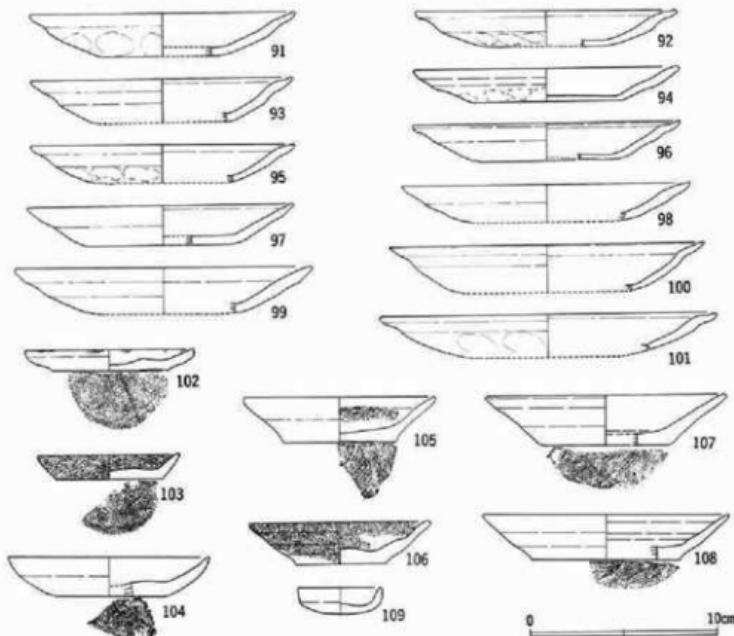
b (31~53) 口径10.5cm以下のものである。底部が盤状となるものがほとんどなく、丸味をもっているものが多い。いわゆる「へそ皿」タイプのものは43くらいである。外面には手づくねによる成形痕をよく残し、器厚は3~5mmくらいのものが多い。口縁端部は耳皿状に浅い凹みがめぐるもののがほとんどである。

c (54~90) 口径10.5~14cmに入るものである。底部が板状に作られるようになり、bのような丸底風のものは見られなくなる。bと同様、口縁端部はやはり皿状になるが60、64、65、のように端部丸くおさまるものも少量含まれる。

d (91~101) 口径14cmを越えるものである。底部はきちんと盤状に作られ、96のように厚さ3mmと薄い底部をもつ。整形は、まず底部にナデを行った後、体部に一回転のナデを加え最後に口縁部を指ではさんでナデを一周させている。技術的にはb、cと同一である。101などは



第28図 遺物実測図(1/3)(土師質Ⅲ)



第29図 遺物実測図（1／3）（土器質面）

径が18cmを測る大形品である。

B類（102～108）底部に回転糸切り痕を残し、ロクロ成形のものである。量的には非常に少なく一割にも満たない。104が内湾ぎみに立ち上がる他はすべて体部が反りぎみに立ち上がる。反りぎみに立ち上がるものでは102、103が底部が大きい割に器高が低い。102は黄灰色で砂っぽく他のものと胎土に違いが見られる。105、107、108はいずれも胎土が茶褐色で焼成良好である。内外面共にヨコナデである。

#### 瀬戸・美濃系陶器（第26図8、第30図128）

8は古瀬戸灰釉瓶子である。肩部及び胴下半の破片で肩部において径17cmを測る。肩部から下部へはほぼ直線的におりるものと考えられる。下半部の破片には画花文と思われる浅い段が見られる。釉は流し掛けである。内面にはナデ調整が見られる。128は平碗の口縁部破片で、推定口径16cmを測る。口縁部外面に継ぎをもちやや直立する。全面に灰釉が施文される。この他、同系と思われる天目茶碗があるが、細片のため時期等は明確でない。

## 瓦質土器（第26図9、第30図129）

9は肩部が球体に近い大形香炉の破片である。頭部以上及び下半を欠損する。頭部は直立に立ち上がるるものと考えられる。外面黒色である。体部には通し穴があるが単位、形状は不明である。129は口縁部破片である。推定口径22.2cmを測る。頭部は垂直に立ち上がり、口縁部は水平方向に直角に外反する。また頭部下半に突帯がめぐる。内外面共にきれいなナデが加えられ、なめらかである。内面に炭化物の付着が見られる。

## 中国製陶磁器

## 青磁（第30図110～122）

## 碗

a類（110～113） 線刻の蓮弁をもつ碗である。110は推定口径13.4cmを測る。蓮弁はすでに形骸化してしまっており上に円弧を連続させ、各々接点より縱方向に線を引いている。各蓮弁の間は約1.3cmである。111は推定口径14.6cmを測る。110と同様の蓮弁を有する。112は推定口径12.5cmを測る。各蓮弁の間は約1cmと少しせまい。113は推定口径12.1cmを測る。他に比べると色調は淡緑色で蓮弁は極端に細くなってしまっており、各蓮弁間は約0.4cmである。

b類（114～115） 器形はa類と同様であるが、蓮弁等の文様を持たないものである。116は推定口径14.3cmを測る。本来淡緑色を呈していたものであるが2次焼成により黄灰色に変色している。口縁部下に一条の浅い沈線がめぐっている。117は推定口径11.1cmを測る。白灰色を呈し2次焼成を受けているものと考えられる。

c類（116） b類と同様蓮弁等の文様は見られないが、口縁部が外反するものである。推定口径14cmを測る。二次焼成により表面はただれ気泡による凹凸が著しく、色調も黄灰色から暗灰色を呈する。

皿（117～119） 117はいわゆる「葵花皿」である。推定口径12cm、器高3.1cmを測る。低い高台からゆるい腰をもつ折腰で、口縁にむかってゆるく外反する。色調は茶紫色である。118、119も折腰で外反することから、これらの皿に類するものと考えられる。その他120、121の底部は碗・皿の区別はつかない。

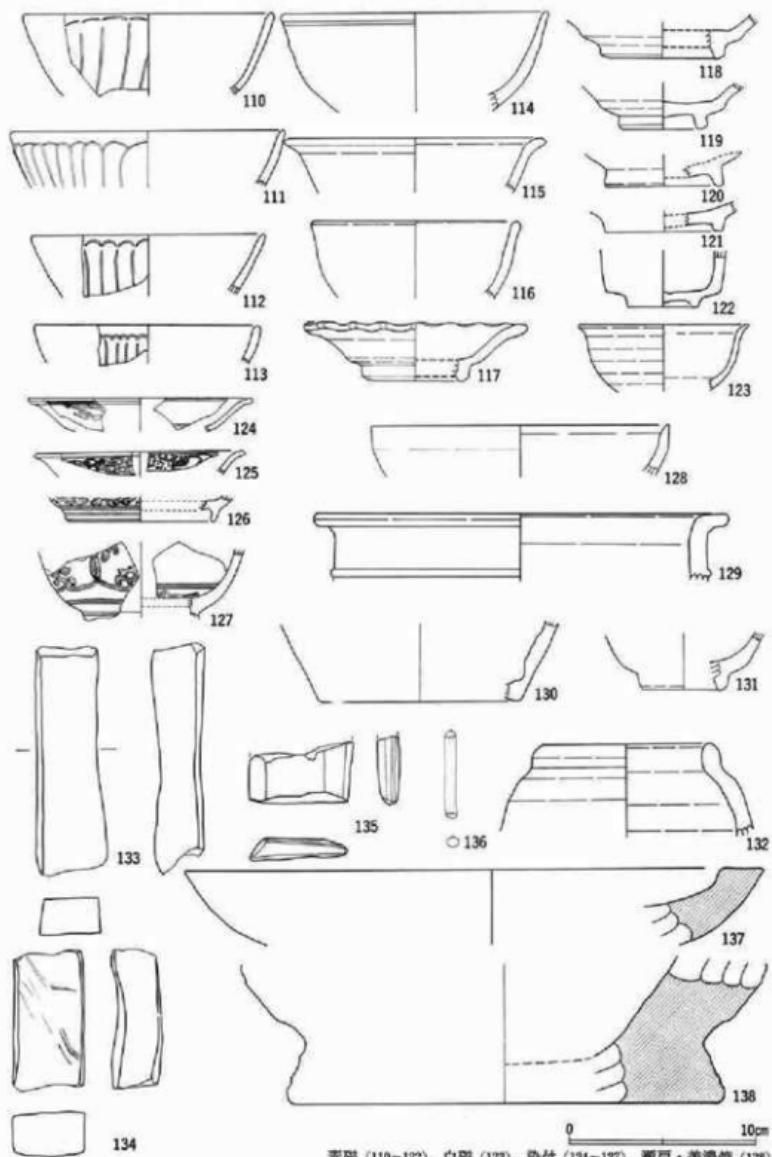
香炉（122） ヘラ削りされた低い高台に筒状の体部がつく。口縁部不明、胴部径6.6cmを測る。内面には釉の流れが見られ、底部には炭の付着がある。

## 白磁（第30図 123）

碗（123） 123は身の端反りの碗である。推定口径9.2cmを測る。外面にヘラ削り痕を明瞭に残す。

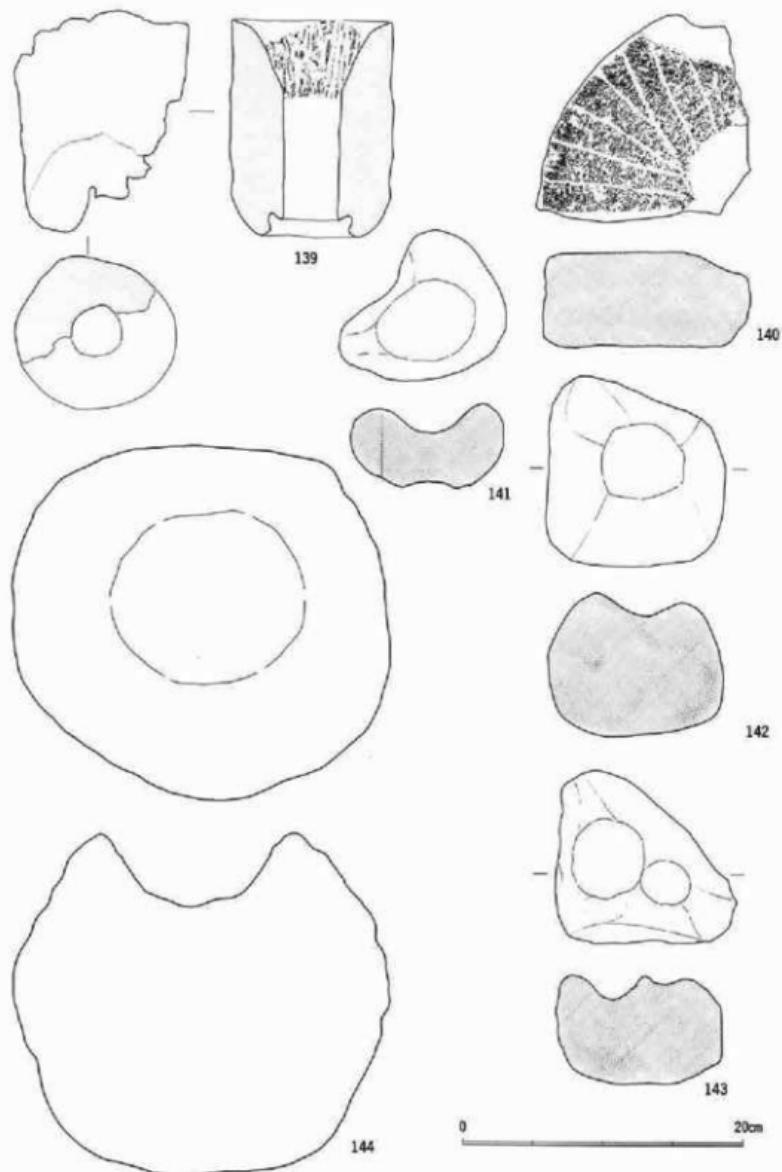
## 染付け（第30図 124～127）

皿（124～126） 124は文様の判別がつかない。端反りで推定口径12cmを測る。125も端反りで



第30図 遺物実測図 (1/3)

青磁 (110-122), 白磁 (123), 染付 (124-127), 瀬戸・美濃焼 (128)  
瓦質土器 (129), 石製品 (133-137)



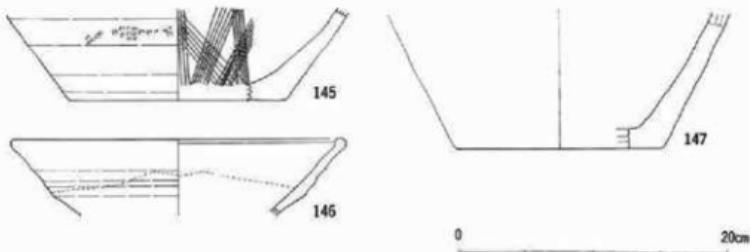
第31図 遺物実測図（1／4） 羽口（139）（平安） 石製品（140～144）

推定口径11.4cmを測る。外面唐草文で内面の文様は明確でない。126は底部破片、高台径8cmを測る。125と同様の文様構成をとる。

碗(127) 碗の胴部破片である。外面にはアラベスク文様、内面見込み部の文様構成は明確でない。

#### その他の土器

生産地及び時期の明確でないものを一括した。27は黄灰色を呈する。壺又は瓶の体部破片である。外面に平行叩きが見られる。28、29は摺鉢で同一個体と考えられる。黄褐色を呈し、焼成良好。摺目は一本一本間隔を持って付けられるが、これは最初の摺目が使用による摩耗により消失してしまったために新たに付けられたもので、本来のものではない。本来のものは28の上端に約4mm間隔で細く浅いものが残っている。145も摺鉢である。推定底径16cmを測る。茶褐色を呈し堅緻である。外面に格子目の叩き痕がある。内面には6本1組の櫛目が密に走る。146は碗と考えられる。推定口径25cmを測る。黄褐色を呈し、下半はヘラケズリ、口縁端部は丸縁とする。内外面上部に鉄釉がかかる。147は壺又は瓶の底部破片と考えられる。推定底径15cmを測る。外面暗茶褐色を呈し、胎土は暗灰色である。132は短頸壺の口縁部破片である。推定口径9.4cmを測る。内外面共に茶褐色を呈するが剥落がめだつ。胎土は比較的軽い。131は碗と考えられる。胎土は暗灰色で堅緻、内外面に茶色の施釉がかかる。高台部には施釉がない。130は推定底径10.5cmを測る壺の底部破片と考えられる。暗茶色を呈し薄手である。叩き目と思われる痕跡が認められる。図版28-1は、茶褐色を呈する壺又は壺の破片である。器形等は定かでないが色調などからは越前焼に近いものと考えられる。以上その他細片のため実測は省いたが、17世紀以後の肥前系染付・唐津焼・志野焼等が認められる。



第32図 遺物実測図 (1/4)

## 石製品（第30図、第31図）

礫石（133、134） 133は現長11.5cmで両端を欠損する。4面共に擦痕が見られる。134は現長7.5cmでやはり両端を欠損する。両面に擦痕を有する。いずれも凝灰岩と思われる。

石鉢（138） 推定底径23.3cmを測る。底部は外側に張り出す。内面はかなり擦り減っている。安山岩質である。

石臼（140） 推定径30cm、厚さ6.5cmを測る。臼目は2.5cm間隔と比較的広くまた浅い。安山岩質と思われる。

## その他の石製品（135～137、141～144）

器種不明のものを一括する。137は幅5.5cm、厚さ1cmで片側を欠損する。全面に磨きが施されており左端は片刀状となる。凝灰岩質である。136は石ぼくと考えられ、長さ4.6cm、直径0.6cmを測り、滑石製である。137は推定口径31cmを測り、石皿様のものもある。口縁部に水平面をもち、砂岩と考えられる。141～144は、大きさはまちまちであるが安山岩質で凹みを有するものである。形状もまちまちであり、141は炭化物の付着をみる。用途は不明である。

## 銭貨（第33図）

148は永楽通宝。149、150は寛永通宝である。また拓影をとることができなかつたがSB38ピット13からは上面で6枚の銭貨が出土した（図版28）。いずれも南宋銭で判読できるものでは、「紹熙元宝」「皇宋元宝」「嘉定通宝」「淳祐元宝」がある。12～13世紀代のものである。地鎮に関連したものとも考えられる。



第33図 銭貨拓影図（1／1）

## 第7章 まとめ

### 1. 平安時代以前の遺物・遺構

#### A. 遺 物

縄文時代晩期の土器はいわゆる浮線文系の土器で県内ではあまり例を見ることができない。距離的に近い例では長野県水道跡（永峯1969）御社宮司遺跡（百瀬ほか1982）等がある。これらの土器群は東海系の条痕文系土器群を伴うことが多く、現在櫻王段階に比定されている。平安時代の遺物についても完形品が少なく、明確に時期設定ができるものは少ない。この中で比較的特徴を有するものが第12図5及び7である。7は底部が回転糸切り底で強いヨコナデを下半にもっており器高は低い。今池編年（板井1984）によるV・VI期（およそ9世紀中～後半）にあたるものと考えられる。5の碗は底部回転糸切り、口縁部が外に張り出すもので、このような口縁部形態はあまり出土例がないが、体部下端に強いナデが加えられることなど、今池編年のVI期ぐらいに当たるのではないかと考えられ、これらから、当遺跡出土の平安時代の土器は、およそ9世紀後半～10世紀前半くらいに位置付けられるものと判断される。したがって共伴した製塩土器についてもやや幅をもたせ、およそ9～10世紀前半の所産と考えてよいと思われる。

#### B. 遺 構

焼土の検出されたS X21・33～35は、周辺から製塩土器が出土していることから製塩土器に関連した遺構と考えられる。しかし製塩土器の出土量は製塩遺跡にしては非常に少量であり、実際に製塩が行なわれたかどうかは明確ではない。このように焼土や炭化粒を含んだ遺構として刈羽大平遺跡（品田1983）に同様の土坑が確認されており、やはり平底のバケツ状製塩土器が出土している。また新潟市出山遺跡でも皿状に凹んだ炉で底部に細片の敷きつめられているものが検出されている（間1986）。このほか、佐渡の送り崎遺跡においては石敷きの炉が確認されている。

#### C. 県内の製塩土器について

我が国における製塩遺跡は、縄文時代まで遡るが新潟県においては縄文時代・弥生時代・古墳時代の製塩遺跡は確認されていない。県内における製塩は奈良時代に入ってからのこととされ、佐渡地方においてよく知られており、背の沢古墳（本間ほか1966）、送り崎遺跡（金沢1966）等がある。

他に栗島の茂崎鼻遺跡（本間ほか1972）、新潟市出山遺跡（関ほか1986）、最近の発掘では柏崎市刈羽大平遺跡（品田1983）等がある。現在県内で確認されている遺跡は佐渡に圧倒的に多く約60ヶ所、本土では約10ヶ所である。ここでは県内出土の製塙土器について概観してみたい。

### 1. 出山遺跡（新潟市太郎代字出山）（第35図）

新潟市の北東太郎代と龜塚浜集落の中間に位置し、いちばん海岸よりの（海岸から300～500m）砂丘列下の存在する。新潟東港の造成工事中に発見され、昭和44年に新潟県教育委員会が調査主体となり緊急調査が実施された。遺構については、長径1mの長方形の製塙炉が数基確認され皿状に凹んだ底部には土器の細片が敷きつめてあったという。

#### 遺物

今回、未発表資料についてその一部（県教委蔵）を図示したが、図示したタイプの他、底部径20cm以上の所謂バケツ状をした大形品も混在したようである。

#### 製塙土器（1～26）

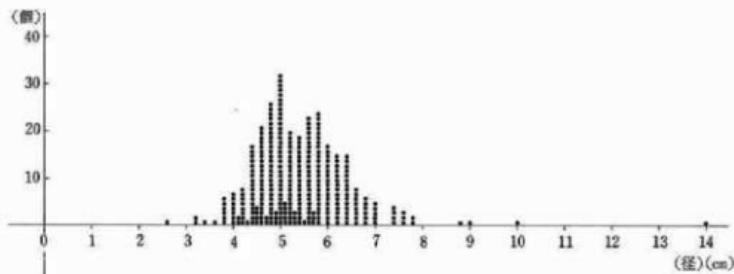
ほとんどが細片化してしまっているために全体の器形を窺い得るものはないが、おそらく1のような器形になると考えられる。底部の固体数はおよそ300個を越える。器形は底部からゆるく開き、口縁部にきて大きく外方に開くものである。口縁部形態により3つに分類される。

a類（1～3） 口縁部の開きが大きく推定口径11～14cmを測る。1は推定口径14cm、高さは16～17cm、底部4～5cmくらいになると思われる。黄茶褐色で堅く焼きてしまっている。器厚は3～4mmと薄い。内部及び口唇部は指によるナデ、外面には粗いケズリが見られ、器壁の厚さは一定しない。輪積み痕はほとんど見られない。2、3も1と同様であるが、口唇部の形態にやや差がある。

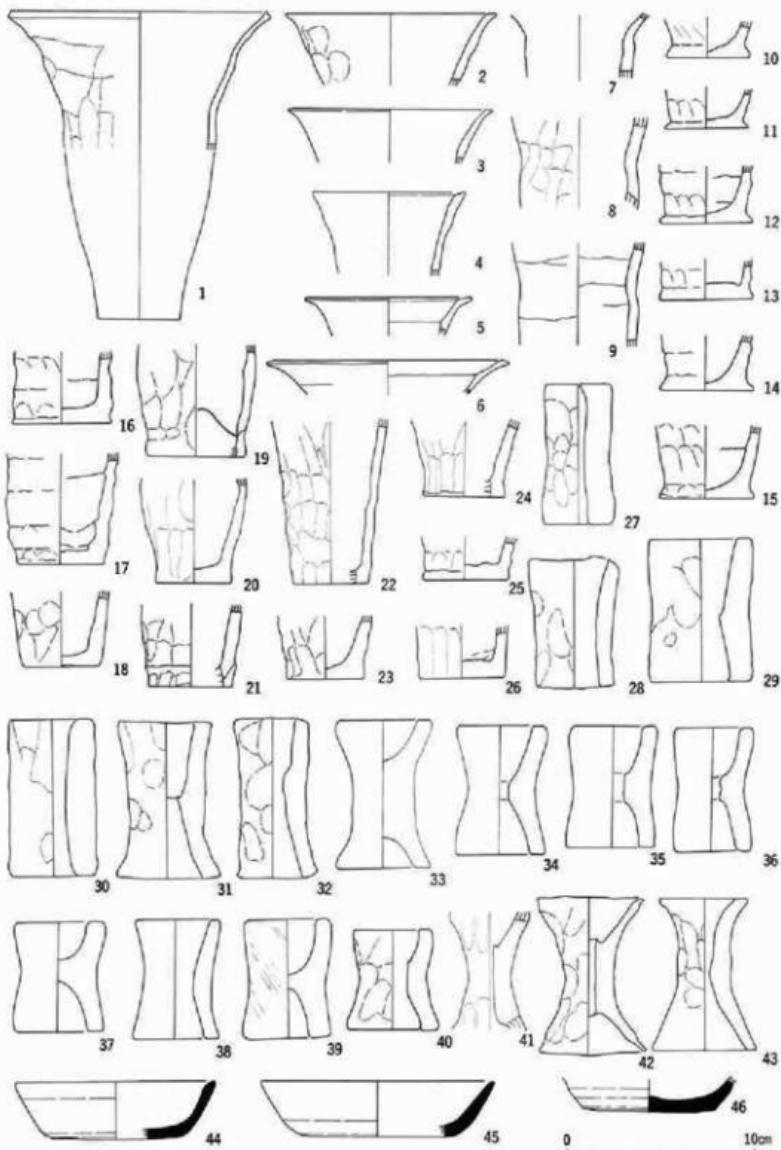
b類（4） 口縁部は開きが小さく、推定口径8cmを測る。

c類（5、6） c類は口縁部内面に強いナデを加えることにより稜を作り出しているものである。5は推定口径9cm、6は13cmである。

7～9は胴部破片である。9には輪積み痕が残存する。また底部（10～26）についても、底部がやや外方に張り出すもの（10～15）とそうでないもの（16～26）の2つに分けることができる。



第34図 出山遺跡出土製塙土器底径分布図



第35図 出山遺跡出土土器 (1/3) (10-17, 25・26, 33-39は関ほか1986原図)

やはり内面にナデ、外面はケメリである。いずれも二次焼成を受け、剥落やヒビが多く見られる。底径についてみると5~6cmを中心として4~7cmのものが大半を占め(第34図)、ほとんど同形、同大のものが大量に作られたことがわかる。

#### 土製支脚(脚台)(27~43)

これについてもかなりの数にのぼるが、製塩土器に比べると比較的完形品に近いものが多く認められる。器高により3つに分類される。

a類(28、34~40) 高さ7cm前後のものである。口径は4~5cmで、いずれも二次焼成を受け炭化物の付着しているものも見られる。内面はナデ、外面はケメリや指の押さえにより整形されており両端部は面取りされる。中央が貫通しているもの(28、34~36、38、40)とそうでないもの(37、39)がある。

b類(27、29) 高さ8cm前後のものである。27は細く、口径4cm、29は太く、口径5.6cmとなる。いずれも両端部面取りされ、貫通している。

c類(30~33、41~43) 高さ9cm前後となるものである。円筒状となるもの(30~32)、及び中央が細くしぶられ鼓形を呈するもの(33、41~43)がある。成形技法等は他と同様である。33のみが内面貫通していない。口径はいずれも5cm前後である。

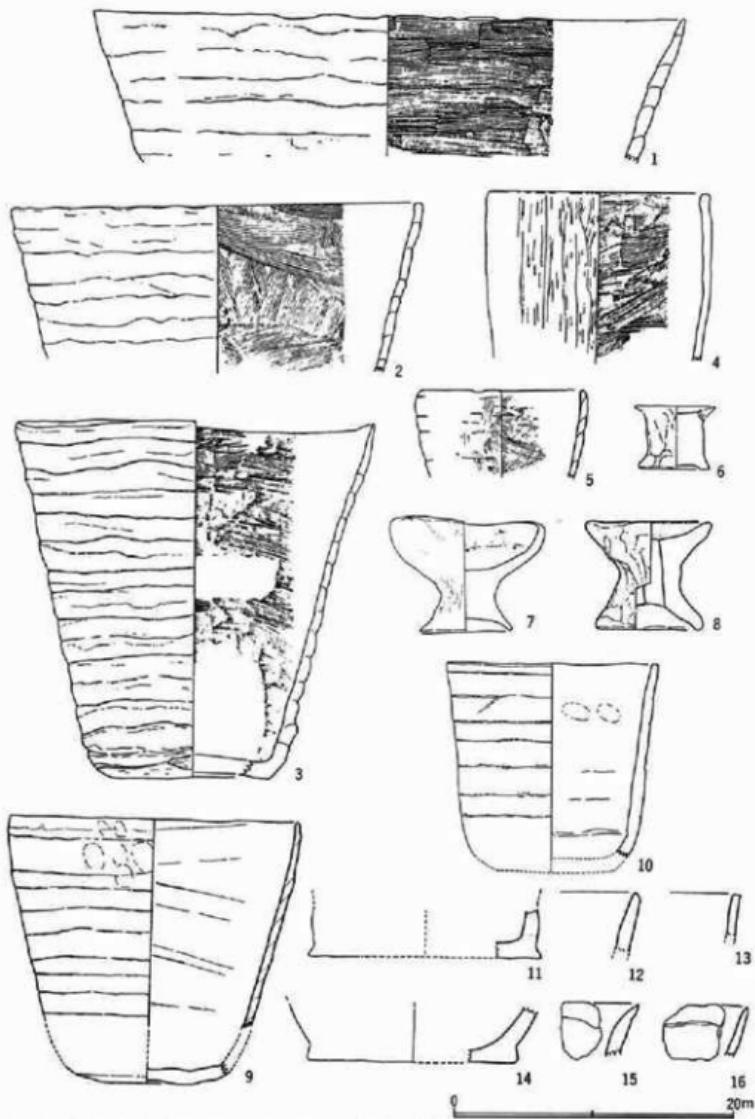
#### 須恵器(44~46)

以上の製塩土器に伴うかどうかは明確でないが須恵器が出土している。44は推定口径10.7cm、器高3.1cmを測る。黄灰色を呈するが焼成は良好である。体部は外方になめらかに立ち上り、口縁部で少し肥厚し、端部丸くおさまる。内外面共にヨコナデ調整で、底部はヘラ切りである。45は推定口径12.4cm、高さ3cmを測る。灰色を呈するが胎土内に小砂利等を含み、44に比べるとなめらかさを欠く。外方に細くなりながら延び、端部は丸くおさまる。底部ヘラ切り。46は底径7cmを測る。胎土、焼成は44と同様である。底部ヘラケメリ。内部ヨコナデの後中央部に指によるナデが加えられる。

#### 2. 剣羽大平遺跡(剣羽郡剣羽村字大平)(第36図1~8)

当遺跡は柏崎平野の北方の海岸部に近い砂丘上に所在する遺跡で、柏崎剣羽原子力発電所建設に伴い柏崎市教育委員会により昭和57年に発掘調査が実施され、製塩遺構及び製塩土器が出土した。製塩炉と思われるものは浅い不整形の土坑で焼土粒やカーボンを含んでいる。

出土した製塩土器は平底のいわゆるバケツ状の土器である。口径法量的には3種類が出土している。1のように口径が40cmを越えるもの、2、3のように25~30cmくらいのもの、4、5のように10~15cmくらいのものである。いずれも輪積み痕を明瞭に残し、内面は刷毛調整される。4は器形が筒状を呈し、外面はタテのケメリが見られる。底部は平底であるが、やや丸味をもっており、また厚さも体部と変わらないことは、立ノ内遺跡出土のものが底部を厚く作り、角ばるのと対称をなしている。またこれと共に土製支脚(脚台)が出土している(6~8)。大(7、8)は口径9cm、高さ8cm、小(6)は、口径6cm高さ5cmである。出山遺跡と比較する



第36図 各地出土の製塙土器 (1/4) (1~8 剣羽大平遺跡, 9 栗原遺跡, 10 今池遺跡, 11~13 送り崎遺跡, 14~16 背の沢古墳), (1~8 晶田ほか1985, 9 板井1982, 10 板井1984, 11~13 金沢1966, 14~16 本間ほか1966より)

と、ずんぐりした感じを受ける。6はいわゆる能登式製塩土器の柱状脚にも類似するが明確でない。

### 3. 栗原遺跡（新井市栗原）（第36図9）

昭和52年～58年にわたり発掘調査が実施され、奈良時代の郡衙又はそれに相当する遺跡とされている。昭和56年度の発掘調査により1個の製塩土器が出土している。口径20.2cm、推定器高18.5cmを測る。平底の製塩土器である。外面に輪積み痕を明瞭に残すが、内面に刷毛目は見られない。SD25から出土しており、奈良時代前半のものである。

### 4. 今池遺跡（上越市今池）（第36図10）

越後国府の可能性の高い遺跡で、昭和55年度から昭和58年度にかけて発掘調査が実施された。B地区 SD104から一点の製塩土器が出土している。外面に輪積み痕を明瞭に残し、内面は指頭圧痕と粗いナデである。9世紀前半の土器と伴って出土している。

### 5. 佐渡地方（第36図11～16）

佐渡地方では現在約60ヶ所の遺跡が確認されている。この中で特に遺跡の集中が見られるのが相川町の二見半島で、その他、外海府にかけての海岸ぞいには点々と遺跡の分布が見られるが、反対側の両津市沿岸では、あまり確認されていない。

遺跡は多く確認されているものの、復元された土器ではなく、全体を窺い知ることはできない。背ノ沢古墳出土例（本間ほか1966）からすると底径は14～15cmほどであり、また口径は破片の感じからすると40cmを越えるような大形のものはなきようである。送り崎遺跡出土例では3～4cmの薄手の破片も存在するが器形は不明である。また、大半の遺跡において円筒有孔器台が存在している。最近の資料では小泊瓜生崎において輪積み痕を明瞭に残した立ノ内タイプの大形土器が出土している。しかし、ここでは円筒有孔器台は出土していない。

### 6. 栗 島

栗島においても茂崎島遺跡で製塩土器が確認されている。佐渡のものと共にすると考えられ、また円筒有孔器台も存在する。瀬の鼻遺跡では、出山遺跡類似の棒状器台が出土している。

以上、県内の製塩土器について概観したが、北陸地方との比較において検討を加えたい。まず県内において、能登地方に見られるような倒盃形土器、棒状尖底土器は確認されておらず、すべて平底である。能登地方の製塩土器の変遷を見ると、倒盃形土器→棒状尖底土器→大形平底土器→（小形平底土器）と変化しており、棒状尖底土器が平底土器に変化するが7世紀末～8世紀初とされている。県内においては現段階においてこの平底タイプの土器しか確認されていないところからすると、古墳時代には製塩土器は存在せず、奈良時代に入る前後に初めて製塩土器が現われたものと推察される。

時代の把握される資料としては刈羽大平遺跡、栗原遺跡出土のものがある。栗原遺跡は内陸の遺跡であり、1個単独出土である。おそらく塩運搬に使用されたものと考えられる。8世紀前半にあたるものである。刈羽大平遺跡においては、口径が40cmを越える大形のもの、口径が

25~30cmの中形のもの、口径が10~15cmの小形のものと、3タイプが存在している。これらは、8世紀初頭と考えられる土師器と同一包含層において確認されていることから、これら製塩土器も同時期のものとして捉えていいのではないかと考えられる。両遺跡出土の製塩土器は、ほぼ同時期の所産であると言える。两者共に底部を厚く作っておらず共通的な部分が認められる。

9世紀後半から10世紀と考えられる立ノ内遺跡出土の土器にも、大形と中形が見られるが、刈羽大平遺跡のものと比べると器壁の厚いものが多く強く焼けた感じがあまり見られない。また器台は存在していない。立ノ内遺跡と同タイプの土器の出土している佐渡瓜生崎出土のものにも器台は存在しない。

このように県内出土の製塩土器は、8~10世紀にわたり確認され、すべて平底タイプであり、8世紀代には器台が伴うが、9世紀代以降と考えられる大形の平底土器には器台は伴わない。

ここで問題となるのが、出山遺跡の小形土器である。同じ平底とはいえ、他の平底とは全く系統の異なるものである。成形技法では、輪積み痕が明瞭でないこと、ケズリにより器厚を極端に薄くしていること、ハケ調整が認められないこと等の違いをあげることができる。器形的には、口縁部にきて外反が大きくなること、胴部が長いこと等がある。

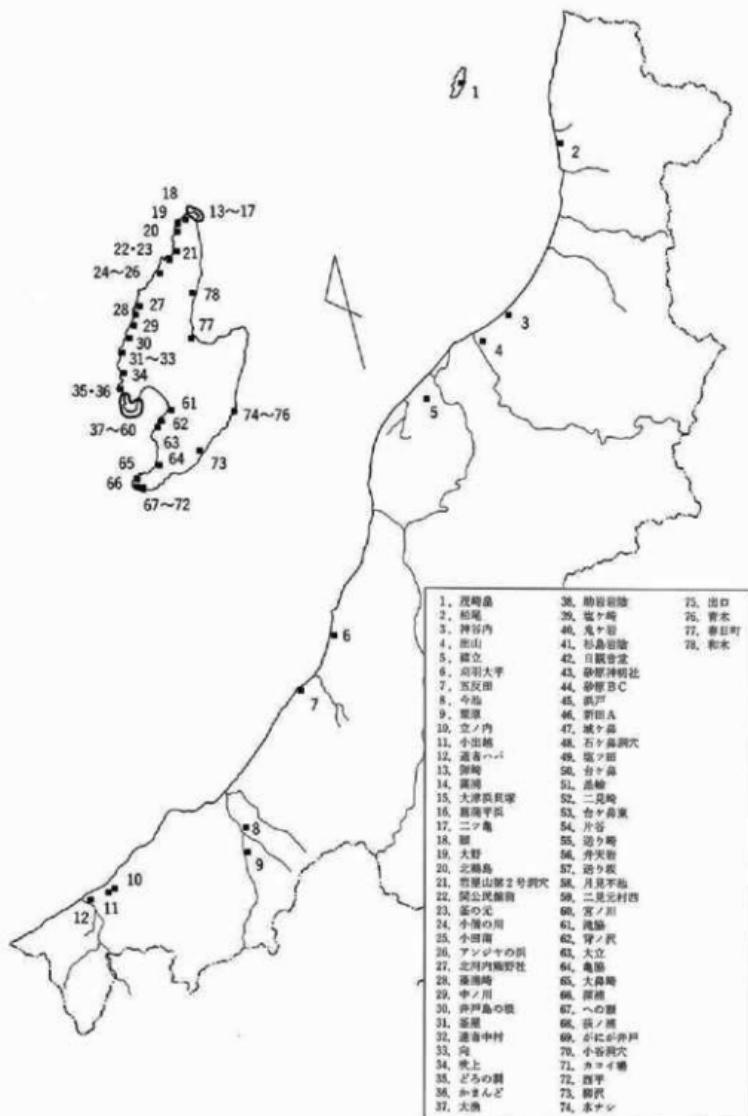
以上のような点において底部の違いを除けば共通的な要素が強いのが所謂「森越タイプ」と呼ばれる棒状尖底土器である。この棒状尖底土器は、能登半島において広く見られ、およそ7世紀代に広く使われたタイプである。おそらく棒状部を砂地に突き刺して使用したものと考えられる。

出山遺跡のものは細い円筒状又は鼓形の器台を伴うことは確実であり、底部の観察において、円筒状に変色の見られるものがあることからすると器台とセットとして使用されたと考えられ、器台をある程度砂中に埋めて使用したものと推察できる。この出山タイプの土器及び器台は佐渡及び能登地方では確認されていないが、底部のみの破片では、石川県越坂遺跡・大迎遺跡・高波遺跡等（近藤1978）に小形の底部が見られ、あるいは、同タイプの可能性もある。東北地方においてもみられない。

型式学的には尖底から平底への変化は考え方として適当と思われ、棒状尖底土器と出山タイプが時間的並列関係にあったと考えるより棒状尖底土器の変化したものとして出山タイプが出現したと考えた方が良さそうである。そしてその系譜は、やはり能登方面にあったと考えられる。

年代的には棒状脚の後であるので、7世紀後半~8世紀初めに位置付けることができる。そしてこの平底土器の出現と共に支脚も同時に出現している。

ここで問題となるのが、この土器が煎熬用か焼き塩用かということである。報告（関1986）によると、7地点において土器の集中が見られ、他の地点では平底大形のものも存在したとされている。8世紀にはすでに大形平底タイプが出現していることから考えれば、大形は煎熬用として、小形が焼き塩用として使用されたとの推測も可能となる。ただほぼ同時期と思われる刈



第37図 県内における製塙土器出土遺跡分布図（昭和54年度新潟県遺跡地図に最近のものを加筆）

羽平大塚跡には出山タイプの土器は出土していない。

以上のように奈良時代に入ると製塩土器は大きく変化することがわかり、奈良時代以前はかなり斉一的で単純な器種構成であったのに対し、奈良時代以降は平底を基本としながらも、器形・法量的にかなりのバラエティが認められるようになる。全く想像の域を出ないが、このことは、生産から流通の手段までその用途に応じて土器が作られたことを意味していると考えられる。

新潟県において製塩の始まったのが奈良時代の始まる前後であることを考慮すると、その背景には国家的な動きが反映しているとの指摘はすでになされている（関ほか1986）。

日本紀略の延暦21年（802）正月13日の条には「庚午、越後国米一万六百斛、佐渡國塩一百廿斛、毎年輸送出羽田雄勝城為領丘帳」とあり、佐渡からは毎年約120俵の塩が雄勝城に送られていたことがわかる。国家的事業として9世紀には塩生産が行なわれていたことになる。はたして、現在確認されている佐渡の製塩遺跡がこの資料に関連しているかどうかは共伴土器が明確でないため、はっきりしない。

## 2. 中世の遺構・遺物

### A. 遺物及び遺跡の年代について

中世における県内の土器編年は、珠洲焼を中心に研究が進められ、最近ではこれに青磁、染付等の編年が比較、検討されるようになった。当遺跡についても、年代比定はこれらに依るものであるが、珠洲焼については吉岡編年（吉岡1982）、青磁、染付については上田編年（上田1982）、小野編年（小野1982、1985）をそれぞれ参考とした。

まず珠洲焼であるが、完形品に恵まれず、時期を把握できる遺物は少ないが、摺鉢の口縁部形態が比較的年代を反映してくれている。この中でA類としたものは各期に見られ、時期判断はむずかしい。次にB類としたものは、口縁部内面に波状文を有しており、また断面逆三角形状の形態から珠洲編年のV期とされる西方寺2号窯出土のものに類似している。またC類としたものは珠洲焼の中でも最終段階とされる西方寺1号窯出土のものに類似しており、これから考えて、上限はIV期とされる法住寺3号窯段階には適り得ず、当遺跡の珠洲焼は、V～VI期にあたるもので、およそ15～16世紀前半の年代が与えられよう。

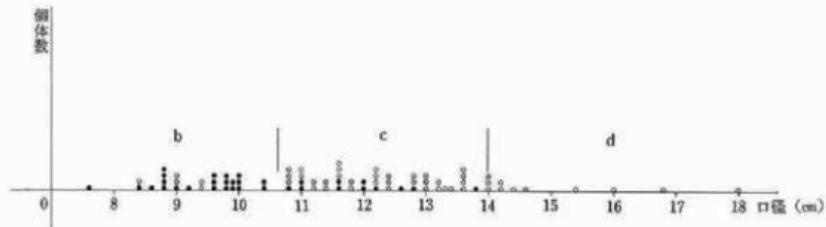
古瀬戸瓶子は、復元実測図から言えば、底部のすぼまりがなく、ややすんやりした器形となり、古瀬戸編年の後期（藤沢1984）にあたるものと考えられ、およそ15世紀代ということになる。

青磁では、蓮弁がすでに線描きであり、蓮弁が幅広のものから細かいものへと変化することを考慮するならば、110、111が15世紀後半、112、113が16世紀前半の年代が与えられるのではないかと考えられる。また、無文の114についても山梨県新巻本村遺跡（上田1982）に類例があり、およそ15世紀とされている。119の皿は越前朝倉館（福井県教委1979）でも出土が知られ、や

はり16世紀代とみることができる。

染付けの皿(126~128)は小野による染付皿B群(VI皿類)に同形・同文様のものがあり、越前朝倉館、伝至徳寺(小島ほか1983)においても出土が見られる。また碗は染付け碗D群(碗IV)に同形・同文様のものが見られる。これら碗D群及び皿B群は15世紀後半~16世紀前半とされているものである。この他、越前鏡と思われる土器の出土があるが、時期は明確でない。近世以降についても唐津・志野・染付け等細片が見られるが、直接当遺跡に関連したかは不明である。

土師質の皿については、当該期の遺跡において最も普遍的に現われる器種の一つである。当遺跡において多くの出土を見ている。法量によりa~dに分類したが、その用途については種々あると考えているが、最も明確にわかるのが、タール状の付着物である。これにより證明皿として利用したことがわかる。当遺跡においてはb類の8割にタールの付着が見られ、小皿はほとんどが證明皿として利用されたと考えてよい。c類では約2割、d類では全くタール状の付着は見られず、数量も少なくなる。タール痕の見られないものは日用雑器として利用されたものであろう。この土師質皿は県内の中世の遺跡においても量的な差はあるものの、ほとんどの遺跡で出土が知られている。成形技法上、手づくねのA類と、ロクロ使用のB類に分類したが、これら土師器の系統を引く土器は東日本と西日本とでは大きな違いを見せている。畿内地方では中世を通じてほとんどがA類の手づくねによる成形であり、関東地方ではロクロ使用が主流を占めており、際立った対称を見せている。このA類にあたるものは県内では春日山城跡(小島、中村1977~1984)、伝至徳寺(小島、中村1983)、新井市坪ノ内遺跡(坂井ほか1986)、小国町御船遺跡(大河内1985)、村松城跡(奥田、大河内1982)等で出土しており15~16世紀に県内で一般的に使用されていた器種である。このA類は北陸一帯に共通するものであり、畿内地方との強い関連性を窺うことができ、畿内的な土器ということができる。ロクロを使用し底部に糸切りを残すB類は、当遺跡では量的割合はせいぜい一割程度である。A類を出土している前記の遺跡では、村松城を除いて、すべてにこのB類の出土が見られ、量的割合も同程度である。ただ伝至徳寺遺跡、長岡市三貫梨遺跡<sup>1)</sup>(駒形1987)ではまとまった出土をみていている。このB類

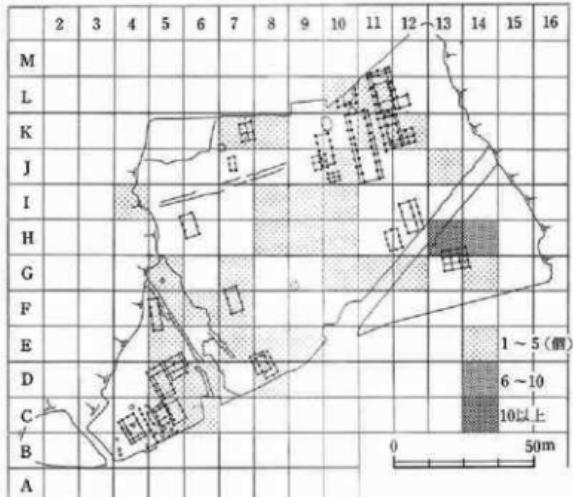


第38図 土師質皿口径分布図 (●タール状付着物のあるもの)

1) 三貫梨遺跡では、手づくねのA類は全く出土していない、B類のみである。

は、この遺跡とほぼ同時期の越前朝倉館においてはほとんど出土しておらず、また富山県弓庄城跡（宮田1985）においては、弓庄城跡Ⅰ期（12C後～13C前）見られるが、それ以降にはほとんど見ることができない。このような北陸地方の状況からみて、15～16世紀において、より北陸地方に近い上越地方では、手づくねのA類が主流を占めながらも、B類が地域によって異った入り方を示したものと考えられる。そして、その流入経路は、信州又は関東方面からと思われる。したがって当遺跡においてA類、B類を前後関係でとらえるのはむずかしい<sup>1)</sup>。生産地及び流通範囲等がどのようなものであったかは明らかではないが、A類などは、畿内から北陸を通して共通するものであり、かなり広い範囲で流通していた可能性がある。

以上のことから当館の存続時期について考えてみると、まず上限は珠洲編年のV期に近い措鉢も見られるが大半が15世紀後半以降と判断され、またその他の青磁、染付等も15世紀後半からのものであり、その上限を15世紀後半とすることができよう。次に下限であるが、まず越前焼がほとんど認められないことがあげられる。上越地方においては16世紀後半になると越前焼の流入が一定量認められる。上越市の春日山城や新井市坪ノ内遺跡等での入り方からすると少ないものであり、他の瀬戸・美濃焼等も大変少量であることを考えると、16世紀後半までは降りりず、16世紀前半で廃絶したのではないかと思われる。



第39図 土師質皿グリッド別出土分布図

1) 県内における土師質皿については坂井邦子（坂井邦子1987）により概観が述べられている。これによると、15世纪代においては、長岡市三貴梨町から、一時期B類（糸切り底）によって占められた時期があったのではないかとの指摘がなされている。

### B. 遺構について

遺物の検討から、遺構の年代は15世紀後半～16世紀前半にわたるものであることが判明したが、ここで遺構配置について検討してみたい。大きく3つのグループに分けることができる。一つは西側の段丘崖線にそって並ぶ建物群(A)である。SB38を中心としてSB27・47・46・42・50・41・40・39・49・48・23がそれである。建物の主軸はほぼ一定方向を示しており、おそらく西側の段丘崖線を基準として設計されたものと考えられる。この中で重複関係にあるのがSB27とSB47、SB41とSB50、SB40とSB39である。各々の重複している建物の柱穴が太いものと細いものに2分されるところからすると、まず細い柱穴のSB46・47、SB50・40・48・49が最初に構築され、その後にSB27・38・39・14・23が規模を拡大する形で建て替えられた可能性が高い。建物の性格からいえば、総柱のSB46・47が建替によりSB23に移動し、拡大をはかったと思われる。ここでSB23の性格を考える上で、一つの指標を示すのが土師質皿の出土である。第39図に示したものは土師質皿の地区別出土状況である。この分布図から明らかのようにSB23の北側で圧倒的に多く出土していることがわかる。建物の集中しているSB38周辺やSB1周辺に比べると明らかな差である。したがって、総柱であることからすると他の建物とは異なった性格を有していたものと考えられる。次にSB39・41は類似した建物構造をもつて東側に張出し部を有し、また総柱の中央部の柱を欠く構造となっている。SB38と合わせて中心的な建物であろう。SB38は桁行の長い建物である。このような細長く両面廻の建物は新井市坪ノ内遺跡の建物11と共通する。次にSB15・28・37・51(B)が、同一面上の西側段丘崖にそって並んでいる。また中央部においてはピット等多数認められたが、建物等は確認できていない。したがってこの部分は空間となり、何らかの利用のされ方をしたものと考えられる。この面の一段下にもSB1をはじめとして建物の集中(C)がある。ここには建物にそった柵列等も認められ、2回以上の建替えが認められる。SB25は小規模であるが細長いもので、一般的には馬屋と考えられる建物である。この建物群は1段低いこともあり早川沿いの視界からさえぎられる位置にあり、前記のA、Bのグループとは異なった性格を有していたものと考えられる。なお今回発掘調査を行った範囲内において井戸は確認されていない。火碎流堆積物上に立地していることもあり、深掘りを行っても水は出ないものと考えられ、おそらく法線外においても井戸は存在しなかったものと推察される。また、SD10、26等の細い溝は存在するものの、堀や土塁もみられない。

### C. 遺跡の範囲及び性格について

次に遺跡の範囲であるが、法線外まで延びていることは確実である。まず北側については、すべて水田であり、表探等はできないが、地形的に見て、同一段丘面を形成している三角部分は、同じ「立ノ内」地籍内であり、遺跡と考えられる。次に南側であるが、南側は現在「田屋」



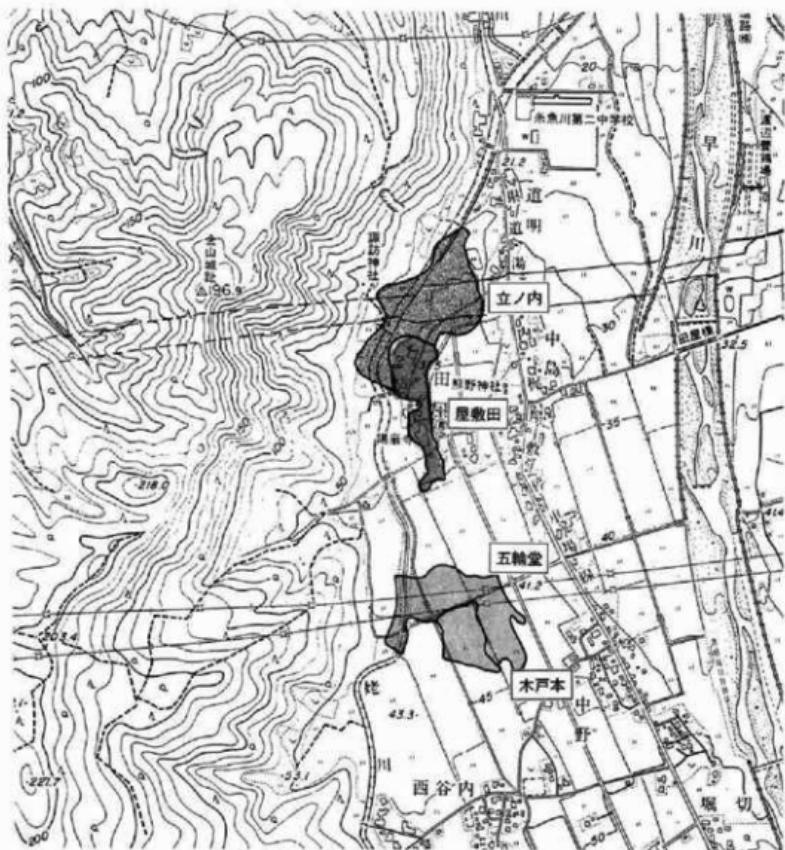
第40図 立ノ内遺跡範囲推定図 (1/5000)

期に登場してくるらしく、今川氏関係が古い例で、その後、武田、上杉等東国の大名の城郭に関連して見られる。根知城の位置からして、信州武田の影響のもとに付された名称の可能性がある。「要害」は不動山城のふもとに今も残る集落名であり、同集落内には、「御殿屋敷跡」と呼ばれている所も残っていることから、根小屋とはほぼ同様の意味をもっていたものと考えられる。

「館」は、一般的には領主の屋敷を言うが、東北地方においては低地に臨んだ丘陵の先端の地形をさすことば（柳田1936）としている。東北地方においては「館」と称されている中で集落を含み込んだものが確認されている。方形単郭等の構造を持ったものではない。もし、この立ノ内遺跡が字「立ノ内」「屋敷田」にまで広がっているものであれば東北地方にある「タテ」と同じような性格を有していたことも考えられる。しかしSB38をはじめとして大規模な建物の存在はやはり軍事的性格を有する「館」の機能をはたしていることが考えられ、字「立ノ内」「屋敷田」を含めた一集落単位の中の一角に軍事的性格を有する「館」が存在した可能性が強い。地形的に見ると背後に姥川が流れ、三角形状につきでた地形は、河川流域の段丘端部に見られる地形に共通する。この姥川が堀の役割をはたしており所謂「タテ」の地形にふさわしい場所であったとすることもでき、加えて場所が、金山城のすぐふもとであることも軍事的要件を満たしていると言えよう。このように考えると今回発掘調査を行った地区から北側にかけて

集落であり、同一面が南北に細く続いている。ある場所において東西方向に堀が切られていた可能性は考えられる。地籍図では、この田畠集落は「屋敷田」となっており、この地名からすると、立ノ内からの連続で遺跡が延びていた可能性も十分ある。また、そこから少しおはれて「五輪堂」「木戸本」（第41図）があり、金山城東斜面は「立壁」となっている。このように見ると、この立ノ内遺跡は、いわゆる方形単郭の堀、土塁をめぐらした館とは性格を異にする可能性も考えられる。一般に城館の名称には多くの呼び名がある。糸魚川市内に存在する城館をとってみても、「根小屋城」、不動山城にある「要害」、そして「館」等の名がある。「根小屋」は寝小屋の意であり、城のふもとにおける集落をさしている。石丸

(1981)によると、史料的には、室町時代後



第41図 遺跡付近の字名（原図第3図に同じ）

の三角形状の地形がいわゆる軍事的性格をもつ「館」の性格を有していたものであり、その後の現在の田畠集落一帯が一般集落として連続していたものと考えられる。

早川流域において中心的な山城は不動山城である。その創設年代は定かでなく、南北朝時代ころではなかろうかとの説が有力であるが、文献的には16世紀後半になってはじめて表われる。金山城の居館としての「立ノ内」が16世紀前半で廃絶したとすると、あるいは金山城の機能が不動山城へ吸収されてしまったのかもしれない。

## 3. 結 語

調査結果についてまとめると、以下のようになる。

- (1) 立ノ内遺跡は、新潟県の南西部の糸魚川市大字道明字立ノ内に所在する。当遺跡は早川の左岸越川とに挟まれた、標高約30mの低丘陵上に位置している。以前より、「立ノ内」という地名から、当地が金山城の居館跡であろうことは知られていたが、昭和58~59年の分布及び確認調査によって初めて中世の遺跡であることが確認された。
- (2) 発掘調査は、北陸自動車道の建設に伴い、昭和60年、61年に実施した。発掘調査面積は約8700m<sup>2</sup>である。
- (3) 調査の結果、当遺跡は、燒山火山の火砕流面を基盤としていることが判明した。また、ある部分においては、火砕流の二次堆積層が確認された。この層の下面に、縄文時代、古墳時代、平安時代の遺物が確認され、上面には中世(15~16世紀)の遺物が確認された。この結果燒山火山は平安時代の終わりから中世(15世紀)の間に活発な活動を行っていたことが判明した。
- (4) 縄文時代の遺物は晩期のいわゆる浮線文系の土器のみで、遺構は確認されていない。また古墳時代の遺物には、土師器(壺)一個体があるが、遺構は確認されていない。ただこの土器の出土した付近において滑石製の勾玉が採集されており、両者の関係が窺われる。
- (5) 平安時代の遺構には、焼土、土坑がある。焼土は数地点において認められ、その周辺からは、土師器、製塩土器、羽口等が出土した。このようなことから、この焼土は、製塩に関連した可能性が高い。製塩土器は、厚手で輪積み底を明瞭に残す。いわゆるバケツ状のもので、数固体が確認された。
- (6) 中世の遺構には、掘立柱建物跡26、柵列3、土坑9、溝3、集石1、杭列1がある。発掘区の北東側に、大型建物の集中が見られ、館の中心的位置を占めていたと考えられる。また南西側にあは、縦柱の建物があり、特にこの周辺からは土師質皿の出土が目立った。一段低い南西側においても、建物の集中が見られ、重複したものも確認された。ここにおいては、柵列や馬屋と考えられる細長い建物等も検出された。
- (7) 中世の出土遺物には、陶磁器類、石製品、錢貨等がある。陶磁器類には、珠洲焼(壺、甕、壺鉢)、土師質土器、瀬戸・美濃焼(瓶子、平碗、天目茶碗)、中国製陶磁器(青磁碗・皿・香炉、白磁、染付け碗・皿)、瓦質土器等がある。遺跡の規模の割には出土遺物は、比較的少ない。この中で数量的に多いのが土師質皿である。日常雜器として使われていたものと考えられ、特に燈明皿としての使用が目立つ。技法的には手すくねの西日本的なものが多く糸切り底の東日本的なものは非常に少ない。これら出土遺物の年代は、15世紀後半から16世紀にかけてのものである。
- (8) 中世立ノ内遺跡は戦国時代の館としての性格を有していたと考えられ、位置的には金山城

のふもとに所在することから、金山城の居館と考えられる。また遺跡は、発掘区域外の南北にも延びており、かなり規模は大きいと言える。

## 引用・参考文献

- 石丸 黒 1981 「城郭地名一覧」「日本城郭大系」別巻II 新人物往来社
- 糸魚川市教育委員会 1984 「新潟県糸魚川市遺跡詳細分布調査報告書」
- 糸魚川市役所 1976 「糸魚川市史 I」
- 岩本正二 1980 「製塙土器の分布と流通」「考古学研究」第27巻第2号 考古学研究会
- 植木 宏 1987 「糸魚川市における城館跡一調査報告第一集一」糸魚川市教育委員会
- 「 1968 「 」 第二集一」
- 植木 宏 1980 「新潟県城郭解説」(糸魚川市西頭城)『日本城郭大系』7、新人物往来社
- 上田秀夫 1982 「14~16世紀の青磁碗の分類について」「貿易陶磁研究」2 日本貿易陶磁研究会
- 大河内勉・荒川正明 1985 「新潟県刈羽郡小国町御館発掘調査報告」小国町教育委員会
- 奥田直栄・大河内勉 1982 「付松城跡発掘調査報告書」付松町教育委員会
- 小野正敏 1982 「15~16世紀の染付碗・皿の分類と年代」「貿易陶磁研究」2、日本貿易陶磁研究会
- 小野正敏 1985 「出土陶磁よりみた15~16世紀における画期的変遷」「ミューゼアム」1985年11月号 東京国立博物館
- 金沢和夫 1966 「送り崎遺跡発掘調査報告」「二見半島考古歴史調査報告」第1輯(相川郷土博物館報 第5号)相川郷土博物館
- 金子拓男 1973 「五十嵐小文治館発掘調査報告書」新潟県南蒲原郡下田村教育委員会
- 金子拓男編 1980 「新潟県『日本城郭大系』第7巻 新人物往来社
- 岸本雅敏 1982 「じょうべのま遺跡の製塙土器と二・三の問題」「入善町じょうべのま遺跡発掘調査概報(5)」入善町教育委員会
- 岸本雅敏 1983 「富山県における土器製塙の成立と展開」「北陸の考古学」石川考古学研究会
- 北林八洲晴 1969 「青森県夏泊半島の製塙土器(子報)」「考古学研究」第18巻第4号 考古学研究会
- 小島幸雄編 1977~1984 「春日山城跡発掘調査概報」I~VII 上越市教育委員会
- 小島幸雄・中村美恵子 1983 「伝置寺跡発掘調査報告書」上越市教育委員会
- 小島芳孝 1978 「寺家 1980年度調査概報」石川県立埋蔵文化財センター
- 駒形敏朗 1987 「三貫梨遺跡第2次発掘調査一」長岡市教育委員会
- 近藤義郎 1966 「製塙」「日本の考古学」V 河出書房
- 近藤義郎・渡辺則文 1967 「製塙技術とその時代的特質」「日本の考古学」VI 河出書房
- 近藤義郎 1974 「塙と鉄の生産」「古代史発掘」10 部とむらの暮らし 講談社
- 「 1976 「土器製塙と焼き塙」「考古学研究」第22巻第3号 考古学研究会
- 「 1978 「日本塙業大系 史料編 考古」「日本塙業研究会
- 「 1979 「土器製塙の話(1)」「考古学研究」第26巻第3号 考古学研究会
- 「 1980 a 「土器製塙の話(2)」「考古学研究」第26巻第4号 考古学研究会
- 「 1980 b 「土器製塙の話(3)」「考古学研究」第27巻第1号 考古学研究会
- 「 1980 c 「土器製塙の話(4)」「考古学研究」第27巻第2号 考古学研究会
- 板井秀弥 1982 「栗原遺跡第4次・第5次発掘調査概報」新潟県教育委員会
- 板井秀弥 1983 「越後における七・八世紀の土器様相と画期について—新井市栗原遺跡出土土器をめぐって—」「信濃史」第35巻第4号 信濃史学会
- 板井秀弥 1984 「今池遺跡群における奈良・平安時代の土器について」「新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡」新潟県教育委員会

- 坂井秀弥・金沢道馬 1986 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第44集 新井市坪ノ内鉄跡」新潟県教育委員会
- 坂井秀弥・金沢道馬・田辺早苗 1987 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第48集 三島郡出雲崎町番場遺跡」新潟県教育委員会
- 白石太一郎 1971 「古代における塩生産」『新版考古学講座』第9巻 雄山閣
- 鈴木郁夫 1983 地形分類図「糸魚川」 新潟県
- 開雅之・中島栄一・戸根与八郎 1986 「第5章第4節4 集落と生産遺跡」「付録」『新潟県史 通史編1 原始・古代』新潟県
- 戸淵幹夫 1983 「能登式製塙土器一型式分類とその変遷ー」「北陸の考古学」 石川考古学研究会
- 永峯光一 1969 「水道跡の調査とその研究」「石器時代」9 石器時代文化研究会
- 新潟第四紀研究グループ 1971 「地形分類図よりみた新潟県の地形区」
- 新潟県の第四系・そのXIV—『新潟大学教育学部高田分校研究紀要』第16号
- 新潟県教育委員会 1980 「昭和54年度新潟県道跡地図」
- 平津賢二 1983 「新潟焼山火山の地質と活動史」妙高高原町教育委員会
- 原広吉 1984 「上早川村の沿革」「われら“いといがわ”大家族」糸魚川市制施行30周年記念事業実行委員会
- 福井県教育委員会 1979 「特別史跡一乗谷朝倉氏発掘調査報告Ⅰ」朝倉館跡の調査
- 藤原良祐 1984 「『古瀬戸』概説」「美濃陶磁歴史館報Ⅲ」土岐市
- 藤巻正信・品田高志 1985 「刈羽大平・小丸山」祐崎市教育委員会
- 本間嘉晴・計良勝範 1966 「背ノ沢古墳群」「佐渡博物館報」第14・15合併号 佐渡博物館
- 本間嘉晴・計良勝範 1972 「粟島の製塙遺跡」「粟島」 新潟県教育委員会
- 宮田進一 1985 「出土遺物による時期区分」「弓庄城跡第5次緊急発掘調査概要」上市町教育委員会
- 村田修三ほか 1981 「城郭用語辞典」「日本城郭大系」別巻2 新人物往来社
- 百瀬長秀ほか 1982 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市 その5—昭和52・53年度」長野県教育委員会
- 柳田国男 1936 「地名の研究」 吉今書院
- 吉岡康暢 1981 「中世陶器の生産と流通」「考古学研究」第27巻第4号 考古学研究会
- 1982 「北陸・東北の中世陶器をめぐる問題」「庄内考古学」18 庄内考古学会

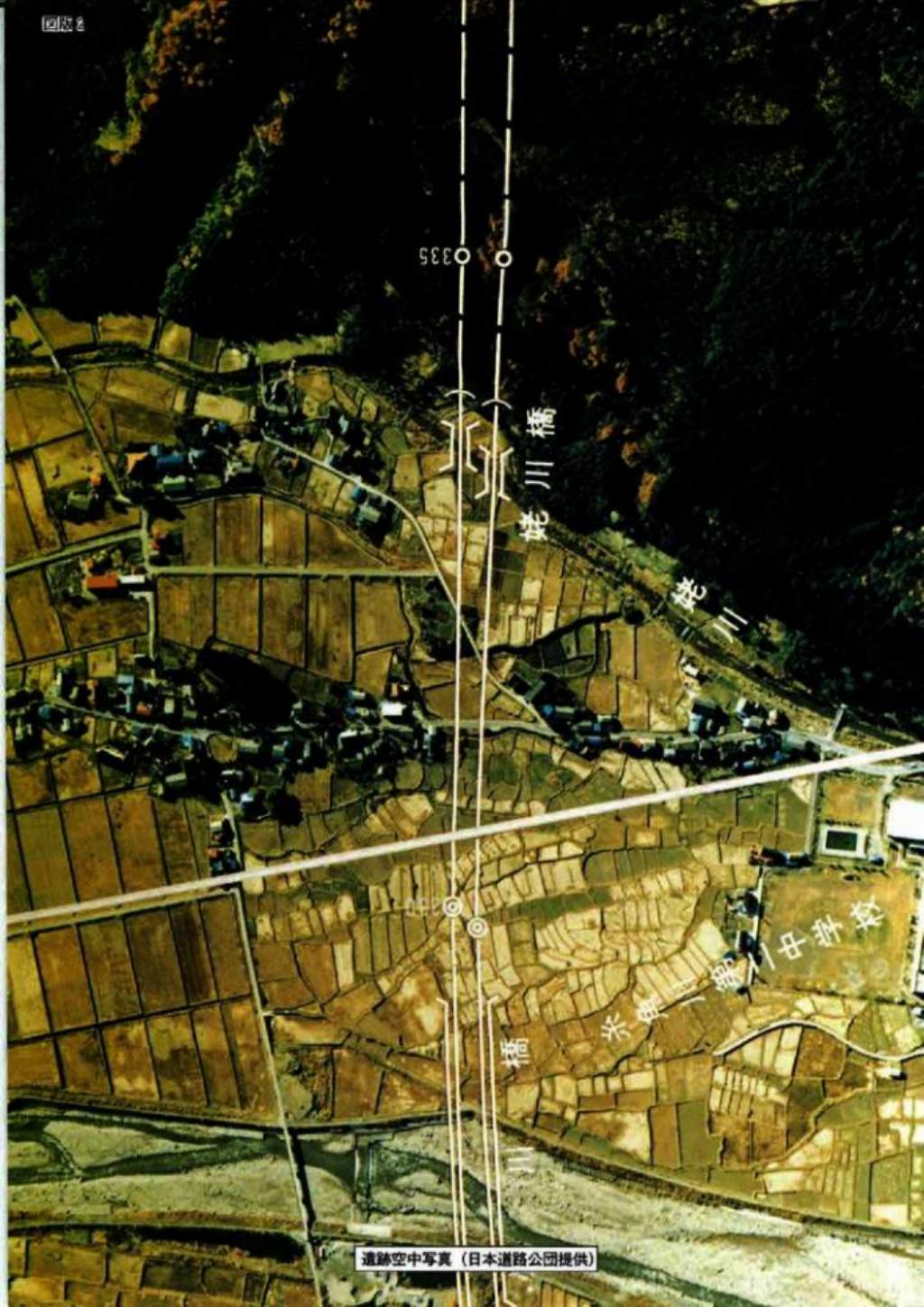


第42図 遺構全体図 (1/400)



早川流域空中写真

©上越學院 1977年撮影  
324V APRS MZTA 01CW 3NOV77 27



遺跡空中写真（日本道路公団提供）



掘立柱建物跡群  
(昭和61年度)



1  
遺跡より不動山城  
を望む



2  
遺跡より金山城を  
望む



3  
金山城より早川  
流域を望む



1 遺跡近景  
(南より)



2 昭和60年度  
発掘状況  
(金山城より)



3 昭和61年度  
発掘状況



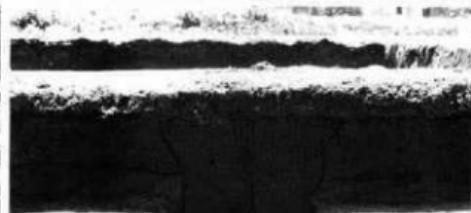
1



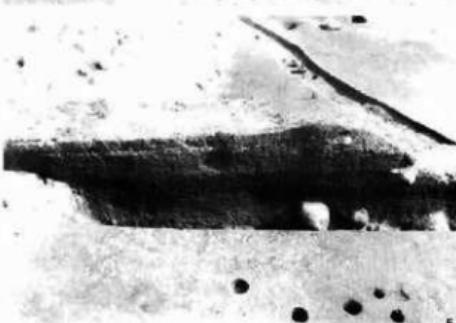
2



3



4



5



6



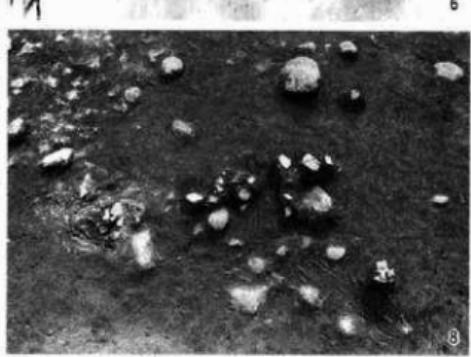
7

1 土層断面 (D5区)

2 土層断面 (B5区)

3 土層断面 (D5区)

4 柱穴断面 (D5区)



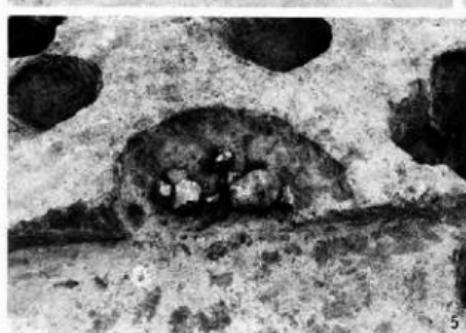
8

5 土層断面 (F5区)

6 土層断面 (F5区)

7 SX2 (製塙土器)

8 SX3 (製塙土器)



1 SX 4 (製塙土器)

2 SX 5 (製塙土器)

3 C4 区発掘状況

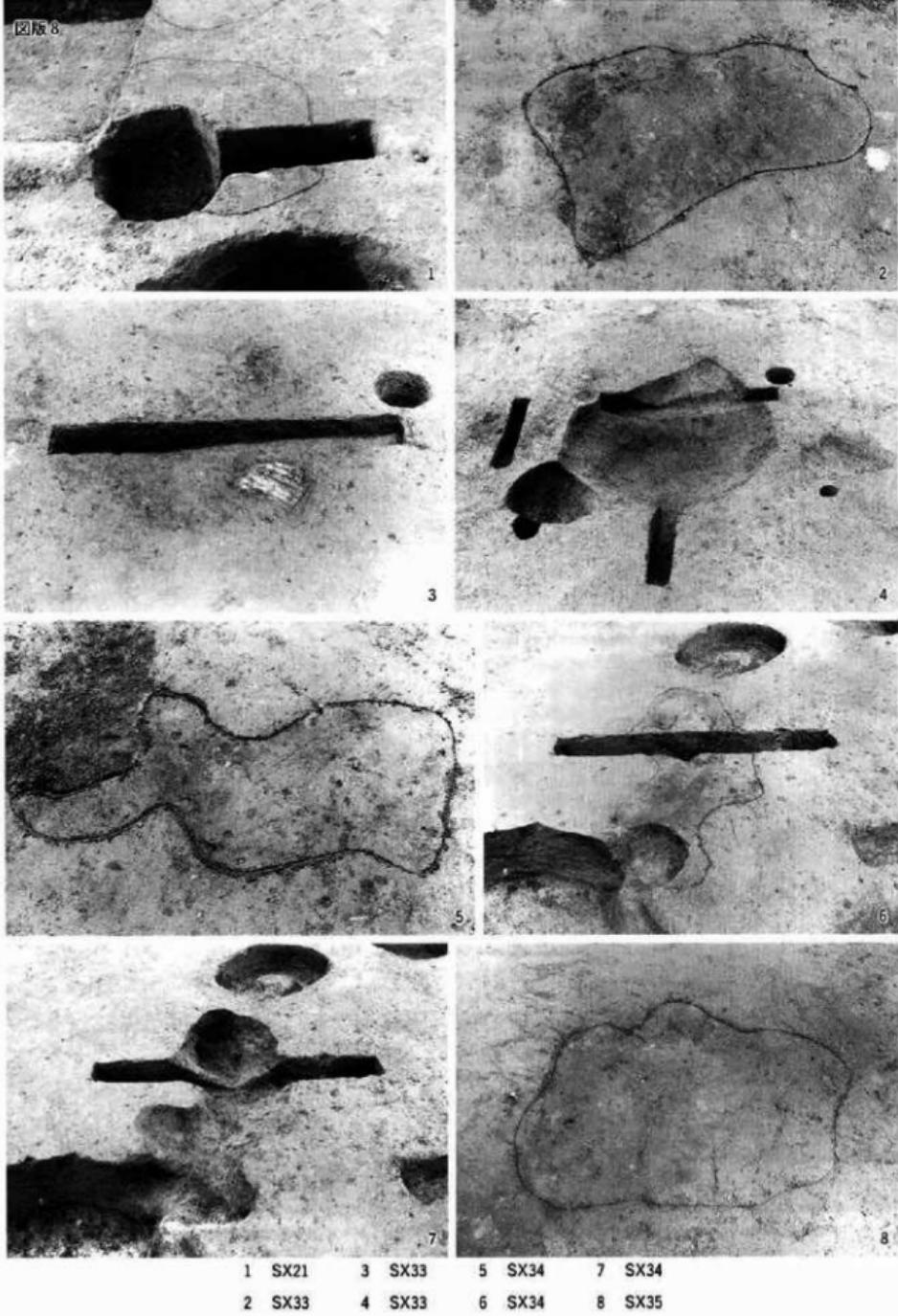
4 C5 区焼土確認状況

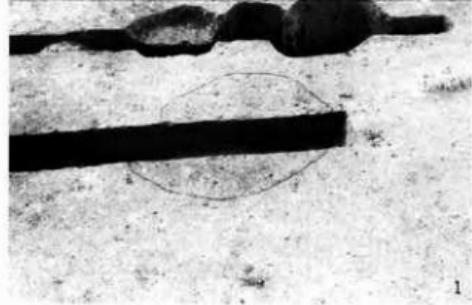
5 SX20 (羽口)

6 SX21 (焼土)

7 SX21

8 SX21





1



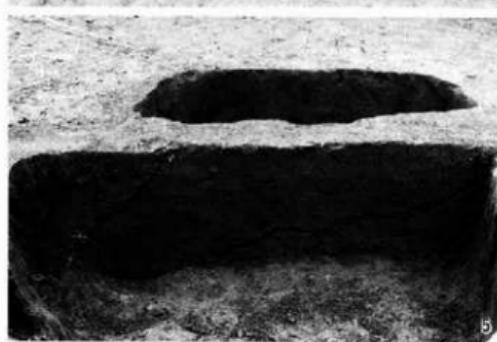
2



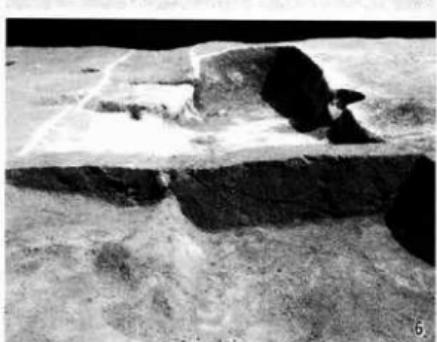
3



4



5



6



7

1 SX35

3 SK8

2 SX35

4 SK8



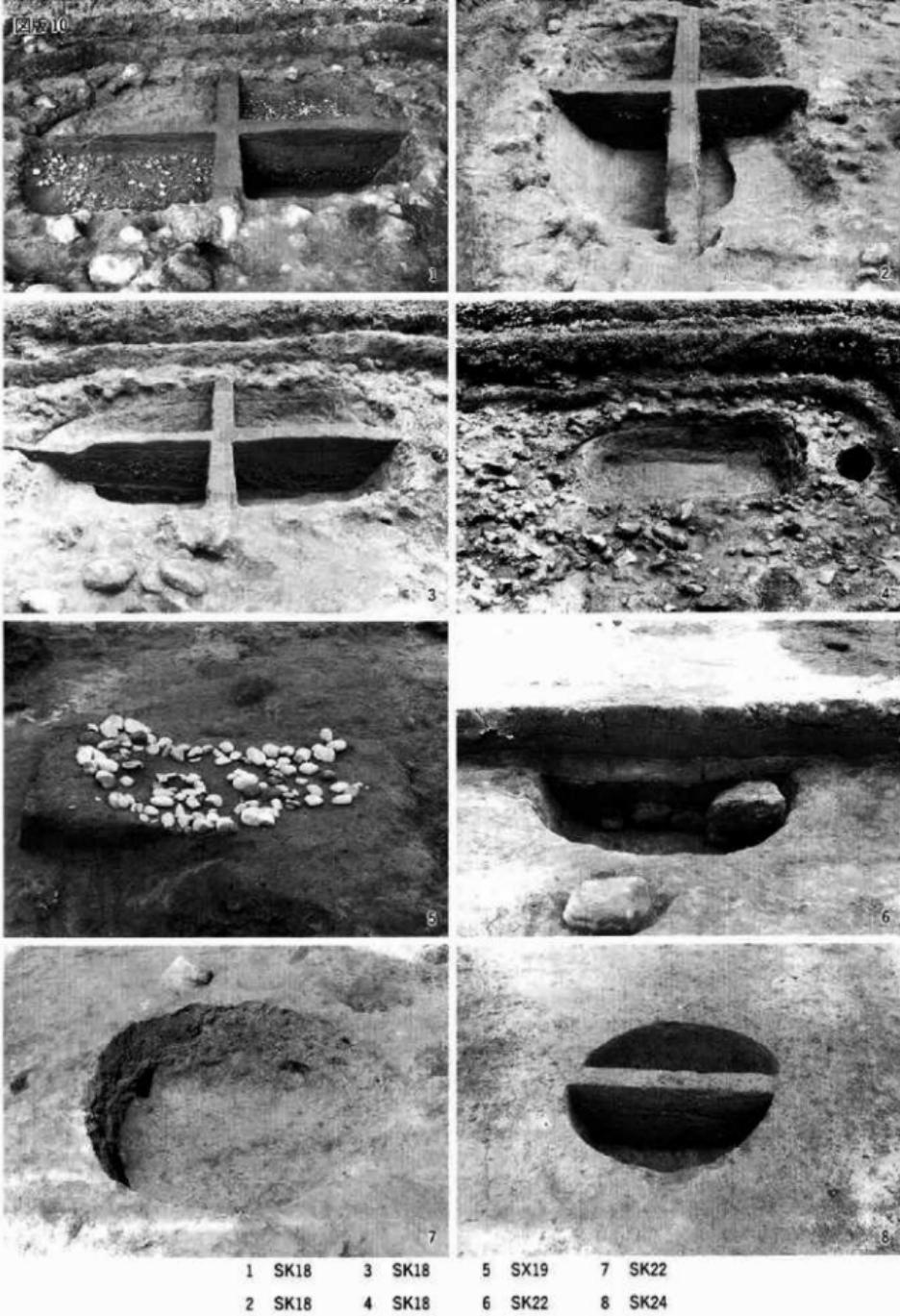
8

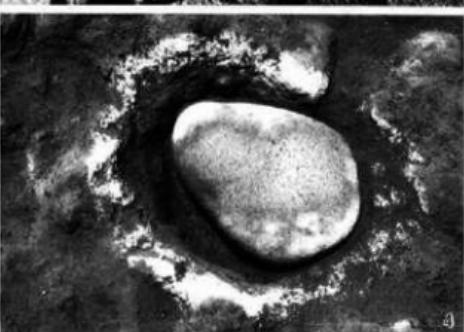
5 SK9

7 SD10

6 SD10, SD17

8 SK11





1 SB27

3 SK44

5 発掘風景

7 発掘状況

2 SK44

4 ピット

6 発掘風景

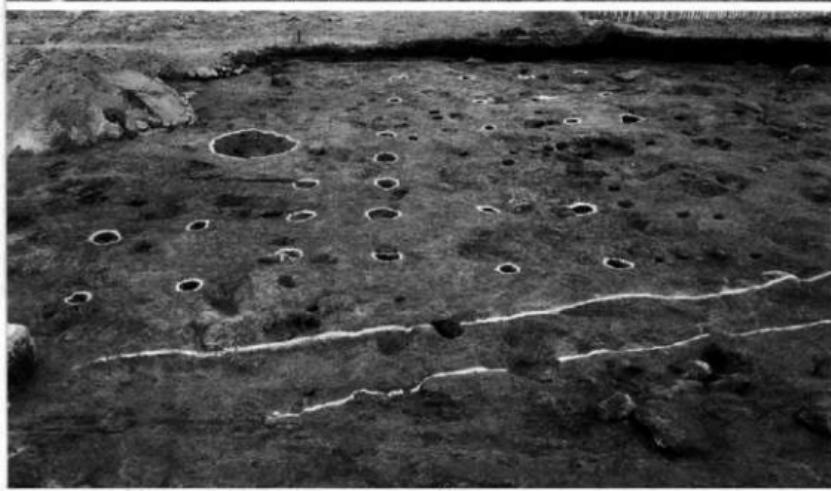
8 発掘状況



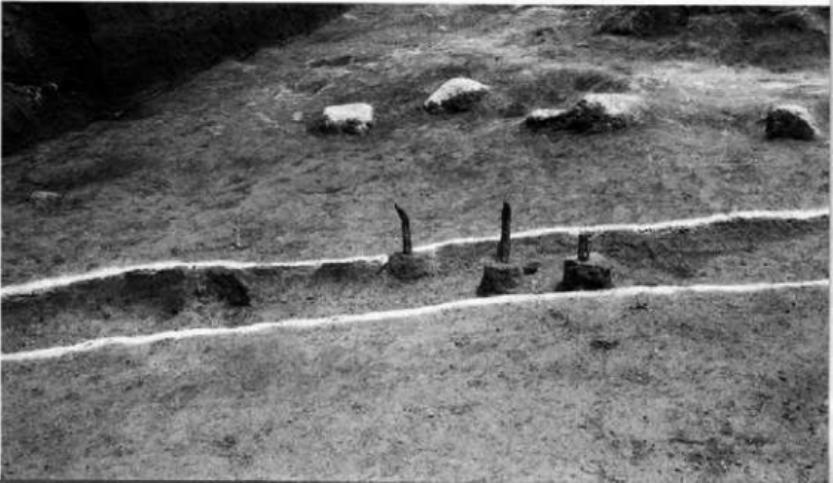
1 SB28



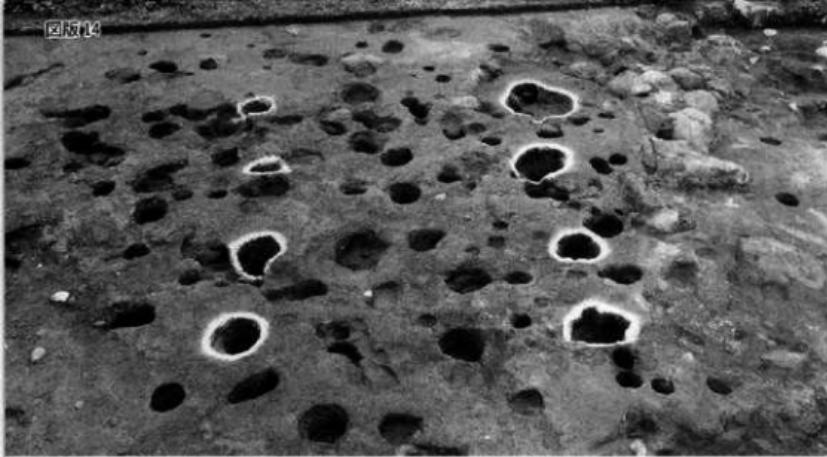
2 SB29



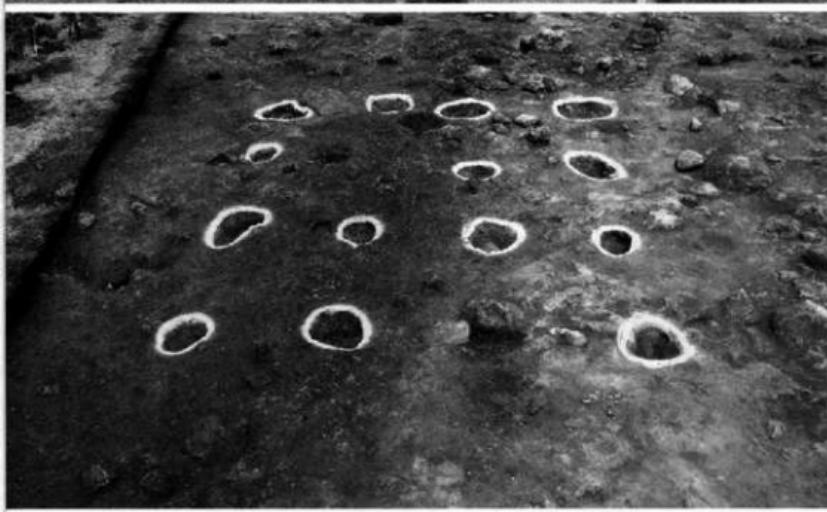
3 SB29, 30, SK22



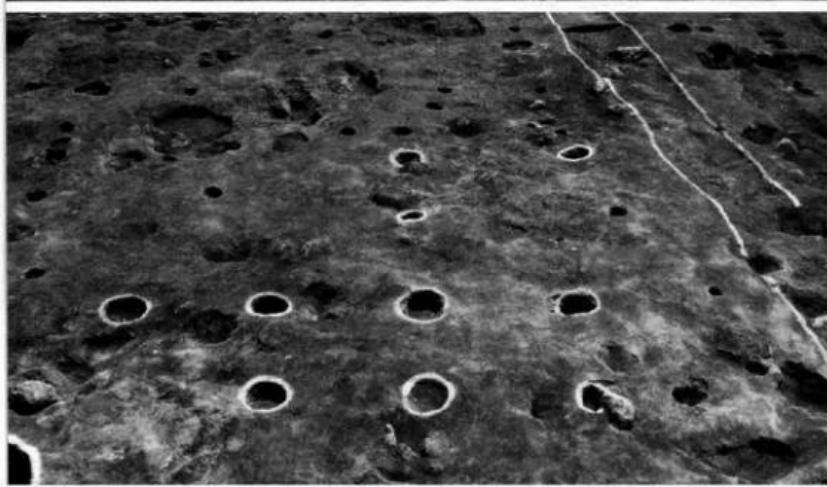
图版14



1 SB15



2 SB23



3 SB30



1 SB37

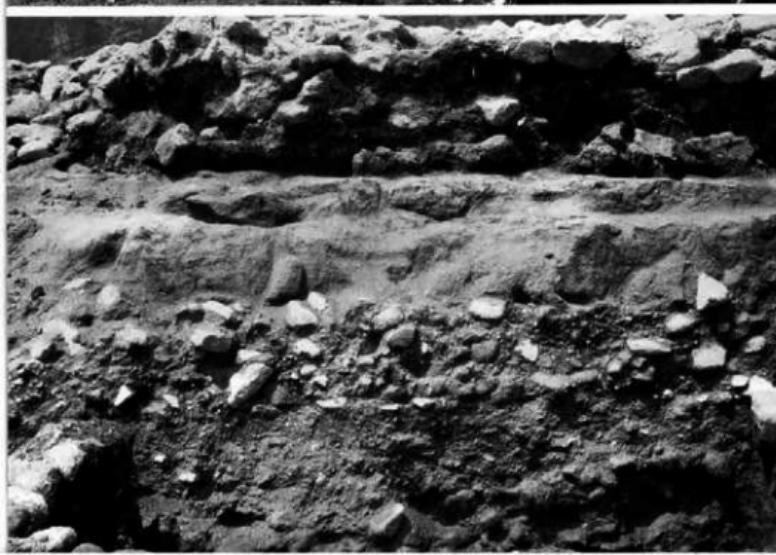
2 完掘状況  
(昭和60年度)3 完掘状況  
(昭和61年度)



1 火碎流堆積状況  
(東側崖縁)



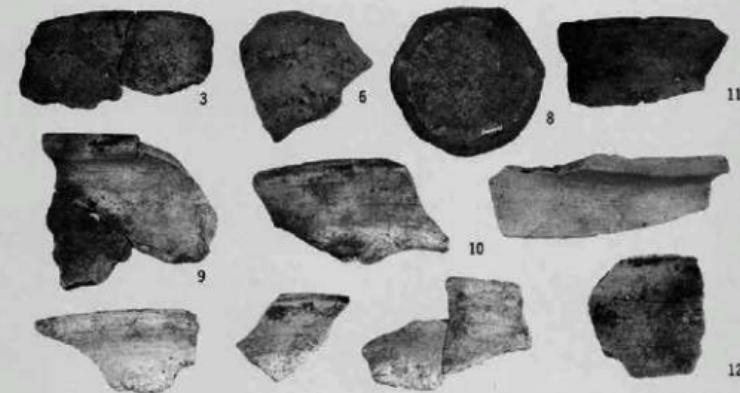
2 火碎流堆積状況  
(東側崖縁)



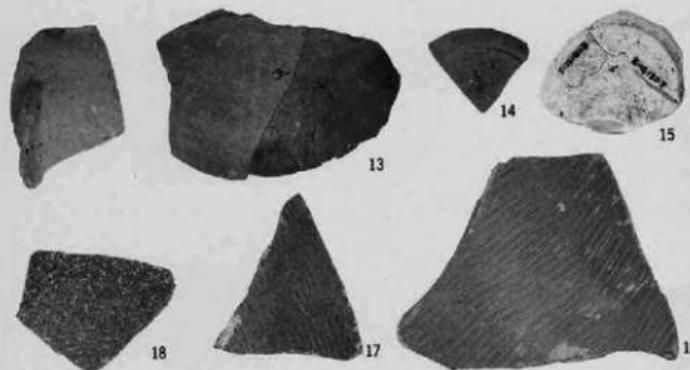
3 火碎流堆積状況  
(東側崖縁)



1 繩文土器  
土師器



2 土師器



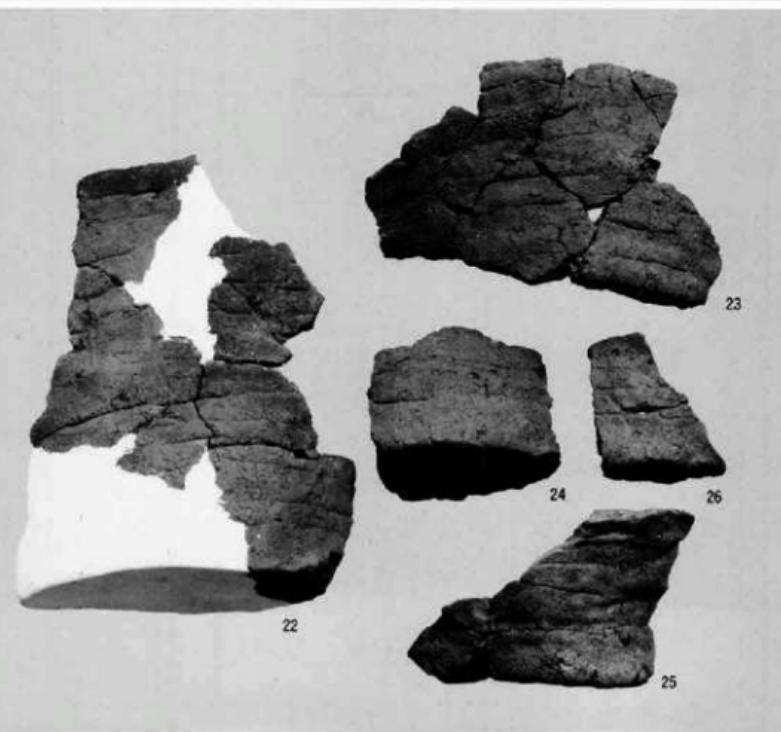
3 須惠器

3 : 1



21

1 製塙土器



22

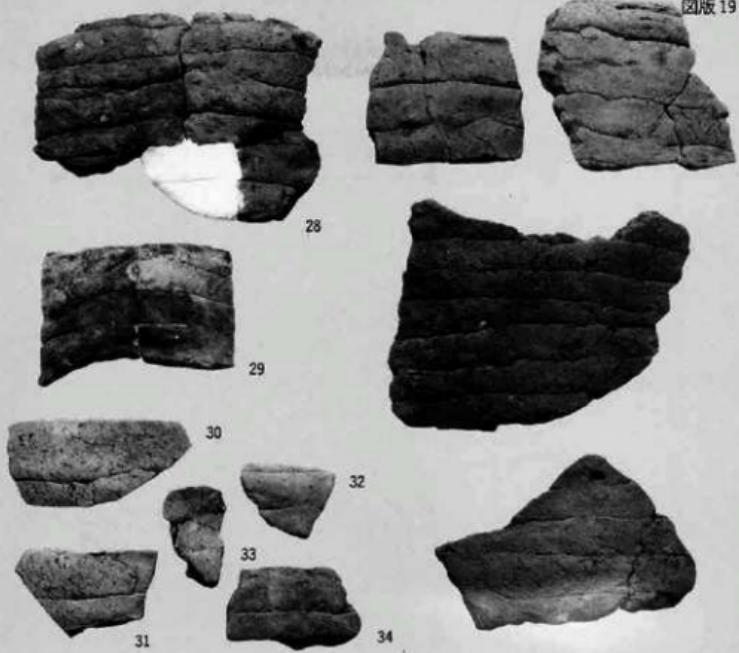
24

26

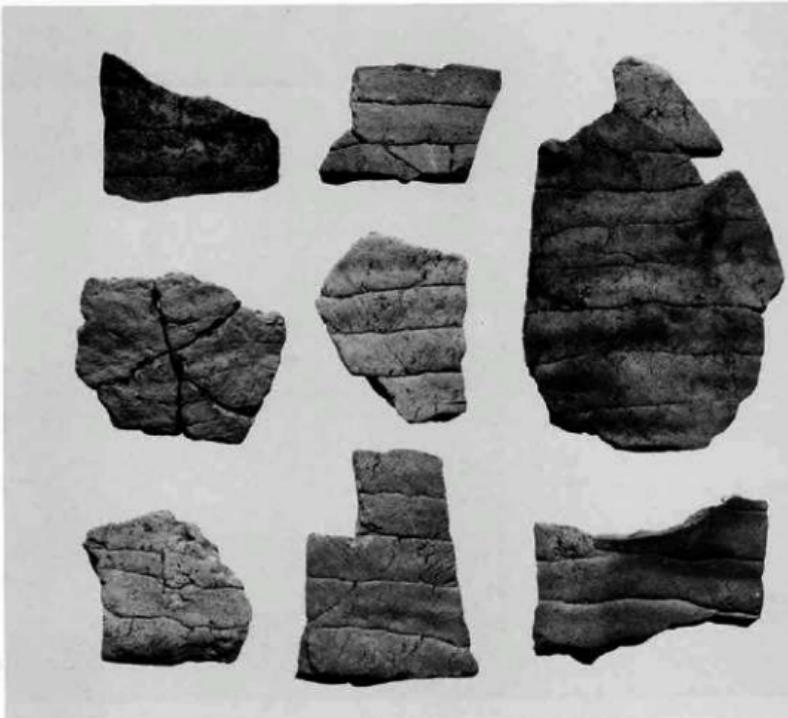
25

2 製塙土器

3 : 1

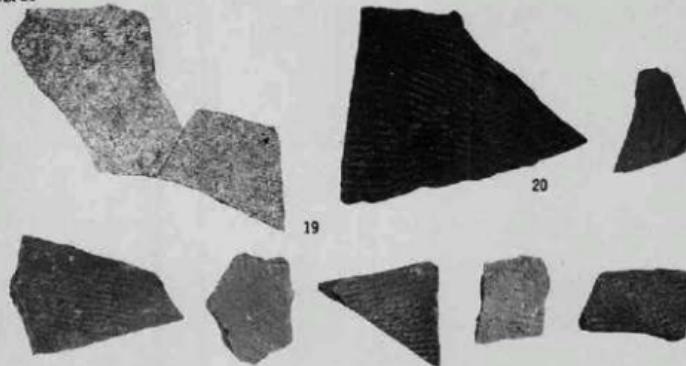


1 製塙土器

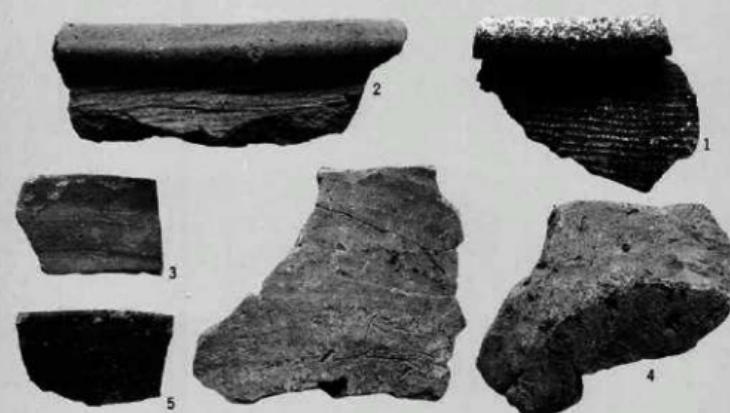


2 製塙土器

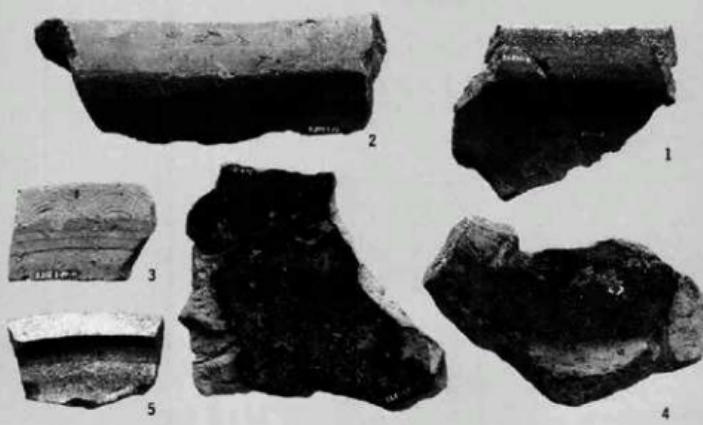
3 : 1



1 須惠器

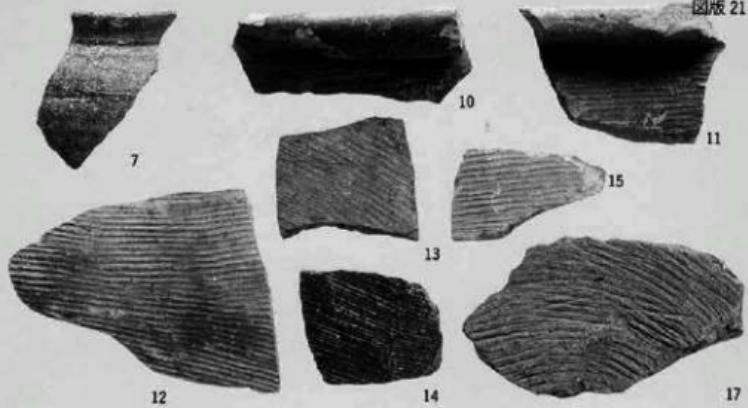


2 珠洲焼

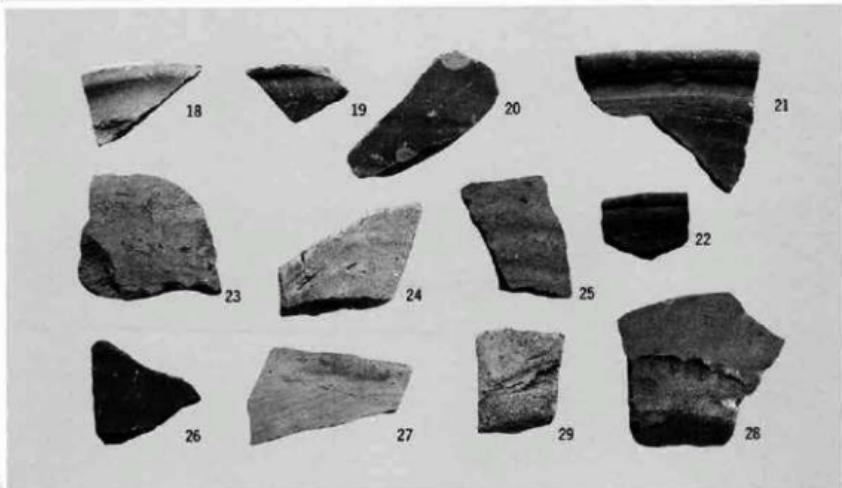


3 同上裏

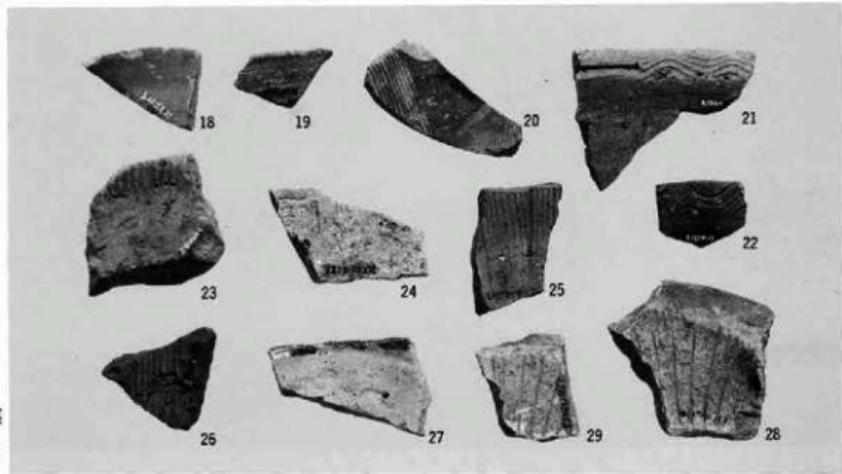
3 : 1



1 珠洲焼



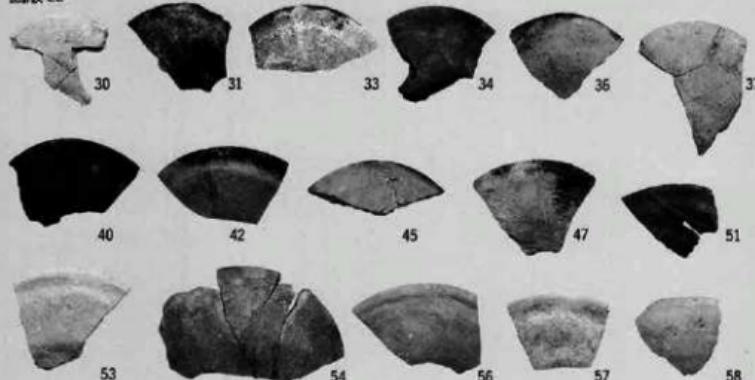
2 珠洲焼他



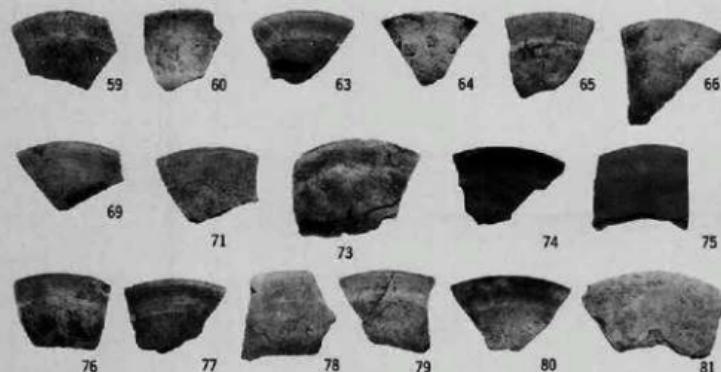
3 同上裏

3 : 1

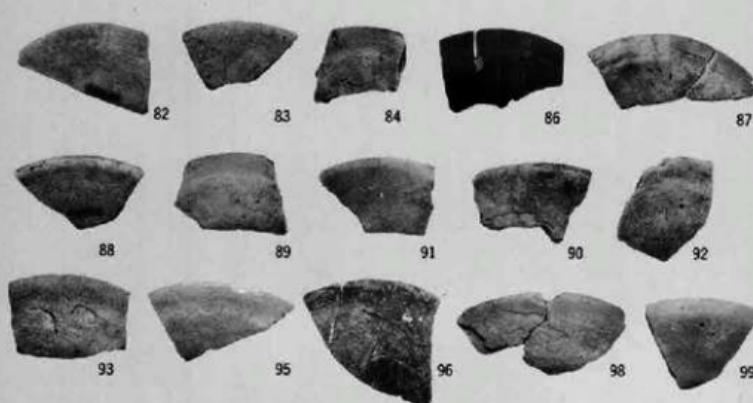
図版 22



1 土師質皿

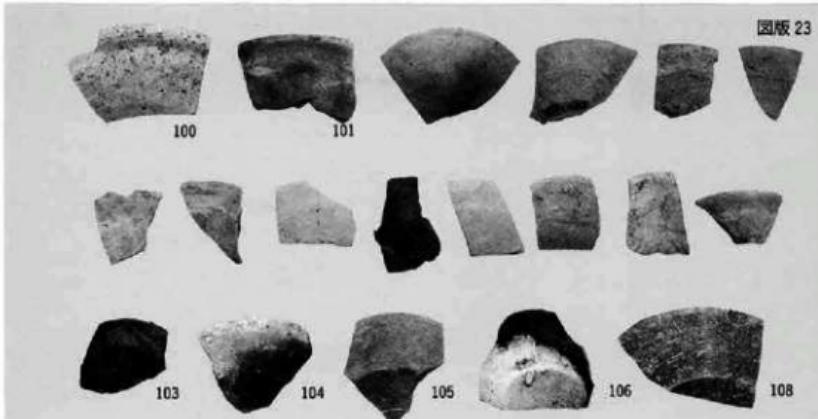


2 土師質皿



3 土師質皿

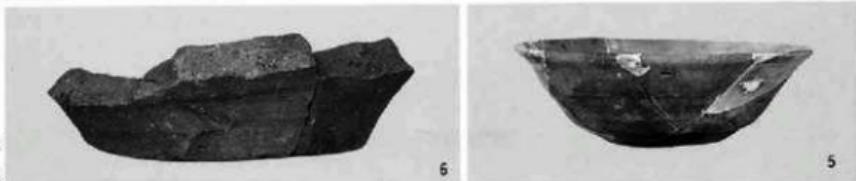
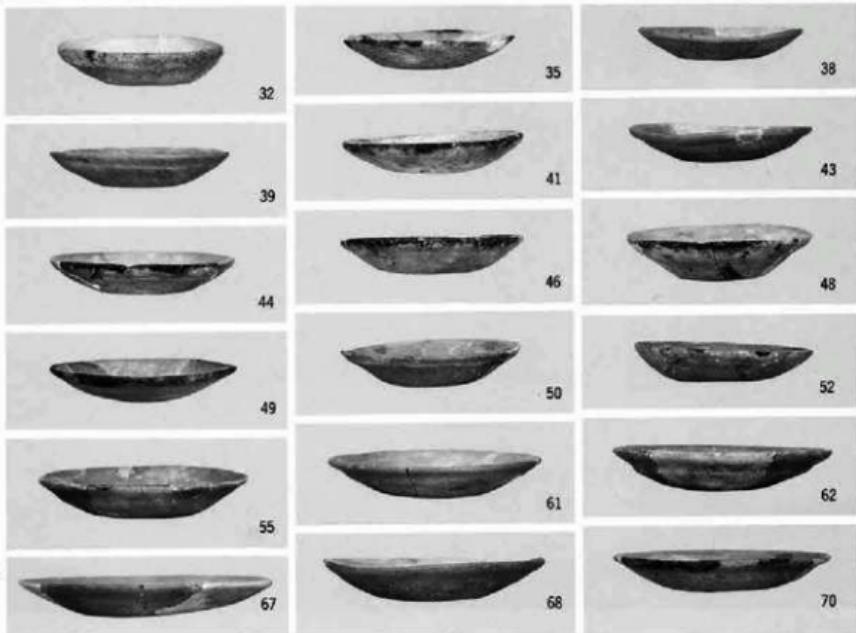
3 : 1



1 土師質皿



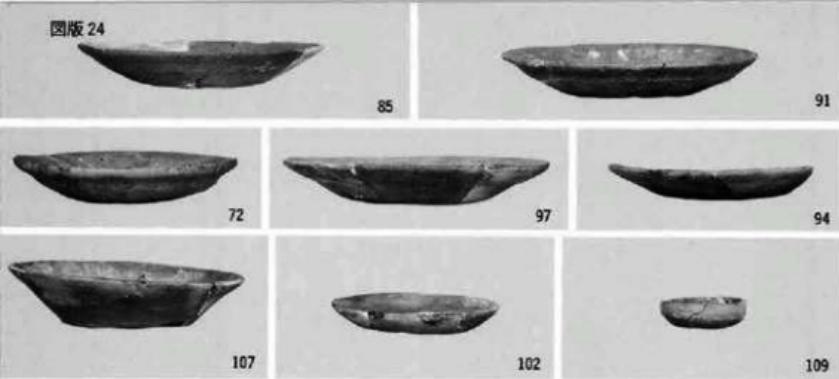
2 土師器

3 左：珠洲燒  
右：土師器

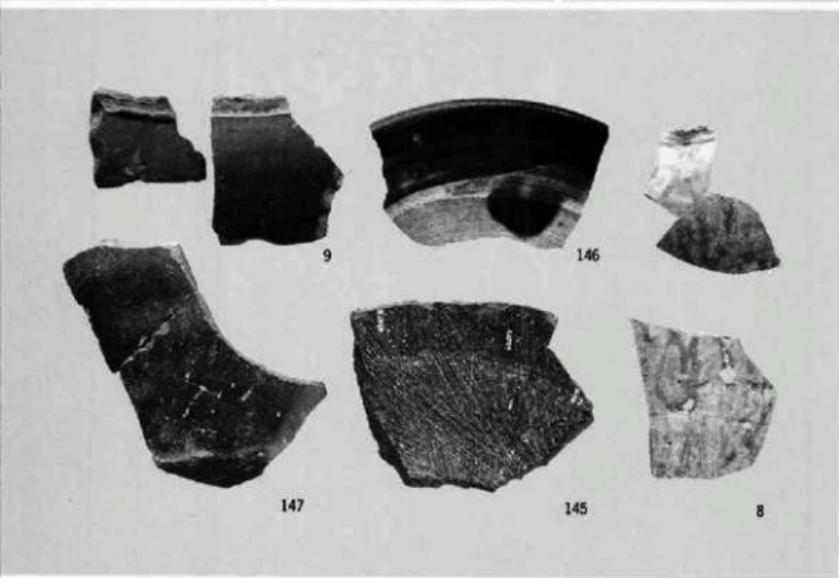
4 土師質皿

3 : 1

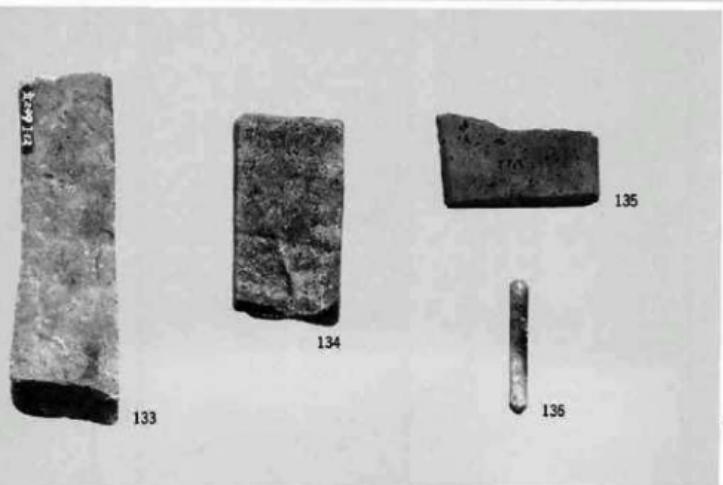
圖版 24



1 土師質皿

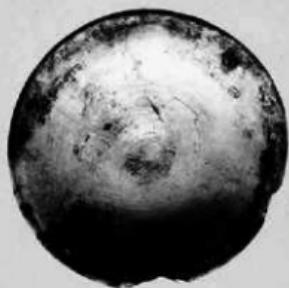


2 瓦質土器他



3 破石他

3 : 1



1 土師質皿

46



2 土師質皿

41



3 土師質皿

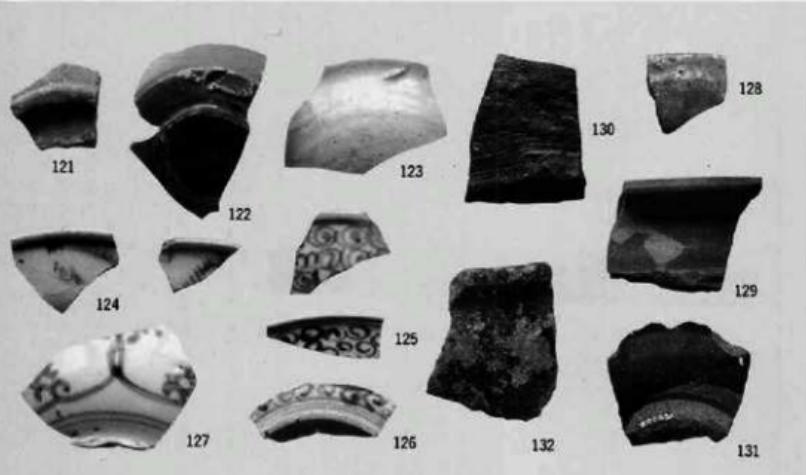
2 : 1

43

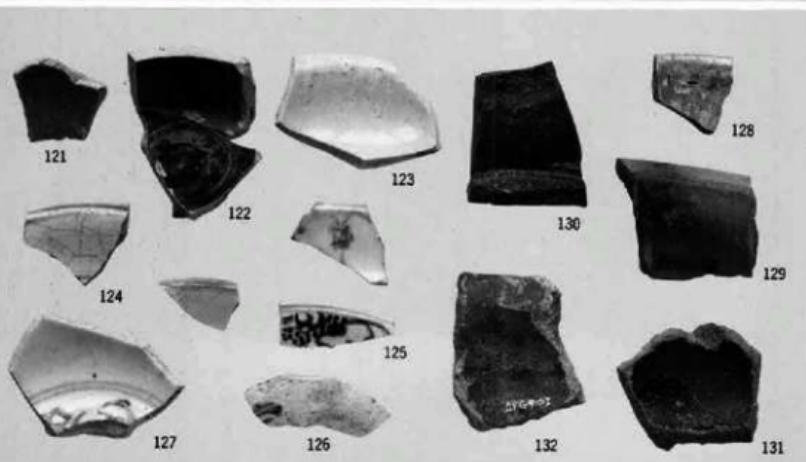
43



1 青磁



2 青磁・白磁  
染付他



3 同上裏

2 : 1

1 石臼

羽口(平安)他



140



137



139



144



139

2 石製品



143



141



142

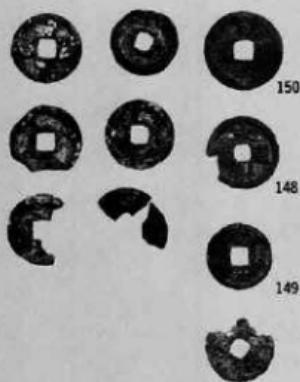
3 石製品

144, 4 : 1

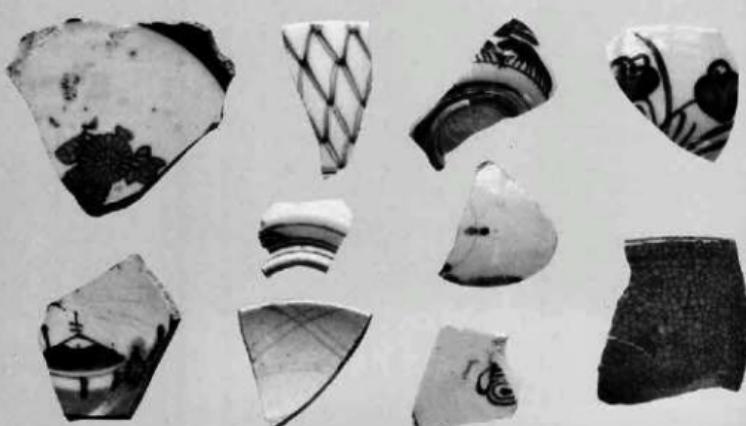
他 3 : 1



1 越前系陶器  
(3 : 1)



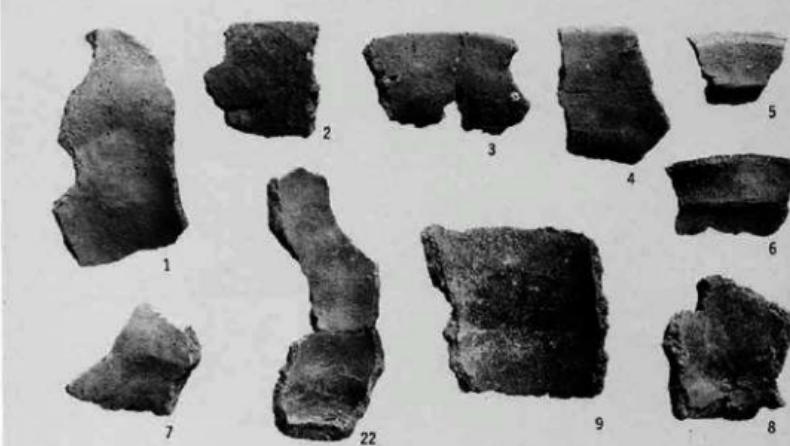
2 左：銭貨 (2 : 1)  
右：志野焼他  
(3 : 1)



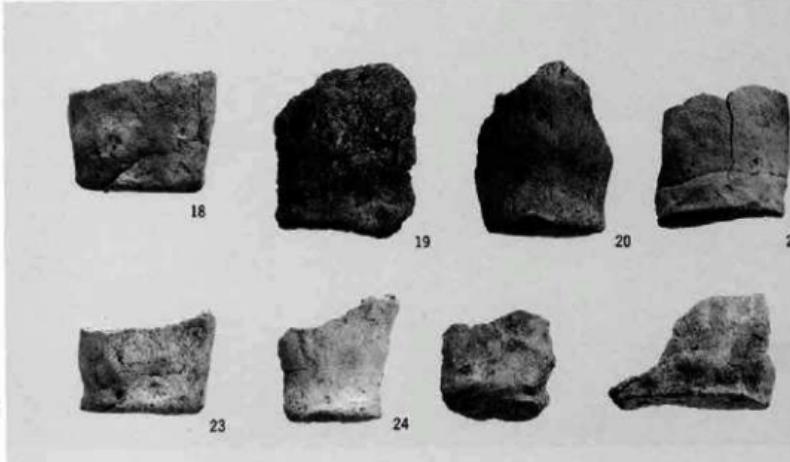
3 近世染付 (3 : 1)



1 製塙土器



2 同上裏



3 製塙土器

2 : 1



1 製塙土器  
(底部)



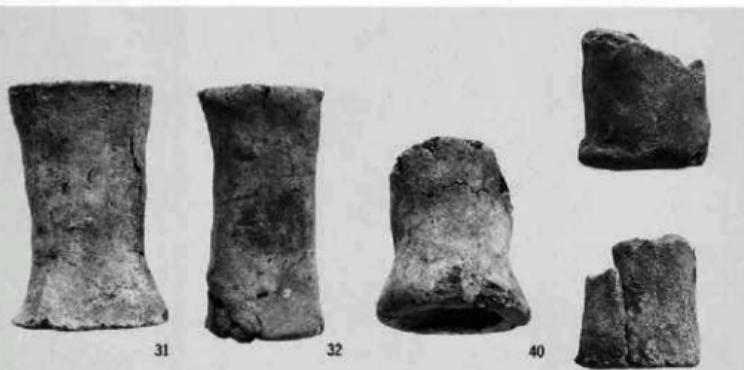
27

28

29

30

2 脚台



31

32

40

3 脚台



41

42

43

4 脚台

2 : 1

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第49集

北陸自動車道

糸魚川地区発掘調査報告書 III

立ノ内遺跡

昭和63年3月25日 印刷 発行 新潟県教育委員会  
昭和63年3月31日 発行 新潟市新光町4-1  
電話 (025) 285-5511

印刷機 第一印刷所  
新潟市和合町2丁目4番18号  
電話 (025) 285-7161

新潟県埋蔵文化財調査報告書第49集

立ノ内遺跡

正誤表

頁	行	誤	正
40	20	g 櫃列	櫃列
53	1	栗島の茂崎鼻遺跡	栗島の茂崎昌遺跡
68	19	本間尊晴・計良勝範	本間嘉晴・計良勝範